

506

205

9 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10¹⁹ 1 2 3 4 5

始



子-3619

506-205



本

集

上



緒言

脚本は歌舞伎に伴ふ狂言の特稱にして、演劇の仕組、舞臺の模様、役者の臺詞等を詳記せるもの、即ち所謂臺帳なり。蓋し夫の操芝居に於ける淨瑠璃院本と其性質を同じうし、而して更に一層西洋のドラマに類似せるものといふべし。

脚本の筋は之を狂言の世界と稱し、分つて四となす。王代、時代、御家、世話物これなり。王代とは禁中公卿等凡て雲上の事件を脚色せるもの、時代とは専ら源平、北條、足利、菊池、大友等の軍記に基き、それら武將の名に假るもの、御家とは當時の武家に起れる騒動、復讐等の大事件を仕組めるもの、然して世話物とは男達、角力、心中等、材を平民社會の三面記事的方面に取りたるもの也。それらの脚本中には、特に歌舞伎の爲に創作せられたるものありと同時に、丸本物と稱して、操芝居の淨瑠璃を歌舞伎劇に轉用せるもの亦尠なからず。脚本が單に芝居の臺帳として俳優の手控に備へられたる境遇より脱出し、更に一般の讀み物として刊行せらるゝに至れるは、蓋し西澤一鳳に生まれり。世に之を正本と稱す。

脚本も亦他の多くの徳川文學と等しく、先づ大阪に興り、後江戸に榮えたるものにして、淨瑠璃作者の泰斗たる近松門左の如き、亦其始め筆を脚本に染めたり。然れども淨瑠璃芝居に於ける作者の位置が遠く人形遣を凌駕せるに反し、歌舞伎にありては、狂言作者が常に役者の下風に立ちて其願使に任ずるの風なりしを以て、心ある文士の之が作者を以て自ら喜ぶ者殆んどこれ無く、従つて其作品も亦夫の淨瑠璃に比して甚だ遜色あるを免れず。其稍々見るべきものを得たるは、後期の初に當りて西に並木正三あり、東に津打治兵衛出でたる後也。今本文庫に收むるに當りては、それら幾多の脚本中、最も人々に膾炙せるもの、其脚色の讀みものとして喜ぶべきもの等十種を選び、之を上下二巻となす。而して上巻には大阪もの五種、下巻には大阪より江戸に下れる並木五瓶の所作二種と共に、江戸作者の作品三種を載す。今上巻に收むる所のもの左の如し。

三十 石燈 始 並木正三、 寶曆九年。

伊賀越乗掛合羽 正三門下奈河龜助、 安永六年。

姉妹達 大礎 辰岡萬作、 寛政七年。

伊勢音頭戀寐刃 近松半二門下近松徳三、 寛政八年。

猿 曳門 出 諷 作者未詳、或は奈河龜助の孫弟子たりし篤助、寛政十年の頃の作か。

これら脚本中には、所謂善良の風俗を亂し、文教に害ある語句の隨所に散見するものあり。今本書を刊行するに當りては、原文の特色を損ぜざる程度に於て、悉くそれら不穩の文詞を削除若しくは改訂せり。加之假名遣を一定し、宛字の妥當を缺くものを改め、又會話に劇中人物の名字を冠する等、努めて讀者の理解に便せん事を期したり。

大正三年七月

校訂者 南 茂 樹

脚本傑作集 上目録

三十石燈始……………一—一四八

序幕 御殿の場……………一

返し……………三〇

第二幕目 劍術仕合の場……………三九

第三幕目 揚屋の場……………八八

返し……………一一八

第四幕目 淀與三右衛門屋敷の場……………一二〇

讀賣 伊賀越乗掛合羽……………一四九—三二二

口明……………一五〇

二ツ目返し三ツ目……………一六四

四ツ目返し六ツ目マテ……………一八二

七ツ目……………二一〇

八ツ目……………二三六

返し……………二四二

九ツ目……………二四六

十段目 道行……………二八〇

十一段目ヨリ大切マテ……………二八四

下割坂 姉妹達大礎……………三二三—五四〇

口明……………三二五

返し……………三三二

返し……………三六三

返し……………三八一

二幕目……………三八五

三幕目……………四一八

返し……………四二五

返し……………四四四

返し道具……………四五五

道行	四六〇
四幕目	四六四
五幕目	五〇二
大切	五一四
油屋おん	五四一
福岡貢	五四一
伊勢音頭戀寐刃	五四一
一幕目	五四一
返し	五五四
返し	五六〇
二幕目	五六三
三幕目	五九四
返し	六三三
猿曳門出諷	六四七—七一
上巻	六四七
返し	六七七

下巻……………六八〇

三十石艦始

狂言作者 並 木 正 三

序幕 御殿の場

役人替名	
一傾城花浦	市松
一揚屋才兵衛	友十郎
一淀與三右衛門	文十郎
一小性紋之丞	四郎五郎
一志賀左近	かつ
一與三右衛門喜蝶	吉太郎
一傾城總角	小伊三
一花滿縫之助	金三郎
一幣間小市	來助
一圖本辨之作	岩五郎
一熊本辨之内	次三郎
一記橋中將	彌平次
一石浦遊軒	貫五郎
一花滿憲法	大九郎
一其外仕出し	新九郎
	喜世三

○座敷 狂言

造物三間の間に社壇一面の玉垣、前に櫻幕引くと太鼓打ち懸る、面白や三保の津の浪といふ歌になる、向ふより紋之丞花浦唐子大勢太鼓にて踊り出る、跡より總角喜蝶ふり袖にて、喜蝶は烏帽子釣鯛持ち

三十石艦始

惠比須の心にて出る、總角は唐子打連れ、はうろく頭巾、袋かたげ槌を持ち、大黒の形にて、少しえびす大黒三社の様な歌にて所作事有りて仕舞かぐらになる、ト

内より「後室様のお入」喜「いざお入遊ばされませう」ト記内後室の形、中將は山伏立妙院、才兵衛上下にて出る、花浦紋之丞上へ通り次第に並ぶ。喜「後室様には御参詣でござりまする」記「一家中のもの大儀にこそあれ」ト圖書神主の形にて出向ひ、喜「後室様若殿様姫君様御参詣でござりまするか」喜「神主右京今日は神事勤大儀にこそあれ」喜「ハア」喜「誠に今日の御神事、私共まで斯様な悦ばしい儀はござりませぬ、追付御願が成就致しませうと存ずる故、たゞ御目出たう存じます」喜「横の戸さんの云はしやんす通り、わけて此の度の御神事は、一しほ神も納受と存じまする、若殿様の御行方も追付知れませうと存じまして、お目出度う存じまする」記「誠に此妹春山の家の事は、外に並びなき歌道の家、櫻木の家の藤太郎殿を掣に取り、是なる生駒姫に娶はせ、家を繼がせんと思ひし所に、藤太郎には傾城狂ひに身持放埒、其上國を出奔なされたとある、何卒行方を尋ね出し、家を繼がせん爲神いさめ、皆も神慮を仰いでたも、頼むぞよ」喜「廊通ひなさるよとあつて格氣する氣はなけれど、見ぬ戀にあこがれた藤太郎様、なんほう神様を祈つたととも、自らに添うては下さんすまいと思つて、私や悲しうござりまするワイ

な」喜「なぜ其やうに覺召ます、其お氣をおいさめ申しませう爲、皆も神慮を祈りまするではござりませぬか」喜「それく、主水が申しまする通り、皆神慮を祈りまするも、御氣色がわるうござれば母様への不孝、姉様なぜお氣をいさめさつしやりませぬ」喜「いやモウとかく姫の歎きやるが悲しきゆゑ、先達て立妙院を頼み、祈禱を誂へ置いたが、立妙院は怠らず祈禱をしやるで有らうの」喜「仰の通り、二七日の間、壇を飾り、大聖不動明王に祈をかけ、姫君安全家繁昌の御祈禱を致します」喜「オ、大儀く」喜「イヤ何ほう若殿の行方が知れても、傾城ぐるひに國を出奔する程の大だはけ、何の神も納受ござらうぞ、コリヤやはり立妙院の勸の通りになされたがよからう」喜「軍藏殿今のお詞のはし何とやら藤太郎様を蔑したる一言、何すればお家が治りまするな」喜「妻菊女のしつた事でない、すつこんでるやれ」喜「外記之進が娘妻菊、申す事は申さねばなりませぬ」喜「オいうて聞さう、若殿が此お家繼さしやつたというて、役に立たぬ藤太郎殿、さつぱりと縁を切り、後室様の里の子、大藏様をつがすが上分別さ」喜「そりやどなたの御捌で」喜「此立妙院が申上げた」喜「立妙院殿、スリヤこなさんがお家の指圖さつしやるのぢやの」喜「御家が大切に申上げたが何んとした」喜「妻菊さん」喜「横の戸さん」喜「モウ詮議せにやならぬワイな」喜「大方様子が知れて来た」喜「立妙院殿」喜「ちよつとお目に懸りませう」喜「身どもにか」

ト向ふへ出る。「何の用ぢや」繩懸ける、手をまはしや」中「だまれ、此立妙院には何の咎あつて繩かける」鳥「いふまい里の子戸根五郎と同腹になつて、お家を呑うとする大悪人、遁れぬ覺悟」喜「黒い此目でにらんで置いた」中「此立妙院には悪逆といふ何ぞ證據があるか」鳥「神主右京、さいぜんの箱是へ」鳥「ハア」ト神主右京箱を持出る。鳥「此箱覺があらうがの」中「此箱を」ト立廻り有る。鳥「掛奉る願主立妙院」中「もううぬを」ト切懸ける、箱にて受る、箱しかけて破る、中より薬人形願書出る。鳥「ソレ横の戸さん」喜「合點でござんす」ト願書を取る、オ夫を」ト横の戸にかよる、立廻あつて軍藏を押へ。喜「敬つて申す願書、櫻木藤太郎を三七日の間に命を取りたまへ、立妙院是を承る、願主何某」オ中「夫を」ト立廻あつて、二人を見事に押へ括る。記「さて、大切な立妙院になぜ繩を懸けたぞ」喜「後室様、あまり賢人だて仰るな、若殿様をのろうた立妙院、夫に組する軍藏繩かけたが誤りか」鳥「スリヤ御詮議を其元がなさるよぢやまで」喜「急度いたしてお目に懸ませう、此詮議したら、此何がしと書いてある願主も大かた知さうなもの、ナア後室様」記「されば」ト氣味わるくいふ。鳥「サア有様にいへ」中「しらぬ」喜「しらねば斯ぢや」ト刀の鞘にてこじる、兩人苦しき思入。記「やれまて、エ、憎い奴らぢやなア、此様な大それた事を企むやつらぢやによつて、事あらはれたらコリヤ後室様の云

付ぢやと、自に爲であらうがナ、怖いやつぢやなア、去ながら身に取つて覺えのない事、必ず疑ふてばし下さるなや」喜「そりやさうありさうなものぢやてや」ト兩人顔見合せ。記「こりやく、兩人、餘り強う詮議して、姉様某を不孝ものに致すなよ」花道「兎にも角にもみづからがある故、多勢の難儀、さらば」ト自害せうとする、觀負留める。鳥「おまちなされ妻菊どの、姫君様が自害なされますと、忠臣かへつて不忠となりますぞ」記「オ、さうぢや、強う詮議すると姫は死ぬ、そちは主殺となるがや」鳥「エ、横の戸さん、コリヤまあ何とせうぞいな」喜「現在しれてある事を、ハテ仕合な後室様ぢやなア」記「やれ嬉しやの」ト侍走り出て。侍「申上げまする、珍しきほうのし力持を致しまする、中々面白い事でございまする、お姫様のお慰にと存じ、ひかへさし置ましてござりまするが、返しませうか、いかど仕りませう」鳥「幸ひ、姫君のよいお慰み、是へ通さつしやい」侍「ハア」鳥「觀負之丞様後室様には奥へお入あられませう」記「ヲ、足元の明いうちに奥へ行きませう」喜「エ、仕合な」記「コリヤたつていふと姫は死ぬぞや」皆々「先お入なされませう」ト神樂になりみなく入る、花浦唐子残りる。子供「アレ今の力持がくるワイなア」子供「ほんになア」ト輕業の三味線になる、ト縫之助力持の形、小手脚半にて樽をかたけ、其後に黒き衣裳を著け小市出る。記「サア、評判の力持ひやうばんの」

「コリヤ〜姫君へのお慰に、曲持を致してお目にかけい」
 畏りした侍「お氣にさへ入れば褒美はいか程でも下さると、早く〜」
 東西〜、是迄力持はあまたござれども、重い物をさし上げますばかり、此度は曲さしてござりまする、ハリトウ、ト輕業の三味線になり、小市後にて使ふ。圖「よいよく〜」
 留めました處が野中の一本杉、返して参りますとあまの釣舟、ハリトウ〜」
 三味線にてとめる。御はうびにどつと褒めた。圖「よいよく〜」
 是より山がらの餌おとし、鶯の谷わたり、あなたこなたへ通うて参る、ハリトウ〜」
 是よりいろ〜樽を使ふ、トいろ〜をかき事あるべし、縫之助女形にぬれる、小市一人にて曲持してゐる、圖書胸りして反打ちならむ、小市三味線に合せ顛ひ〜樽をつかふ、力持女形に突飛され、圖書に抱つく。圖「何ひろぐ大盗人め」
 眞ごゆるるされませ〜」
 橋懸りへ遁る。圖「おのれらは人をうつけにした奴ぢや」
 眞力持でござんすワイの」
 圖「まだ〜めんえうふしぎな事をすると思へば、後から黒いものを著て遣ひをる、あれで何でもなる筈ぢや、大盗人めが、こよには叶はぬ出てうせう、うせぬか、まつ二ツにするぞよ」
 眞「アイ〜さつぱりとしくじつた」
 花「これアノ男にちよと尋ねたい事がある、爰へ招でたも」
 圖「お召なされると、すつと出ませい」
 眞「ハイ〜御用でござりまするか」
 花「此守袋はそなたのか」
 眞「ハイ私がのでござりまする、エ、

今の内に落したさうにござります、こつちへ下さりませ」
 花「此守袋にて藤太郎様参る陸奥と書いてあるから、そんならお前は藤太郎様ぢやナ」
 眞「夫をしたこなたは」
 花「云號の生駒姫でござんすワイナア」
 眞「南無三寶」
 ト遁んとする。花「それをソレ止めてたも〜」
 眞「マア〜」
 お待なされませ」
 花「エ、聞えませぬ藤太郎様、お前がお館へお入なされませぬゆゑ、母様がさま〜の悪逆、お前をのけて私や外に男を持つ氣はござんせぬ、是ほどに思つてゐるものを、胸慥なお心入でござりますナア」
 眞「身持放埒ゆゑに國を出奔して、所々方々とさまよふうち、言かはした陸奥も死る、何面目に妹脊山の家へ世繼に入らうぞと、心は出家になつて居る、何面目にと存じたに、恥かしい對面をしますワイのう」
 花「かうお目に懸りますから、何ほうでも離しは致しませぬ、お止りなされて下さりませ、但し死にませうか」
 眞「サアそれは」
 花「死にませうか、サア〜」
 眞「何でござりまする」
 圖「扱は櫻木藤太郎殿ぢやよナ、此通り戸根五郎様へ注進」
 トかけ出る、小市圖書を切り止め刺す。眞「これは」
 小「御不審御尤、私儀は先年御勘當を蒙りし谷坂兵内が倅、和田右衛門と申す者でござりまする。若殿出奔なされたと承り、所々方々を尋廻り、何卒勘當お詫の願ひ、父が存念を立てんと存じて、若殿とも存じませず、只今まで附添ひをりましてござるも武運を開くべき瑞相、何卒昔の勘當御赦免下さり

ませうならば、有難う存じまする」
 舞「ムウ扱は先年勘當したる谷坂兵内が倅和田右衛門で有つたよな、勘當ゆるさいで何とせう、随分忠義を勵んでくれよ」
 小「エ、有難うござりまする」
 舞「様子は残らず承りました」
 ト兩人出る。舞「ヤア二人の衆か」
 喜「たとへいかやうに思召ましても、姫君様をお心根不便と思召し、お止りなさらねば武士の道は立ませぬ」
 舞「其上お前が國へお入なされませぬゆるゑ、後室様の悪心、里の子戸根五郎様を世に立てんとさまぐの企、お前のお心一ツで國が亂れまする、サアなんと」
 舞「成程姫の心といひあやまつて、姫と夫婦になつて此家國を治めうワイの」
 舞「スリヤ御得心でござりまするか」
 喜「エ、嬉うござりまする」
 小「若殿御得心の上からは、御祝言の壽き御祝儀く」
 トすりかね太鼓「女房よんだ川へほつこめ」
 ト辨之作家來多勢引連れ、水あぶせのなり、もみの頭巾にて手桶持出る。舞「戸根五郎様、心得ぬてい何故これへお出」
 舞「何ゆるでもない、若殿藤太郎殿と姫と祝言めさるよと聞いたによつて、祝うて水をさし上る」
 舞「まつた藤太郎是にをりまするぞ」
 舞「さう見たによつて家來共」
 侍「女房よんだ川へほつこめく」
 小「まつた最前より、若様を附廻し何とする、寄つたら爲にならぬぞ」
 舞「よい推量、姫と夫婦になつて家を繼がうと思つた所に、思ひよらぬ藤太郎、打殺して家國治める、早く残らず腹を切れく」
 小「さう有らうと思つた、遁れぬ所覺悟せ

い」
 舞「家來ども合點か」
 侍「畏まつた」
 トみなく立になる、三味線太鼓入皆々おひ込みおうて出て敵役を押へて。舞「國の敵覺えたか」
 小「若殿めでたうお國入り、先づ此場はおたち」

トわき幕になる、内よりしやぎり太鼓、みなく道具片付ける、内に打ませうしやんくくと手を打ち黒幕引くと一面の障子屋たい揚屋の座敷の體、残らず衣裳著流し、東山はしの寮座敷のてい、向ふり川浦遊軒、花滿憲法出て。

舞「出來たく、けうといものであつた」
 遊「イヤモウけうといの何のと、かやうなものではござらなんだ」
 舞「お銚子わつさりとは是で一ツ呑みませう」
 遊「さてく皆々きつい名人、わけて縫之助殿はなかくあぢをおやりなさるよ、本の役者と見えまする」
 舞「弟はえらうようござりまする、ハ、ハ、ハ、」
 遊「今の妻菊になつたは傾城の總角ぢやな」
 舞「オ、恥し」
 遊「なんの恥しい事はない、身は禁裏の御用相勤める、川浦遊軒といふもの、折々は廓へ行くであらう、よく見知つたがよいぞよ」
 舞「かねくお名は噂してをりやんす、ちつと廓へもお出なさんせえ」
 才兵衛「イヤもうやつて見やうと思へども、サア狂言にかよるが否や、一口もいける物ぢやござりませぬ、小市く」
 小市「エ、」
 才「貴様は太鼓持程有つて、面の皮が厚うてえらうえい」
 小市「何を才兵衛さんのいはんすやら、私やモウお前のぱちくとものをいはんすやうに云つて見やうと思つて

も、ねからいくものぢやござりませぬ、イヤ夫はさうと、太夫様がたの唐子踊、皆出来ました出来ました」○「ほんにこちらの兄様はようものをいはんす、私やモウ恥しうてなるこつちやなかつたワイな」オ「何を吐すやら、千代菊さんや禿共をみやい」傾城花通「いやモウ餘りほめて下さすな、冷汗が出るワイなア」同今「モウ今度の狂言は、かるい役に使うて下さんせ」馬「ひよつと若し仕損はうと存じて、手に汗を握りましてござります」圓「扱かの辨之作が敵役はしぶとうてえらふ可い」兼「何圖書様のいやがらすやうな事仰りまする、私が主人縫之助殿さへなされますもの、己れやれ當ててくれうと存じましても、とんと出ると夢中でござりまする」圓「いやわれはわれとも思ふが、中將様にはいつの間に稽古なされました」中將「何とえらいものであらうがな、自由に芝居は見にゆく事ならず、茶屋へ往て役者を招びよせ、芝居事ばかりはさす物ぢやないて」記内「惣じてお前様は常平生に、斯様な遊所へお出なさるゝ事はならぬでござりませう」中將「イヤもう近年は役人どもが詮議してどうもならぬ、それを無理に遊びにゆくと、おいらには得構はず、先の茶屋へ崇りをるに依て、いつぞやのやうに川東のものになるてや」兼「イヤ折々にはチト遊興にお出なされたがようござりまする」遊「いやモウ貴方がたを手ばなしますると、一向方圖がござりませぬ」中將「あれ御所の内から彼のやうに云ふによつて、外の者はな

はいふが、憲法聞てたも、此間も和泉式部の梅山が所へ揚弓にいたれば、役人共に逢うて何がいちつてこました、此方がやうな公家はさむしい、ちつと遊ばねばたのしみがない」兼「最前ちらりと見れば、淀の城預り奥三右衛門が妹の喜蝶でないか、此東山へは何してお来やつた」喜蝶「アイお前は今度鎌倉より室町様へ、御参内にお立なされます、定めし道中何かと御苦勞にござりませう、殊に縫之助様もお供に上京なさると有る、ちよつと御見舞にゆけと、兄奥三右衛門殿の云付られまして、河原町へ参りましたれば、此東山へお出と承りました」兼「見舞に來た所を直にひつ捕へて狂言に遣うたぢやまで、酷いものぢや」圓「何のむごい事がござりませう、廓の者さへ呼よせまするもの、コリヤ貴方への御馳走でござります」兼「ぢやと云うて、明日か明後日此方へ嫁入する大事の花嫁を、ハ、イヤ御引合せ申ませう、是は喜蝶と申して、淀奥三右衛門が妹でござります、則ち弟縫之助と娶せまして、一兩日のうち此方の國へ嫁入いたしまする、箱入の娘を狂言に出して御目に懸けました」遊「イヤハヤもう此間から種々の御馳走、今日は祇園町、明日は島原のと御馳走にあきみちましてござる」兼「さやう仰つて下さると結局迷惑に存じまする」圓「いやモウ拙者も山岡新田開發ぢやの、錢座名目錢などさまぐのねがひを取次いたしましたれども、此様な御馳走に逢うた事はござりませぬ、其代りには中將様、

明日の儀を宜しうなされて遣されませい」申なさらいでよいものか、諸事金でふいてあるもの、イヤナニ憲法、昔から使者にたつた首尾のよい天上はわが身であらうワイなう」夫は有難うござります」遊ちつと口廣い申分ぢやが、大内の事は立てうと伏せうと拙者が儘でござる、しくじらさうと思ふと、是に中將様がござるが、夫はく酷い目に合はせませう」兎角遊軒様宜しくお指圖を頼みまする」拙者が其元の領分、獅子飛を切落し、淀川へ流しましたゆゑに、五畿内とも水損とんとござらぬ、其元には關西往來の朱印を頂戴してござる故、定めて往來の御工夫でござらうのう」サア其儀に就きまして、私家内の騷動、記内一通り話しやれ」或いやモウ遊軒様が獅子飛をお切なされてより、湖は淀川へ落ちまする、只今までよりは十倍の水の早さ、船を立てましても權を立てましても、一向舟は上りませぬ故、長柄堤に舟を拵へ、あれより往來致させまするつもり、主人存じ付きましてござる」時に家中に關口平太、神道源八と申して屈強の若者二人ござりまするが、兩人ともに兎角火を拵つて中がわるうござりまする」中、ハテナア」其れゆゑ源八方には渡しを渡したらば、平太方の堤が成就致しまする故に、渡し普請を引延しまする、まつた、平太方には堤を築かば、源八方の渡しが自由致しまする、故堤の儀を引延しまする、兩方挑み争ひますから、自由に普請成就はいたしますま

いと存じまする」此兩人の中のわるいは、兵術の流義を争ひまする故でござりまする、なれども武士の身では不届な儀とも申されず、一方に片付きますれば生害にも及びまする、外に致し様もなし、お上へ對しては延引に及びまする、背中に腹とやら、何れ一人はすてねばなりませぬ、何とも困つた物でござりまする」其平太と申すは拙者が弟でござる」ハテナア」遊「拙者は算術に妙を得ましたる故、大内に相勤めまする、弟めは武藝に心掛けまする故、其元のお屋敷を勤めまする、狀通の使ばかりを致しまする」左様とも存せず粗相な儀申しましてござる」遊「なんのく、此上は平太源八兩人にはお構ひなく共、關西往來を致しまする用には、拙者割出し置きましたる、明日參内の折から書付を以てさし上げさつしやつたらば、こなたの抜群のお手柄になりませう、拙者がよろしう仕りませう、お氣遣ひなされませう」是はあまりのお志、然らば宜しうお頼み申しまする」然らば中將様、また跡の狂言の稽古、此間に奥で致しませう」申さうしよう」きてふコレサ喜蝶、何をうつかりとして居る、河原町の屋敷から送らさう、早う往にやれ」ト喜蝶小市耳語き居る。喜「イヤ私はもそつと居りませう」お前が左様仰るは、殿縫之助様に名残を惜まつしやれてか、殿にも一兩日の内には此方のお國へお入りなさると、マアお歸りなされたがようござりまする、ナア縫之助様」ト縫

之助總角と話して居る。舞「オ、何ぢやいな」記「何をなされてござりまする」舞「イヤ是は何を、オ、跡狂言は浅間が獄、其けいこしてゐるのぢや」舞「イヤ申し喜蝶様を淀へ歸しませうと申す事でござります」舞「オ、早う往んだがよからう」舞「イエ〜私や矢ツ張こよにをりまする」小市「イエ〜早う御歸りなされて、嫁入の拵へなされたがよからう」舞「私や往にやせぬ、否ぢやワイのう」舞「往んで貰はうぞえ、こよらあたり居て貰うまいぞえ」小市「サア〜往んだ〜」喜「構やんな、私や往ぬ事は否ぢや〜、やつぱりをる」舞「いやおくまい」舞「我がまた何で其やうに」舞「じたいこなさんが」舞「わが身はわしを」小市「あなたはマア」ト四人争ふ皆々とめる。記「これはマア何でござる」舞「是は」記「何でござりまする」舞「やつぱり狂言の稽古ぢやワイやい」記「稽古ならばもそつと静にしたいものナ」舞「是は何をなは〜と、喜蝶もゐたくばもそつとゐたがよい、稽古ならば奥へ往てしやれ」中野「サア皆奥へ往かう、縫之助奥へおじやいのう」舞「そんなら奥へ往てこまそ」舞「わしも往かう」小市「俺もゆく」舞「申し〜」舞「勝手にせい」四人「エイ〜〜」トせり合ひ入る。舞「何の事ぢや、俺も奥へいてこまそ」オ「俺も奥へ往てこまそ」舞「俺も奥へ往てこまそ」ト才兵衛、記内、辨之作入る。中「どりや奥へいて稽古せう」舞「御兩人これにござれ」ト皆々入る。舞「ハテさう〜しい」舞「イヤ浅間獄見物でござらう、

扱憲法殿、只今禮式を御指南申すによつて申しまするが、今の儀はどうでござる」舞「今の儀とは何の事でござる」舞「ハテ夫内々申した彼事な」舞「エ、夫は何時なりとも掛屋方より」舞「イヤサ金でなしに御内室の事で」ト口のうちにいていふ、内よりどろ〜。舞「エ、口惜やばらたちやなア」トどろ〜にて合方になりめりやす。舞「エ、狂言の稽古であやちがしれぬ、もそつと大きな聲でお聞せ下されい」舞「イヤサ大きな聲もしにくい、御内方のみゆき様のことさ」舞「エ、みゆきが事な、サアお望みならば進ませう、というたちやござりませぬか」舞「恥をいはねば理が聞えぬ、みゆき様はもと此京都の舞子、恥しながら拙者命も身も投打つて惚れましたれども、イヤすつたのもぢつたのと申す内に、こなたが國元へ伴れて歸らしやつたといふ事を聞くと、其時はきつう遺恨を含みました、今度大内への御上使、何でもしくじらせてくれうと思ひの外、みゆき様をやらうと仰やる、夫で頓と腰が抜けて、扱つきあつて見ればきつうい粹、けうといものぢや」舞「そんならみゆきをやらうと申したを、まだ嘘言ぢやと思つてござりまするか」舞「イヤ嘘とは思はぬけれど、又女房をくれうと申す事ぢやによつて」舞「愚痴ぢや、きつうい愚痴、一たいマア表面は女房で、ついで一所に寐た事もない」舞「嘘、けうとい嘘、夫は今度の事があるに依て身共への」舞「イヤ〜ほんの事〜」舞「ほんの事か」舞「ア、疑ひ深い」舞「そんなら問ふ事があ

る、辨之作くくく」ト内より。辨「三種の神器をこなたへ渡せ」小市「ならばとつて見よやい」
 辨「其寶劍を」トばたくく陰にいていふ。靈遊「辨之作く」ト呼ぶ。辨「ハイ」ト勝負は戦
 場「兩人」それ迄は、さらば」ト跡めりやすくなる、辨之作書拔持つて出る。辨「とんとモウ結
 び際でござりました、ア、しんどい役ぢや」遊「辨之作逢ひたいといふは餘の事でもない、内々
 そちに口説いてもらうたみゆき殿の事」辨「ア、申しこれ」トいひ消す。遊「大事ないく」
 辨「夫でも憲法様が」遊「一ツも苦しくない、憲法殿に貰うたてや」靈「さても辨之作に今まで口
 説いたのぢやなア」遊「面目次第もない」靈「こよなすつばの皮め」辨「ウ、主人憲法様には御合點
 でござりまするか」靈「われが取もち俺がためぢや、出来したく」辨「夫でよめた、申し遊軒様
 お返事が参りました」遊「ヤア」辨「折を見て渡しませうと存じて、ちつと持つてをりました」靈
 「今まで見せぬといふ事があるものか」遊「ちやつとくれ」花夕様みゆきより、昔の花夕をま
 だ覚えてるてくれたかやい」靈「花の夕べとはいやな變名ぢや」遊「エ、弄らしやるないのう、辨
 之作讀でくれ」辨「主人の前ではあんまり」靈「エ、氣の弱い、其根性で今までよう取持つた、大
 事ないわいやい」辨「それもさうかい」ト讀む。辨「とくより御返事と存じ候へ共人目の關にさ
 し控へら、誠に御無事の様子、風の便に聞まし嬉しさの御事に候、數ならぬ身を左程迄思召

し下されし御事、御嬉しさ限りなう、飛立つばかりにて御座候。飛立つばかりでござります」
 靈「飛立つばかりぢや」遊「ばかりで」ト辨之作又讀む。辨「前かたつれなく申せしは、
 殿御の心の飛鳥川、とくと見申さんため、思はずも憲法様に受出され、國へ参じ候へども、す
 かぬ事故つひに傍へ寄つた事も御座なく候」遊「なんなくあとはく」辨「お前の志、嬉しい
 と思ふ魂が、現にも通ひし可愛さは舊にまして早う夫婦になりたいと存じ候」遊「サア堪らぬ堪
 らぬ」ト又讀む。辨「どうぞ表向のわけ御立下され、御へんもじの程待入こがれら、花夕様
 御事今はいうけん様まるる、こがるよ身より。サアこがるよ身よりぢや、ハツ」ト狀を投る
 遊軒頂く。靈「よう花夕さま」ト遊軒狀を顔にあて恥しがる。遊「さまと今迄は疑ひました
 は眞平ごゆるされませう、もうく神八幡そこ元の事なら命でも進上いたす」靈「それは忝なう
 存じまする、さつぱりと進上いたす」遊「手をつきまする」靈「ハテきつい嬉しがりな」ト内に
 て多勢、「やらぬぞ」靈「中」どつこい」ト立て所作の三味線太鼓鳴る、内より。オ「辨之作様く」
 辨「オイもう所作になつたさうな。私はちよつと参りまする」靈「往てこい」オ「辨之作様辨
 之作様」辨「オイくまで、合點のゆかぬ女めが振舞」ト臺詞いひく入る。遊「扱淀川の
 事はかうなされい、彼の川筋のまん中へ、眞直に堤を築くと、十三里の所がさし渡しになされ

て、七里半に京大坂の通路がなりまする、もう渡ぢやのなんのと、面倒いことは打やつて、其利法を申上げさつしやつたらば、莫大の御はうびでござらう」「サア其儀を存じつかぬでもござらね共、川の真中へ堤をつく事は御咎があらうかと存じて」遊ハテ扱淀川は手前が切落しました、拙者が何とも申さぬに、誰がなんと申しませう」「サア二筋に川がなりましたは、また水が緩漫まして、土砂がとまつて埋れませうと存じて」遊ハテ川が埋れたらなんの事、其元の御用にさへ立ば、皆埋ても大事ござらぬて、明朝すぐに天奏へ書付をお出しなされい、手前よろしく申して手柄にさせませう」「遊」兎角よろしく頼上げまする、明日持参致しませう」「遊」式禮は昨日御指南申せし通り、鎌倉の御名代なれば、門より内は大納言の兼官でござる、装束お著なされたか」「遊」夜前石橋中將様がお著なされてとくと承知致しましてござる」「遊」あの圖書などが非藏人の役で、御簾を巻上げまするに、得てしくじらさうと思へば、よう／＼疊から二尺ばかり上げて置きまする、御簾へ冠をあてぬが故實ゆゑ、四ツ這にはなられず、いやはや態とした事が」「遊」明日は高う上げたいものでござるが」「遊」いや其元のは御簾一ぱいに上げまする、邪魔にもならば引ちぎつてなりと置きませう」「遊」眞の太刀土器拜領はやはり紫宸殿でござるナ」「遊」いかに天盃頂戴の時是非かの土器が破れるものでござる」「遊」直に土器を鎌倉へ早飛脚で

遣しまする、自然破れましたは」「遊」サそこでござる、その通りの土器は二枚ござる、一枚は拙者が持つてをる、天盃頂戴して鎌倉へ下すは身共が替の土器御下しなされ、破ても少しも苦しうない、同じ土器でさへあれば、ほんの京都鎌倉との儀式をするのサ」「遊」さやうなれば重疊の仕合でござる」「遊」マアそこを日の御門にして、此方へかう廻る、と兩方へ雜式が出る、此方へお出なされい」「ト」教へるうち、始終かけをうつ、あとめりやすくなる。遊扱さう／＼しうて物音も聞えませぬ、奥へ往て窃に申しませう」「遊」左様がようござりませう、いはど今晚が惣稽古ぢや」「遊」たとへ惣稽古がないとても、始終手前がひつ添うて居るから、氣遣のきの字もござりませぬ、サア／＼御出なされい」「遊」マア／＼御出なされませい」「ト」入る、唄になり、喜蝶小市が胸ぐら取り出る。小「エ、はなさつしやりませいのう」喜「イヤはなさぬわいのう」小「コレお前は近江の國縫之助様へ一兩日のうちに嫁入なされますぢやないか、そんなら主あるお方ぢや、太鼓持風情が傍へおよりなされませぬ」喜「エ、其方はのう」小「おつと口舌は筋ばかりいうたり」喜「去年の正月智恩院の御忌に参つた時、わらは忍びの徒歩詣で、戀に上下の隔はない、可愛らしい男ぢやと、思うたが戀の始め」小「淀へせき／＼通ふにも、餘ほどに思はにや行かれぬ、大ていや大かたの事ではござりませぬ」喜「それぢやによつて今度京都へ來たも、見舞といふは

附たり、其方の顔見にきたのぢやわいのう、縁組も何も兄さんがさしやんした、私や何にも知ぬわいのう、何した物であらうぞ、思案して貰はうと思つて、胸は板になつてゐるわいのう、夫々今のやうな事、ようもくいはれたのう」ト泣く。小「何程泣しやましても其手はくはぬ、コリヤ下地から知れてあること、態とはなうて高が此方がやうなものぢやと思つてけつぷすのか、さう旨うは乗るまいわいのう、と斯いふと腹が立たう、私やとうから疑うてゐりせぬわいのう」喜「そんなら疑ひは晴ましたかや」小「お前の心は私がよう知つてをるもの」喜「それに人を術ながらしくさつて」小「よう術ながらしくさつたなア」ト寄添ふ。小「時に嫁入の事はひよんな事ぢやなア」喜「どうぞ思案してたもいのう」ト記内出る。記「喜蝶様く、コレ喜蝶様」喜「オ、何ぢやいのう」記「何ぢや所ぢやござりませぬ、與三右衛門様からお人が参りましてござります、ちと仔細があれば一兩日の内に輿を入れねばならぬ、喜蝶を早く歸してくれいと、お迎ひが参つてござりまする、お供廻りは表に待せ置ました、拙者がお供仕りまする、サアくお出遊されませい」喜「さいのう往ぬるわいのう」記「若殿様も夫故に急にお國へお歸りなされねばならぬ、御供廻りの用意はよいか」橋廊より「ハア」喜「これは又急な嫁入ではある」記「何が急な事がござりませう、殿様もお前も御婚禮は御一緒になされねばりませぬ、斯様にお目でたい事

はござりませぬ」ト此内喜蝶小市のそばへより。喜「何せうぞいの」小「サア何しようとしてマア一旦は嫁入なされずばなりませんまい、其思案といつば」記「ヤイく」汝は帯間ぢやないか、御寮人の傍へ寄つて、嫁入なされずばなりませんまいとは汝が指圖受けぬ、びらしやらした事があると汝が首が飛ぶぞ」小「ハイく」喜「便を待つてゐるぞや」記「何の便を、サアお出なされませい」喜「来てたもや」ト小市にいふ臺詞、記内間違つていふ事あり。記「お供仕りまする」喜「必ずおじやえ」記「是はしつこい、お供致しますワイのう」ト總角縫之助皆々出る。喜「ござんせござんせ」記「何ぢやいやい」小「そりやモ一口はじまつたわ」記「何でお前は女房持んす」記「誰がいやい」記「アノ喜蝶さんは云號で、淀から嫁入さしやんすを、今迄私によつて居さんしたのう」子供「さうぢやなく、急度云はんせ」記「其様におだててくれな」記「イヤおだてる事も何もいらぬが、急に身請の客が有つて今日か明日かには埒が明く筈、夫ではどうもならぬによつて思案して下さんせと、云うて置くのに構はずに、放つて置かしやんすによつて、遣手の杉がモウ今夜のあけ迄に身請の相談が出来た、早う戻れと今迎ひの駕が来てあるわいなア」記「ヤア」記「ヤア所か、モウ私に飽が来たによつて、喜蝶様を女房に持つて、身受のあるを幸ひ、私を突放すのぢやな、お前はかりはさういふ心ではあるまいと思つたに、こちや聞かぬく」エ、

エ、」ト抓る。子供「さうぢやなくぐつと云はんせく」舞「さいのう、おれも其事に如才はな
いけれども、兄貴の御上使で金の向はたよき上げて、掛屋へ云うてやつても根から取合ぬが、
氣遣しやんな、夜明に金拵へて身請する」舞「イエ大事ござんせぬ、高が彼地へ往たら死ぬる
分の事ぢや」舞「其やうに短氣にものを言やつてはどうもならぬ」舞「いへへ、何なとお前の心
次第にさしやんせ」舞「さいのう、どのやうにしてなりと」ト花車一人出る。花車「總角さん、
先刻にから駕を待して置いたが何をしてござんす、今夜中に往ねば、身請の時が切れると又吐
られる、ちやつと戻らしやんせいのう」舞「エ、欺された、私やモウ往にやせぬ」舞「往ないでつ
まるものか、太夫さん方明日は身請の惣揚ぢや程に、早う戻らしやんせ、サアく早うく」
舞「コリヤ杉ぢやないか、マア待てくれ、太夫はおれが身受するのぢや程に、ちつとの間」舞「申
し申し是申し、いつぞやから揚代の算用もせず置いて、私らへの紙花もくれずに、五百兩と
いふ身受の金が出来るもので」舞「さればいいい、金はナ」舞「いえくくくお前ぢやといふ
ては親方が身願ひ立てよ思がる、待つことはマアなりませぬ、身請なさるとなら、今夜中に五
百兩の金を持つてお出なされませ、サア太夫様ござりませいのう」舞「殿様モウ逢ふことはござ
んすまい、さらばでござんす」舞「コレ夫をやつては」舞「ア、なりませぬといふのに」舞「さいや

い」舞「金はナ」舞「サア金は」舞「金持つてお出なされませい、サアござれ、コレござれといふの
に」舞「ハテは何もならぬわいいい」皆々「申しどうで生きて居る氣はござんすまいぞえ」小「ア
ア何處も色事の生粹ぢやなア」ト辨之作、石橋中將、圖書、才兵衛出る。舞「其様にいふ事も
ないわサ」オ「イヤいはにやなりませぬわいのう」中「サアよいわいいい」オ「イヤやうないわい
のう、コリヤ何して下さりまする」小「また一組はじまつたわ」舞「やるといふのに」オ「サア
今貰はう、あるかえ有るまいが、頭から斯なるを知つてゐるに依て、マア第一お公家を客にす
る事はいやぢやと云ふのに、何もかも引受ける大事ない、なんのと言つておいて、毎日太夫様
を揚げてこなさん達三人で外の客をせぬによつて、身上は上つたりぢや、今日の明日のと引す
られて、橋の寮へこい合點ぢや、来て見ればどこへ金、首筋押へて戻らにやならぬ、わたさつ
しやれぬと代官所へ斷るぞや」舞「其やうに大形にいふ事はないわいいい」オ「イヤいふ、石橋中
將様と圖書様と辨之作様とぢやと」舞「辨之作コリヤ何するぞいいい」舞「モウ了簡がならぬわい
やい」ト刀を抜く、皆々止める。オ「何ぢや切るのか、切れうく」舞「己れ眞つ二つに」オ「切
つて貰はうわい」ト川浦遊軒出る。遊「さて」舞「イヤお退きなされませ」遊「さて何も皆聞いた、
町人の無法者を相手にして不調法ものめが」オ「イヤ遊軒様、町人の無法者とは、金受取らうと

いふがどうして無法者ぢや」遊「二百兩ある受取れ」オ、受取らいでは」ト遊軒才兵衛をむね打に打する。オ、アイタ〜」遊「身の程を知らぬ奴、おのれ高位を客にした事を知らぬ顔なれば其通り、うぬが口から申上げると、うぬが首が飛ぶが、うぬ最前のやうな事、今一言いうて見よ、ぶち放すぞ」オ、アイ〜あやまり入りましてござりまする」遊「金は身がつどける程に、辨之作何方へなりといけ」辨「ア、有難うござりまする、今迄段々お金を貰ひましたに依て、いひかねて居りまする」申「才兵衛これから居續ぢやぞ」オ、何程なりともお出なさりませい」遊「エ、欲面のひツぱつたやつぢや」遊「コレ縫之助殿氣の細いどうした事ぢや、ソレ五百兩」ト投り出す。遊「エ、」遊「明後日は嫁御の輿が入ると有て、家中が迎ひに參つて居る、將監殿の機嫌の損ねぬやう早う歸らしやれ、太夫は跡より身請してやるわいのう」遊「スリヤ身請して下さりますか」遊「辨之作五百兩くるわへ持つていて、總角が身請して國へ連れてゆけ」遊「エ、忝うござりまする」辨「若殿お嬉しうござりませう」遊「嬉しい段か生々世々、此御恩忘れおきませぬ、有難うござりまする」遊「まだ〜金は何程うでも用に立つ、もう一家同然ぢやわいのう」遊「日本晴がしたやうな」申「此勢ひにとつと呑あかさうではあるまいか」オ、か程小判の山をつくからは、太夫様方を引連れて、すぐに廓へ押かけ山の郭公」辨「たつた今迄惡たいを吐きくさ

つた大泥坊めが」ト侍一人出て。「花滿憲法様に、追付七ツでござりまする、お歸りあられませう」遊「憲法殿〜」ト憲法出る。遊「最前より一ぺん尋ねてをりました」遊「イヤもう貴様は念を入れて稽古なさるゝ事はござらぬて」遊「オ、迎ひに来たか」侍「ハア」遊「私はモウ参じませう」遊「お出なさるゝか」遊「弟、どなたも皆送つて行け」申「イヤ〜夫には及ばぬ、おれも直に跡から参内する」遊「明後日嫁御がお入ある、直に歸らしやれ」遊「いかさま親共より度々の使でござる、そんならお暇申して國へ歸りませう」遊「イヤもう今日ほど嬉しい事はない」遊「然らば諸事は先達て申した通り、明朝大内でお目にかゝりませう」遊「いよく頼み存じまする」遊「イヤもう一面に味方さ」遊「あなたは是にござりませい」申「オ、明日逢ひませう」遊「明日〜」遊「廓のもの共太儀ぢや」皆「ヤ」ようお出なされませう」遊「紋之丞、サア供せい」遊「ハア」遊「明朝御意得ませう」ト七ツの鐘なる、憲法入る。遊「サア〜廓の者共をつれて、縫之助も歸らしやれ、國元に將監殿が待かねてゐられう」遊「そんなら身請の事お頼み申しまする」遊「私が吞込んでをりまする」遊「つよと此嫁入はひよんな事ではあるぞ」ト小市出て。小「申し旦那」遊「小市か」小「其嫁御をどうぞお去りなされて下さりませ」遊「ヤア」小「私は喜蝶様と云交してをりまする」皆「ヤア」小「あの子も往ともなし、お前も持ともなし、去つてさへ下さりますれば、私は首が

落ちて添ひまする、胴をすゑましたのでござりまする、御得心なくばいつそ爰で殺して下さりませい」辨「サアえらい事いひ出した」小「お大名の嫁御に疵付けました、殺して下さりまするか去つて下さりまするか、返事なされて下さりませい、爰は動きは致しませぬ」舞「よう念比してくれたなア、いかにもやらうと云うても親父が得心せねばやらうともいはれず」舞「きつう思ひ込んだ顔付ぢや」小「命は捨てをりまする」圖「不便な事ぢやなア」舞「遊軒どうぞしやうはあるまいか」遊「イヤなか／＼器量のものぢや、すつかりとよう云うた、其代りには添れるやうに思案してやらう」小「エ、」舞「去るやうの分別がござりまするか」遊「ある／＼」皆「どうでござりまする」遊「小市われは人の見知らぬを幸ひに武士になつて、縫之助殿の國へ往て祝言の中へねだりこめ」皆「さうして何ぢやな」遊「こよに有るぢや、まづ汝がいふには、手前は何の某と申すもの、則ち淀與三右衛門が妹喜蝶は二世までといひかはしてをる、某、夫のあるもの娶るは不義もの間男ぢやと強請かけるのぢや」皆「面白／＼」遊「そこでこなたが、扱は左様か、其様なみだらな女を女房にもつて悪名とる事ならぬ、去つたといふ」皆「去らにやならぬ」遊「かぶせ物しられた事ぢやに依て、親將監殿もぐつとも云分ない、さつぱりと去つてしまへ、其跡が願落、與三右衛門ぢやというて、指がきたないとして切つても捨られず、夫なりにして下へば、

何と夫婦になられるではないか」皆「したり」舞「智恵もあれば有るものぢや」舞「小」是「是より外に思案はないぞ」舞「何かに付けて結ぶの神さま、忝ない」遊「拜まつしやれ／＼」舞「さて汝は侍になつて来るか」小「参りまする」舞「よう仕組みして往かざるまい」小「やるものぢやござりませぬ、若殿縫之助様に一寸逢はうなどとくらははずぢや」舞「さうぢや、コリヤみち／＼云合さどなるまい、でたらめにやつて見やうかい」小「でたらめ／＼」ト侍一人出て。侍「旦那これにござりまするか、みゆきさまより御状が参りました」舞「エ、早う戻れであらう」ト状を見る。舞「イヤわざ／＼の飛脚で参りました、窃に御覽なされませい、跡は火中なされとの儀でござる」舞「はてなア六ヶ敷いなんぢや、花様まるる御存じ」ト遊軒とり。遊「よし／＼覺ある／＼」舞「花さま御存じ、覺えがござりまするか」遊「人に見せなといふ筈ぢや、コリヤもう夕を脱いて花様ぢやわいやい」舞「しやれるは／＼」中「いまのか／＼」遊「今のとも／＼」舞「お前のか」舞「世話をやく根本根元ぢやわいやい」小「サア早う往かうぢやあるまいか」舞「いなう／＼」舞「追付身請してやりませう」舞「結ぶの神様有難うござりまする」遊「これは御懇勲の御禮いたみ入ります」トしかつべらしくいふ。オ「サア太夫様方お出なされませい」皆「後から戻らしやんせえ」圖「お歸りかいなア」中「さらば」舞「ようお出たえ」ト唄になり。舞「是は見なれぬお方でござる」ト歩

きながらいふ。「拙者はでんつく彌五右衛門といふ浪人ものでござる」
 「ハ、コリヤえいえい」
 「不義もの遁れまい」
 「まつた不義とは何を以ておいやる」
 「ヤア旨い」
 「ト臺詞、花道の真中に立留りいふ。いろくこなし有り、舞臺よりほめる、みなく入る、合方唄になる。
 辨「サア是から戀君の文が承りたい」
 遊「さつきの狀の上に、引續きておこしたはじつが来たわいのう」
 中「エ、あやかりものめ」
 圖「ちつともあやかる爲ぢや、われら読みかけうか」
 遊「ひけらかすではないが、聲を上げて読んでくれ」
 遊「中」さらば聴聞仕りませう。いよく御きけんよく御わたりなされ候と悦びり、さ候へば辨之作に文遣はし候、大方御覽も候はんと存じり。見たく。随分いやらしいのがよい、何の笑はうぞいのう」
 中「てもきつい好ぢやなア」
 圖「まへ方京に遊「随分いやらしいのがよい、何の笑はうぞいのう」
 中「てもきつい好ぢやなア」
 圖「まへ方京にをりし時分より、いろく口説き候へ共、身しんたえて遊軒はいやにて候ゆる、七りけんばい願籠いたし候かけにて、お前様と連添ひ朝夕有がたくぞんじり」
 辨「ヤア」
 遊「モ一度読んでみい」
 圖「身しんたえて遊軒はいやにて候ゆる七りけんばい」
 中「どれ。願ごめいたし候かけにて、おまへ様とつれ添ひ朝夕に有難くぞんじり」
 何のこことぢや」
 ト狀を辨之作の前へ投る。遊「大事ない其跡すかくとよめ」
 辨「ハイ」
 遊「よめいやい」
 辨「ハイ」
 ト辨之作氣味わるさうによむ。

辨「所に又々家來辨之作を頼み、色々口説き申候、遊軒はべら坊とも阿呆ともぞんじ候が、辨之作めが仕方、よりく手討とぞんじ居申候ところ」
 遊「サア跡を讀め」
 ト氣色だつていふ。
 辨「ハイ」
 遊「とうちくする。遊「よめいやい」
 中「トぐつといふ。中「讀んで了へやい」
 ト引たくり讀む。中「悪縁ちぎり深しと、今度の御上使遊軒に大内の作法御習ひ、諸事御頼みなさらねばならず、私に遊軒への文遣し候様に、こまぐく仰せ下され候故、筆も墨もけがれじよう存じ候へども、あはうが氣に入るやうに道ならぬ文遣し申候」
 圖「ドレちつと讀まう。御申越の通りあの文にてはいかな遊軒も腰を打ぬき申すべく、御上使の首尾もよく致し候はんと存じり、跡は思召の通り上使の役目さへ御しまひ候はど、遊軒を引出し赤恥を御かよせなされ候御事、御尤に存じ候、いつたい慾深き佞人にて候間その御心得、また國へ御歸りの節早々辨之作を逆磔に御上け御尤にぞんじり。ヤア」
 ト顛ふ。「御機嫌にて早々御歸國まぢ入り、火中へ、花滿憲法様まるる、みゆきより」
 圖「そんなら花様は、はなみつの花であつたか」
 中「こりやどうぢや」
 ト右のうち遊軒腹の立つこなしいろくあり、辨之作が持つて居る金を引たくる。辨「これは」
 遊「軒だまつて懐へ入れる、辨之作思入。遊「ウヌく。今迄くれた金はかたられたと思つて濟す、うせう」
 ト辨之作鑑を取つて。辨「まつた」
 遊「ものぬかすと打はなすぞ」
 辨「成程御立腹は御尤」

今迄こなた様を偽り金銭をかたり取つたかとの思召し、どうも濟ぬ、サア打はなして下さりませ」ト遊軒ふり返り切らうとする。遊「ふちはなすぞよ」辨「今の狀の文句、國へいねば逆礫、どちらでものがれぬ命」遊「にっこい憲法め」遊「彼奴らには構はぬ、大恩はこなた様」ト遊軒思入。遊「もう何時ぢや」圖「おつ付夜が明けまする」遊「己れそれ程に思ふならば云付ける用がある」遊「何なりとも」遊「コリヤ」ト耳語く。遊「畏つてござりまする」遊「いけ」ト辨之作走り入る。圖「遊軒殿」中「其方が心は」遊「これ」兩人に耳語く。中圖「がつてんぢや」遊「先へ廻つて」圖「今出川口の門からござれ」ト兩人入る。

返し

造物一面の築地公家門の體、橋懸より雜式二人、其跡へ仕丁黒裝束の公家二行に並ぶ、其跡へ對黒裝束にて花滿憲法出る、其跡へ諸太夫二人、仕丁多勢靜に出る、西の方公家門にて立留る。先公家二人「おかけで四位の侍従に兼官致し有難う存じまする」憲法「町支配の御兩所御苦勞、取わけ横田佐衛次殿御苦勞」新公家「鎌倉より京都御館を預りをりまする武家に納言の兼官有難う存じまする」ト四人目禮する、雜式より段々門の内へ入る、ト公家門引道具にて、大臣柱ともに

東へ引込む、花道より兩方へ御簾のかよりたる屋體せり上る、舞臺所々に御簾かよりたる御殿引出す、花道より憲法一人出る、山口右辨向ふへ行き、すれ違ひけつまづく。中「不作法なやつ」の「憲」御免なされませい」出「わりやたれぢや」憲「イヤ御免なされませい」出「見しつたぞ覺えてるよ」ト云捨にして右辨はいる、憲法本舞臺へ来る、青山侍従つかくと行當る。憲「アイタアイタ」トこける、憲法抱起し。憲「是は不調法な、御了簡下さりませい」憲「ヤイわりや見馴ぬ者ぢやが誰ぢや」憲「私は鎌倉よりの上使」青山「ムウ侍が禁中へ来るに、疊さはりの作法も知らずに来るか、但し鎌倉から斯せいと云付たか」憲「イヤ眞つ平不調法でござりまする」憲「後日に屹度云付る程にさう思へ」ト行うとする。憲「イヤ申し夫は」憲「エ、」ト突飛し入る、憲法思入有て。憲「遊軒殿はどこへ往つしやつた」ト岩倉宰相通る。憲「申し」憲「なんぢや」憲「紫宸殿へはどうさんじまする」岩「ハ、ハ、ハ、大納言の裝束を著て、紫宸殿を知ぬとはハ、ハ、ハ、」憲「イヤちと便りにする人を見失ひました、教へて下さりませ」岩「紫宸殿はかう行くのぢや」ト願ぐるりと廻す。憲「どう參じまする」岩「さう行くのぢや」憲「どう」岩「さう、エ、どんな」ト笏で願つき入る。憲「何を云つても便りにする人が居ぬによつて」ト憲法思入ある、中將出るを見つけ。憲「イヤ石橋中將様ではござりませぬか、夜前はお目に」中「ヤイ、こりやわりや

誰ぢや」憲「ハテ私でござりまする」中「私とは、聞ば鎌倉よりの使とあるが、武士に心安うものいはると覺ない、夜前とは何の事ぢやしらぬぞよ」憲「成程御尤、ついにお目にかよりました事もござりませぬが、ちとお尋ね申上たい儀がござりまする、紫宸殿へはどれから参りまする、教へさつしやつて下さりませ」中「紫宸殿はわが足の向く方へのゆけ、大だわけめ」ト下座の方へゆく、憲法呆れて居る。憲「コリヤ餘程喰違つたわいのう、併し石橋中將様が斯ゆかれるからは、此方が紫宸殿であらう」ト見て「櫻と橘が見える、斯ぢや〜」とゆく、是より引道具御簾のある所へゆく、圖書こちらに居る、憲法みす低う懸りあるを掲げ行うとする。中「コリヤ〜御簾上げる事はならぬ、くどれ〜」憲「さう仰やるは圖書様か、餘りみすが低うござりまする、モそつとお上げなされて下さりませい」中「ヤイ〜みす上げいと憲外なやつめ、大内の事さはいするか」憲「差配は致しませぬが、此約束では」中「約束とは何が約束、御簾へ手をさへると後日に鎌倉へ急度申付るぞよ」憲「ハア」ト憲法思入有つて、みすの内へくどる處、圖書冠の纒を以て引く、冠落る。中「不吉もの、冠落した天奏へ申上げる、待つて居ろ」ト走り入る、憲法是より思案して胸を極める思入にて冠を著て、しほ〜とゆく、紫宸殿の道具引出す、圖書、中將、公家四人、遊軒居る、憲法階のそばへ來る。中「鎌倉の使御座どころぢや」憲「ハア」

ト中將顔を見てぎつくりする。中「御座近うあがらつしやれ」憲「ハア」ト又階を渡る、向ふのみす少し上る。中「出御」皆々「シイ」ト辭宜する。中「毎度の格にまかせ御太刀を下さると、頂戴」憲「ハッ」ト中將みすの内より黄金作りの太刀を出す、鞘を殘して身ばかり出す、憲法見て恠りして柄の方より取る。中「玉座が近い、白刃をかくせ〜」憲「ハッ〜」ト袖の下へ入る。中「頂戴のもの隠す事緩怠」憲「ハッ」ト出す。中「眞劍狼藉」ト憲法腰へ差うとする。中「天子の下されもの腰に差す慮外もの」憲「ハッ〜」ト憲法思案して襟を裂き白刃を隠す。中「古格の献上ものはどうぢや」憲「先達て天奏方へそなへ置きましてござりまする」中「不調法千萬な、天奏に受取つたもの一人もない、直に持つて上るはしれた事、不念法外な」憲「ハッ〜」ト此内より無念のこなし有る。中「天盃頂戴」憲「ハッ」ト中將三寶に大土器のせ、みすの内より持出、憲法があたまたまの傍へ置く、土器破つて置く、憲法土器取上げる、破つてある故ちやつと膝へ入れる。中「此度の使甚だ法外の至りなれども、其儘にさし赦す下れ〜」憲「ハッ」ト憲法階を下り少し思入れ有つて跡ふり歸りゆく、向ふより青山、山口立塞る、通さぬゆる附舞臺の方へゆく、又岩倉、高尾立塞る、其外みな〜憲法をまん中へ取巻く。中「コリヤいづれも方は何となさると一山イヤ何ともせぬ、大納言の兼官で大内へ來るからは、歌もなるであらう、ち

つと所望しやうかい」兼「イヤ武骨ものでござりまする」兼「ハア歌はいかぬか、歌よむ術をしら
いで大納言の兼官するとはふとい奴ではあるわいのう」高尾「面の皮の厚い奴ぢや」岩倉「イヤあつ
いものぢや」ト皆々よつて憲法が顔をこづく。兼「どのやうになされても知ぬ事は存せぬ、が中
將様圖書様、コリヤ又遊軒殿も酷いしやうぢやぞや」中「むごいとは」兼「イヤサ宵迄は」中「よひ
迄とは、上使が宵に公家と對顔しても大事ないか」兼「イヤサそれは」中「大事の上使が天子へお
目見せぬ内に、我等へ内通しても大事ないか」兼「逢うたがぢやうか、宵迄とは」兼「イヤ
ササ遂にお目には懸りませぬ」兼「其筈」ト憲法遊軒が傍へゆき。兼「遊軒殿段々御造作
お禮はゆるりと申さう、差當つて土器が破れました、直に鎌倉へ下しませねばならぬ、彼のか
へ土器をどうぞ所望させて下され、夫程の事は相違なうなされ下され」中「替土器とは何の事ぢ
や」兼「ハテ此間から教へさつしやれた替土器」中「天盃は其儘で鎌倉へ遣しあの方で頂くものぢ
やが、ア、天子のお上りなされた土器は捨て了うて、下々らの呑む盃を鎌倉へ下すか」兼「イヤ
さやうではなけれども」中「遊」あはう盡したら鎌倉まで崇りが行かうぞよ」兼「ハ、アよう思へば
是は何ぞ足らぬ物があるによつて、俄に此様になされたと見える、後日謝禮はいかほどでも致
さう程に」中「コリヤノ」何ぢや、謝禮とは天子の土器は塵芥場へ捨て、金で買うてい

ぬる盃を鎌倉へやるのか」兼「金で買うといふのか」兼「イヤ全く左様ではござりませぬ」
中「まづ第一見た事もないさまで、大柄さうに遊軒殿と、餘り大柄にぬかすと、青侍に云付て
おとがひ蹴はなすぞ」兼「夫は又あまり」中「餘りとは」兼「餘りとは」ト此間に
遊軒出て上の方へそろ／＼歩み立て居る長社軒にて。兼「サア」成程どなたも、お近付で
はござりませぬが、うやく／＼しい大内へはいり、少し逆上せましたか、轉頭致したさうにござ
ります、まつびらごめん下さりませう」中「さういへばまだしもぢやが、けふの無禮式法は皆破
れた、後日にお咎め行くほどに、さう思うて居よ」兼「斯なる上からは後日のお咎めは覺悟の前で
ござる、が遊軒殿、是は又餘り酷いと申すもの、たつた宵までは式禮作法残る所もなう念頃に
指南して、今更此様になさるゝは、なんぞ一物あるのでござらう、淀川筋通路の儀も、貴殿の
教のやうに七里半の堤築く事を自筆に認め、天奏へさし上げたれども、今に何の御沙汰もなし、
此様にわるう横に出さつしやるといふは」兼「横にとは」兼「サア横と申すは拙者が
事、遊軒殿、私は絞りに逢ふとても厭ひはいたさぬが、天盃の土器と眞の太刀は鎌倉へ納め
ねば未代鎌倉將軍の疵になります、爰をどうぞ聞わけて下されい」遊「オ、笑止な事ぢやなア、
いかにも天盃土器は二枚、一枚は遊軒が持つて居る、これ雲の内に關白の御判をすゑられたの

は是ぢや」ト土器出して見せる。「欲しかろ、さつきに土器割て置いたも身共ぢや」憲「成程よくよく腹の立事があるものでがなあらう、いかやうになと腹の癒るやうにした上で、其土器を下さりませ、頼みます是遊軒どの頼みまする」遊「これ皆御覽じ、此ほえる面はいのう」憲「其ほえ面へ笏ふるまはふ」ト笏で叩く。中「ドレおれがのも一つ喰さう」ト又叩く。憲「俺も喰さう」×「これもくらへ」皆々「是をくく」ト皆々憲法を散々に叩く、憲法きつとなる。皆々「何ぢや何ぢや」遊「無念なか」憲「何の此位な事が無念にござらう」遊「夫ならば又土器やるまいものでもない」憲「どうぞ下さりませい」遊「オ、やらう」ト柄にて叩く憲法見て、胸り、額血少々流るよ。遊「無念なか」憲「何の無念にござりませう」△「ドレもう貰ふやうにしてやらう」ト蹴る。憲「俺も貰うてやらう」ト蹴る。中「あばらて貰うてやらう」ト蹴倒す、憲法思入。遊「もうやるぞく」憲「どうなりとなされませい」遊「オ、何なりとせうわいく」ト蹴倒し踏む、憲法遊軒が傍へ行き。憲「サアもう大概腹が癒たであらうなう」遊「オ、其位にしたらモウよい、今こそ土器やらうと云うたらよからうがならぬ」憲「此様にしてもならぬか」遊「コリヤ是でもならぬ」ト状を出す、憲法讀んでびつくり。憲「スリヤ此状を見たによつて」遊「うぬが絶體絶命ぢや、土器もかうぢや」ト打破る。憲「モウさうすりや是非に及ばぬ」ト遊軒を一かせ切る。皆々「ヤア切

つたはく」ト少し立廻り有つて追廻す、憲法冠をしめ直し、装束まくり上げ、用意して又きりに懸るをいろく有つて追込む、道具元へ戻る、ト大内ざわく仕出し、いろく逃廻る。中「サアく大體の中ではないぞ」憲「中將様く」ト圖書中將行當り。中「遊軒は何とした」憲「遊軒殿は今出川口より二條の館へ送りました」中「女中方や上様はなんとした」憲「皆關白様のお指圖で、夜のおとどへ入れましてござりまする」中「淀伏見せよの屋敷へも早打遣したれば、追付加勢が来るであらう」憲「いやモウ淀の與三右衛門早打でおひく、駆付けまして、日の御門まで参つたれど、迂濶にもえ入らず、御門に待つてをりまする。中「膳所の火消屋敷へもおひおひに駆付ける、憲法がもし手に餘らば、與三右衛門を加勢に入れう」憲「關白様へ伺ひませう」ト走り入る、半素袍につゆ取つた侍掛烏帽子にて長道具を持ち八人憲法を取巻き出る、憲法冠著ながら装束をまくり大立あるべし、圖書中將等かよる、立有つて。憲「卑怯な川浦遊軒、出ぬかく出やアがらぬか」ト遊軒を尋ねる内、右の人数取付く事あるべし、此うち遠攻、大勢組付くを切倒し井戸へ入る。侍「南無三寶、空井戸へ取逃した、水門を捜せく」ト皆々入る。道具一面の惣築地になる、淀與三右衛門花道より早馬にて出る。與三「憲法は空井戸へ逃こんだとある、抜みちは此水門」ト窺ひ居る、憲法向ふの水門より出る、あたりを見

て、是より冠裝束脱ぎ、前に眞の太刀土器を置く、與三右衛門隠れて見て居る、憲法身づくろひして腹へ突込む所へ、みふね鉢巻大小にて出る、憲法見て胸り。〇みふね「ヤア憲法様か」憲神道源八が女房みふねか」み「まさつと早う駈付けたら、やみく」と御生害はさせますまいもの」憲「イ、ヤ悔むな、大内を騒がしたれば牛裂釜入にも遣ふべき身體、切腹するは我本懐」み「委細の様子承りました、川浦遊軒が奥様にむたいの戀慕、それゆゑの邪」憲「無念は無念とこたよが、眞の太刀天盃の土器は此通り、鎌倉への申わけ、どうも堪へられぬ」み「併し遊軒を打漏しなされてさぞ残念にござりませう」憲「シテ遊軒は」み「疵養生に二條の館へ歸りました」憲「エ」ト無念がる。み「お道理でござりまする」憲「そちは身が首に此天盃眞の太刀を添へ、鎌倉へ有の儘を訴へて指圖を待て」み「有の儘に言上せば、理非は立つても大内を騒がせた咎、もしお國を没收せられれば、奥様縫之助様は門前拂ひ、親殿様はいつくの大名へぞお預け」憲「花満の家は斷絶」み「憲法様、お國も城も身のなる果」憲「エ、無念なはい。サア介錯せい」み「ハッ」ト後へ廻る。憲「此腹へ突込んだる刀を源八に渡し、遊軒を打漏したを無念なといへ、關口平太は遊軒が弟ぢやぞよ」み「エ、」憲「あれら風情に目はかけな、志す怨みは川浦遊軒一人ぢやぞよ」み「畏りました」憲「介錯」み「エ、」と首切り、是より装束に包み、右の太刀土器を包み脊中に

負ふ、此間侍下座、橋懸りより、鑓を持ち狙ふ、みふね尻目にて屹度見付思入有つて知らぬ風にて態と鑓先へ向ふ、兩方そろく付寄つてみふねをはさみ一時に突く、みふねひらく、兩人芋ざしになる、又突だす、みふね切倒し行かうとする、圖書熊手にてみふねを引かけ立ある、圖書長刀に懸り首場の中へ飛ぶ、山口又立ふさがる、顔を切る、くわへめんにて死ぬる、此模様の立有りてみふね向ふへ走り入る、與三右衛門始終見て頭巾を取り、みふねを遙に眺め思入あつて。〇「ハテナア」ト手を打つ。よろしく幕

第二幕目 劔術仕合の場

替 人 役	
一 吉川紋之丞	菊 太 松
一 志賀左近	吉 太 郎
一 彌五原三平	清 藏 郎
一 古川十内	友 藏 郎
一 まき山新治	新 藏 郎
一 山家屋太郎右衛門	彦 郎 藏
一 花満縫之助	三 十 郎
一 傾城總角	金 十 郎
一 津田伴之進	一 喜 世 三
一 志方角兵衛	春 五 郎
一 玉淵久馬	友 十 郎
一 ろろふ永助本名小市	東 九 郎
一 喜 蝶	來 九 郎
一 關口平太	小 伊 三
一 神道源八	大 五 郎
	文 七 郎

役
 一 奥方みゆき
 一 花満将監
 一 熊本辨之作
 大 介十郎
 治 郎三

一 淀與三右衛門
 四 郎五郎
 一 侍、百姓、舟大工、門弟大勢

○

造物向ふ一面の金襴惣二重舞臺、君は千代ませの論、二重舞臺の中に奥方みゆき立つて居る東の方に神道源八、西の方に關口平太社社にて手を組みをる、玉淵久馬社社にて並び居る、雙方の武士大勢社社にて反打ち詰合をる、志賀左近、吉川紋之丞まん中へ入り止めて居る、源八方に舟大工、平太方に百姓大勢並び居る幕開く。

大工「どうなされて下さりまする」百姓「どうなされて下さりまする」△皆々「ぬけ」○皆々「ぬけ」左近「待つたまたつしやれ」ト喧しういふ、此見えにて幕開く。ちゆき「わしが聲を掛けぬに待たぬか」○奥様の御意ぢやが鎖らぬか」左「善にもせよ悪にもせよ、奥様が待てと聲をおかけなさるに、尾籠の振舞却て落度でござらうぞ」紋之丞「源八殿平太殿の詞も出されぬに、ちと我儘かと存じまする、控へさつしやれ」△皆々「ぢやと申して」紋「御意でござる」百姓大工「どうなされて下さりまする」久馬「喧しい引かぬとくよし上るぞ」左「汝らも驚しい控へぬか」百姓大勢「はい」平太「こ

れこれ弟子衆、何をざわ〜といふ事がある、關口流神道流何方がよい何方がわるいといふ事は今取だちをする子供迄知つた事、貴様達がわやく〜いうても、勝つ所で勝にや役に立たぬ、仰渡された刻限に、竹刀打の勝負を決し、打勝つた者に渡津も堤も、淀川筋は皆平太が普請、お手前たちがざわ〜いふと、何ぞ後の勝負が危いやうにも人が思うてわるい、控へさつしやれ」源八「是々弟子衆、御前もこよにござるに不作法な、何した事でござる、仰付けられた竹刀打の勝負、刻限までは餘程間がある、神道流か關口流か、印可を申受けた方が渡津堤共に淀川の普請承る、まだ勝劣も知ぬうちに、ざわ〜と驚しい、控へさつしやれ」○皆々「餘りと申せば」源「ハテ理非は勝負にあるわさ」平「驚しいいふとかさから出るやうでわるい、皆控へさつしやれ控へさつしやれ」△皆々「餘りと申せば」平「ハテちやは〜いふなら、いはして置いたがよい」左、紋「双方共にお引なされい」ト引く。大「汝れらもかましくいふなサ」百姓「お國へ直に参りましたも、堤の普請を早うして貰ひませぬと、又しても淀川の水がくへこんで田畑が流れて、南長柄の百姓は乞食になりまする、源八様と意地づくをお立てなされますは、私共の迷惑でござりまする」平「ハテ扱最前からの事を聞かぬか、儂等が其泣ごを吐すによつて、今宵竹刀打の勝負して、打勝つた方へ堤も渡もかたためて取るむねのわるい事を片付けて、追付はたく〜

と普請して取す、暫く待つてをれサ」百雄「ハイ何卒頼上げまする」運「ヤイ大工共、わいらも難儀であらうが、今聞く通り意地づくに隙どる渡しの普請、今宵のうちに何方へなりともかためたらば、急に取りそいで致してくれう、暫くまで」大工「ハイ先刻にから承りまして、何卒お前の利潤になりまする様に致したうござります、私共大工も仕掛けて今に放てござりますゆゑ、棟梁受取りました私一人の迷惑でござりまする」運「追付善悪が知れる、待つてをれ」平「ハ、ハ、何やらしやうにもならぬ事を、いか様盲目千人目明き千人だの、日本開山の關口平太が弟子になるといふは、其元たちの目があいてあるといふもの、割木をもつて狗子追へ歩く様な事いうて信仰するは、大きなべら坊といふものさ」△皆々「左様／＼でござりまする」久馬「平太殿善悪は小口からでも知れさうな物でござるが、現に善い方をしらずに悪い方を指南受るは、何したものでござるぞいのう」平「イヤもう何の斯のと申して、マアいうて見れば生付いた福と貧乏との違ひでござる、ハ、ハ、ハ、ハ、」△皆々「ハ、ハ、ハ、ハ、」運「人間は水と見れど天人は瑠璃と見る、又餓鬼は炎と見る、劍術も其通り、邪を以て向はど、流義よくても刃金なまれば無刀も同然、正道をむねに納め、道を以て向ふを神道流、かの同じ目明でも、いろはも得書かぬ者を文盲と申す程に、各も随分流義に眼を見開いて居たがよい」○皆々「ハア」久馬「源八殿其方のお弟子は文

盲ではござらぬか」△皆々「ちつと眼が開きましたかな」運「イヤもう四書五經詩文章位は心得てござる」△皆々「シテ外のはナ」運「ハテよその文盲さ」○皆々「さやうでござりまする」平「皆よく聞つしやれ、アノ大鵬でござる、兵衛に取つては片羽がいが九萬里づつ伸びまする」△皆々「左様でござりまする」平「其大鳥の前で雀侍が、ちやらくちやく」と、ハ、ハ、ハ、ハ、」△皆々「ハ、ハ、ハ、ハ、」運「アノ鳥といふ奴は、月などが近えると夜が明けたかと思つて、ガア／＼と吼えまする、是をあはう鳥といふ、扱からすどもがカア／＼よう啼くぢやござらぬか」○皆々「左様でござりまする」運「魚の腸でも引かけさせて往なしたらようござらう、ハ、ハ、ハ、ハ、」○皆々「ハ、ハ、ハ、ハ、」平「どれ鳥の因縁承はらうか」ト立つ。△皆々「お聞きなされざりますまい」運「鳥の因縁聞かうとあるに、雀の因縁聞かいてもつまらぬものぢや」ト立つ。○皆々「コリヤお聞きなされませい」ト兩人向ふへ出。平「なんと神道流は關口流よりはよい物かなア」運「サアレバ何れもは何と思召す」○皆々「イヤ抜群の違ひでござる」運「あの通りでござる」平「へ、へ、へ、雀どもが啼るは」○皆々「雀とは」平「イヤ貴様達の事ぢやない、雀の事サ、ごくにも立ぬ事を貧乏雀共が、ア、不便な事ぢやノウウ何れも」△皆々「不便な事でござる」運「ハア鳥がなくては」○皆々「鳥とは」運「イヤ各方の事ぢやない、鳥めが事ぢや、扱よう啼く鳥ぢやござらぬか」○皆々「よう啼きまするて」平「ヤイ

雀ら、アノ猿といふ物はナ、己れが面の赤いゆゑに、箔のぬつた佛の顔を見て笑ふといやい」
 源「アノ蟹といふ奴はナ、己れが横に行くに依て、直に歩く人間を笑ふといやい」ト平太が方
 をこづく。平「オ、澁い柿めは甘い柿の人に食はるゝを笑ふといやい」源「磔が獄門を見て、足が
 ないというて笑ふといやい」平「スリヤ獄門の鹽梅、よう知て居るか」源「知らずばちつと知らさ
 うかい」平「知らうわい」源「知らさうわい」平「皆々」源「知らさうわい」源「皆々」女子と思ひ侮つ
 り喧しういふ。源「皆々」双方共にまてといふに待たぬか」左近「御意を背くか」源「皆々」女子と思ひ侮つ
 ての仕方か」源「皆々」ハア」源「皆々」源八平太それへ出い」平「皆々」ハア」源「皆々」女子と思ひ侮つ
 つてをるか、イヤ知りやせまい、そち達二人は兵衛の御師範も、貴き身を以つて鎌倉より仰渡
 された淀川の普請の儀も、かたみ怨みのないやうに、源八には渡、平太には堤と仰せつけら
 れたではないか、それに源八が渡成就する事を憎んで堤を築かず、渡さへ渡さずば堤の往
 來叶はぬと、互ひに拒み、兵法の流義、私の宿意に主の用事を缺すさへあるに、今宵は何ぢや、
 縫之助様へ淀與三右衛門様の妹喜蝶殿を婚禮の最中、夫左衛門は鎌倉の使者に京都へお上りな
 ざるよお留守の内、親殿將監様も今宵の婚禮、わしまで上下に氣を付けるに、もし口論に及ん
 で、双方の武士が拔放したら何とする、目出度い夜も家中に亂を起して主をのろふのか」源「平」イ

ヤ「全く」カ「ゆき」殊に廻船往來の御朱印を預る此屋敷、淀川往來の普請延引に及ぶゆゑ、今宵の
 刻に兩人立合の勝負を決し、打勝つた方へ一人に云付けいと親殿の仰せ、兵衛も役目も打勝つ
 た方が承る筈でないか、それに家中を騒すは、主を蔑にする不届者、但し左衛門様のお留守
 の内と見かけての我儘か」平「源」サアそれは「みゆき」不所存ものめが」源「平」段々誤り入りましたご
 ざりまする」みゆき「目出度い祝言の夜なれば聞捨にして今はゆるす、皆以來は嗜め」源「平」ハア」
 みゆき「子の刻までは魚と水の交り、上下にも篤といひつけて、將監様の御機嫌を伺かや」源「平」畏
 つてござりまする」又「誠に主人といふ重石がなくば、つい口論にも取結びませうもの、武骨の段は
 御用捨下されませう」平「イヤもう時のはすみで、ふらくと過言を申した、御了簡なされて下さ
 れい」源「イヤもう今更面目次第もござらぬ」平「結構な流義を輕蔑致したは、下拙が誤りでござ
 る」源「イヤ手前から手を突きまする」源「いや手前が不調法」平「イヤ重々不調法」平「イヤ手前
 が」源「イヤ手前が」兩人「ハ、ハ、ハ、ハ、」久馬「長柄の百姓共、渡し舟の大工共、其方達も子の刻迄はた
 まりへ參つて控へてをれ」大工百姓「畏つてござりまする」耳「ドレたまりで待つて居よう」大「そん
 なら待つてをりまする」大「源八様の勝に極つて有る」耳「平太様の勝に極つた」大「サア皆ござれ
 く」ト兩方へ入る。左「絃」イヤ先づ奥へお出なされい」源「平」各も奥へ」△皆々「ハア、ハ、ハ、ハ、」源「平

太殿「平源八殿」勝負は子の刻「平後刻」御意得ませう「ト唄になり、侍を連れ双方へ入る。ちやき、左近紋之丞懸物みな取片付けい」兩人「畏つてござりまする」ト入る、花滿縫之助出る。縫「扱もく急に來た程にの、エ、みゆき様」ちやき「縫之助様、もう嫁御は見えたかえ」縫「見えた段か與三右衛門が附いてをられ、親父様と目出たい盡しの咄、ませかへして居る」ちやき「そんなら又お前も、ナゼ嫁御の傍に居やしやんせぬぞいなア」縫「何をよい氣らしい。モウ來さうなものぢや」ちやき「誰がいな」縫「イヤサよもや彼奴も、あれ程に稽古した事ぢやによつて、來ぬといふ事はない筈ぢやが、エ、此方の身請もエ、つよと俺はつかりに氣を急しをる」ちやき「お前もきよろしくと嗜ましやんせ、女子といふものはさうしたものぢやないぞえ、祝言の夜さりは、大體恥かしい怖いものぢやない、それでもあたまから聲のしなつこらしう物いふは甚うせいになるものぢや、傍に居てやらしやんせ」縫「モウ來さうなものぢやが」ちやき「エ、およそな聲様ではある、ドレ私も喜蝶様の顔見て來う、けうとい経綴ぢやけな、エ、あやかりものめ」ト脊中をたよき入る。縫「ホウ何のあやかり物な事がある、よもや小市めに如才もあるまいが、辨之作はモウ太夫が事をいうて寄越さうなものぢやが」ト山家屋太郎右衛門町人の形にて出る。太縫之助様に逢ひさへすりやよござりまする」侍「ぢやというて不作法な、何處までうせる」太「サア

ようござりまする」侍「憎い奴の」縫「コリヤく待てく、そちは京都の町人山家屋太郎衛門ぢやないか」太「縫之助様お前は」縫「コリヤ四邊へ目を利かせい、コリヤ此者には用事がある程に、苦しい次へ行け」縫「畏つてござりまする」ト入る。縫「よう來たなア」太「よう來たなア縫之助様、コリヤどうなされます、何して下さりますのでござりまする」ト關口平太聞て居る。縫「コリヤ聲が高い、聞えるわいやい」太「イヤ聞えるやうにいふのでござりまする、お前が廓通ひの揚代に詰つて、どうもならぬ程に金二百兩貸せと仰やる、大盡金は一文もなりませぬというたれば、金は濟す違ひのない證據に、お上から預りの廻船往來の御朱印を預けうというて、コレく、此證文、右二百兩の金子、來る晦日迄に相濟み申さす候は廻船往來の御朱印其方へ質物に差入れ申すべく候所實正明白なり」縫「大きな聲をすないやい」太「かかういふ證文を書いて置いてモウ幾月になります、今日はやらう明日は渡さうというて、御朱印もおこさず金もおこさず、こりやマア何するのでござりまする」縫「サアく、尤ぢや、けれど其御朱印の事は、急な依てつい書入れたのぢや、なかく、わいらに渡す物ぢやない、金は追付濟さう程にモウ二三日」太「ヤこれく、其大事の物を書入さして置いたがこちのこみづぢや、千も萬もないか可ようござりまする」ト大ういふ。縫「わりや何處へ行く」太「奥へ往て親御様に此證文を見せて、

金受取りまするわいの」舞「それをいうて堪るものか」太「サア嫌なら二百兩の金今受取りませ
 っ」舞「サア二百兩の金は」太「金がなけりやア若殿様に御朱印を」舞「シツ／＼ヤイ大きな聲す
 ると爲にならぬぞ」太「ヤア切刀を廻して切る氣か」舞「さうではなけれど」太「御大名の弟御が町
 人に金を借りて殺しても大事ないか、切られませう」舞「其様に没義道に物をいふなやい」太「奥
 へいてめつきしやつきする」舞「それをいうて」ト取付く。太「ハテ面倒な」ト突飛す、立廻り
 ある所へ關口平太取つて放り、當る。舞「平太かよい所へ来てくれた」平「サア／＼ようござりま
 す」舞「彼奴マア」ト平太、太郎右衛門が懐中の證文を取つて懐中へ入れる」ト太郎右衛門起
 きて懐中いろ／＼捜し。太「コリヤ今手酷い目に逢したはわれか」平「われかとは素町人の分であ
 りぬ」ト睨む。太「イヤサ強い顔すない、今の證文はどこへやつた」平「おれが取つた」太「ヤ
 ア其證文を」ト取にかよる、手を振り上げる。太「アイタ、／＼」平「大盗人めが、御朱印／＼
 と澤山さうに、大切な物を證文へ書入さして、うぬ、表向で詮議すると首が飛ぶぞよ」太「アイ
 タアイタ」平「此證文は關所だ、命から／＼去るを有難いと思うてうせう」ト投る。太「コリヤ又
 餘まり」平「イツソ打放してのきよ」太「ア、御許されませ」ト遁けて入る。舞「てもよい所へよ
 う来てくれたなア」平「お前もお前ぢや、上様よりお預けなさるゝ所の、廻船往來の御朱印は大

切なお家の柱、此様な事が聞えらとお國の大事になります、ア、藥袋もない」舞「おれもさう
 は思うたけれど」平「こなたは一向夢中ぢやで」舞「サア今の證文早うたも」平「此證文をくれい
 か」舞「オイのう」平「縫之助様こなたに平太めが一生の御無心があるが聞いて下さりませうか」
 舞「イヤもう今の難儀を救うてたもつたわが身、何なりとも聞くわいのう」平「先以て有難う存
 じまする、別の儀でもござりませぬが、お前の深いひ交してござる島原の傾城總角、私に下
 さりませい」舞「ヤ」平「モウぞつこん惚れぬいてをりまするゆゑ、廓へ通ひまして、お前と腐
 り合うて居るゆゑ、ねから手に廻りませぬ、お前が主ぢやに依ていはれもせず、忌々しう思
 てをつたが、幸ひの所ぢや、私にさつぱりと下されい、總角が起請を持つてござるであらう、
 ドレ下されませい」舞「平太、われは氣が違ひはせぬか」平「何がどう致しましたとえ」舞「イヤも
 う興もあすも覺はてた奴ぢや」平「なんにも覺める事もないがな」舞「ヤイ太夫と深う馴染んで居
 るは廓中にかくれはない、其主の思込んで居る者に惚るさへあるに、何ぢや廓へ通うた、大方
 其位なら、常の客のやうな顔でかつて取つたも知れまい、汝れは／＼ようおれに向つて起請を
 おこせのくれいのと、そんな事よういふなア」平「ハテ惚れたものぢやに依て下さりませい、惚
 る事はなりませぬかな、ドレ起請を下さりませい」舞「まだ／＼ならぬ、今度からそんな事いひ

居ると、手討にするぞ大盗人め」平「サア、よくござりまする、それ程お腹の立つことなら貰ひますまい」舞「なんの爲に」平「ア、そんならせう事もなし」ト立つて往かうとする。舞「コリヤ待て今の證文おこせ」平「アノ此證文を、ヤレ折角こつちへ取つたものを、マア止に致さう」舞「ヤイ其證文持つて居てどうしをる」平「何も致さぬ、大切な廻船の御朱印を書入れた證文ぢやによつて、物ぢやて」舞「ヤ」平「物ぢやて、太夫が起請くれてさつぱりと退いてしまつしやれば上げます、いやぢやと云はつしやると物ぢやて」舞「そんなら汝いふ氣ぢやな」平「何のお主の難儀になる事私が申しませう、總角さへ下さるれば申しませぬ、起請下さりまするか、下さりますであらう」舞「エ、おのれはナア」平「下されますか」舞「ならぬわい」平「ならば物ぢやて」舞「おのれそれを」ト取にかよるを突飛す。舞「モウおのれ」ト抜いて切かよる、刀もぎ捨て。平「ものぢやて」舞「エ、汝を」ト又小刀を抜いて切かよる、もぎ取つて捨て突飛し。平「下さりませぬか、否ならものぢやて」舞「おのれ」ト捕へ。平「こなたの身體の一大事になる事ぢや、篤りと思案して下さりませい、下さるであらう、遅なると物ぢやて」舞「おのれ」ト平太寄つて當る。平「物ぢやて、イヤハヤ結構なものぢやて」ト入る、唄になる、ト縫之助起きて無念のこなし有つて大小差し、身繕ひして切込まうとする、神道源八出で。舞「お待なされませお待

なされませ」舞「イヤ退け、聞かぬ」舞「マア待つしやりませ、遂にない血相して、何處へお出でなされませる」舞「平太めを切つておれも腹切る」ト行うとする。舞「サアようござります、最前からの様子は物蔭から見てもりましたれど、日頃意趣ある平太、私が出てはなほ意地つようなりをつて、お身の妨げにならうと態と控へてをりました」舞「源八モウ堪忍がならぬ」舞「さればサ彼方は抜きさしのならぬ證文を持つてをれば、お腹を立てられます程事の破れになつて、お家に疵が付きまするがや」舞「といてあれを」舞「取返して上げませう」舞「ヤ」舞「取返しさへしたら手の下の罪人どうせうと儘、私次第になされませ」舞「そんなら取返してたもるか」舞「お前は何も知らぬ顔で、うつくしうしてござりませ」舞「イヤもう取返してさへたもればよい」舞「其事を必ず色目にもお出しなされませな」舞「合點ぢや」ト内より。舞「縫之助様縫之助様、將監様がお召遊ばす、縫之助様」舞「ハイそれへ参りまする」舞「ちやつとお出なされませ」舞「そんなら頼んだぞや」舞「私が呑込んでをりまする」ト内より。舞「縫之助様」舞「それへ参りまする、頼むぞや」トいひひく入る。舞「追付私が。せうどもない事仕出さつしやれた、急に取返さねば大事になる。時にかうつ、是では戻しをりさうなものぢやが」ト思案して。かうつ。さうぢや」舞「源八殿」舞「お召なされませる、源八殿」舞「それへ参ります、

ア、まよよ、さうせずばなるまい」ト小首傾け入る、唄になる、ト橋懸より小市尻からけ奥へ忍びこみ。小「イヤサ申す事は申さにやならぬてや」侍「無禮な侍がある」小「逢はにや置かぬ置かぬ」トせり合ひ出る、久馬みのき紋之丞出る。久馬「奥へひどくが何ぢや」十四「イヤ此侍が若殿縫之助様に逢うとお座敷へ通りまするゆゑ、右の仕合でござりまする」久「お聞あられましたか」みゆき「どうやら見たやうなお侍、何の用があつて此屋敷へは参つた」小「然いふ女性はどうなたでござる」久「花満左衛門の奥方サ」小「奥方も口方でも大事な、縫之助殿に逢へば様子の知れるものでござる」みゆき「縫之助殿にあへば様子が知れる、縫之助様をよびや」久「縫之助様」ト縫之助出る。舞「何ぢや何事ぢや」みゆき「あのお侍がお前に逢ひたいといはれまする」舞「ヤ来たか、先刻にから」小「ウ、ン、」舞「ムウ、貴殿にはつひぞお目にかよつた儀もござらぬが、手前縫之助でござる」小「さては御自分が縫之助殿でござるナ、つひぞお目にかよらねば近付であらう筈もなし」近付でござらねばつひぞお目にかよらうやうもなし、近頃無念残念の對面を仕るなア」舞「して御用とはナ」小「成程えらう用がござる、ちよつと夫へ出やッしやれ」舞「拙者にナ」小「いかにも」ト向ふへ出る。舞「御用とはナ」ト小市取繩を出したぐる。小「縫之助腕逸しやれ、異儀に及ぶと、踏付けて繩かける返答は何と」舞「まて、つひぞ逢うた事もない奴が、

此縫之助には何誤が有つて繩掛ける」小「わりや不義者ぢや」舞「不義とは」小「ヤアしらん、しい、身が事は、八幡の邊に塾居する、えらふ永介といふ浪人ものさ」舞「其えらふ永介が何故繩をかけうとはいふ」小「今宵此館へ嫁入して来た淀與三右衛門が妹喜蝶は、身共が夫婦の契約をして居る所に、其主のある喜蝶を嫁にとるは不義密夫、スリヤ身は先の馴染、我は後のなじみ、不義間男といふが、此えらふ永介が誤か、返答は有るまいがなア」舞「スリヤ嫁入して来た喜蝶とそちは懇して居るか、スリヤ被せられたな」久「まつた何とも合點の行かぬ、お聞なされましたか」みゆき「淀の城を預る程の與三右衛門、男のあるものをよもや縁組なされう筈がない」久「コリヤ聞えた、扱はお大名の縁組を見かけて、強請込み金銭をむさほりに来たかたりものぢやな、侍衆こいつ引出さつしやれ」十四「大がたりめ」ト立かよる。小「聊爾せまい、聊爾すると腕に覺は有明櫻、はらくはつと散りめされうか、お笑止な一ツのあんどを蹴破つて、明日の晩から事を缺かすぞ」舞「ア、ラをこがましや、いかに永介、喜蝶と汝女夫ぢやといふには、何ぞ慥な證據があるか」小「證據のない事をいはうか、喜蝶が直筆の二世も三世も言交した起請が證據、是を見い」舞「誠にコリヤ起請、皆粗相すな、慥な證據が有るは、荒立てると此方の武士が立ぬぞ」小「なんと是が證據になるまいか」皆々「ハテナア」久「イヤ、其起請は偽物であら

うも知れぬ」小「千も萬もない喜蝶を爰へ出せ、喜蝶に逢うて喜蝶が身共を見知らぬというたらば、身共は騙りぢや、又いかにも女夫でござるというたらば、縫之助貴様間男ぢやぞよ」舞面白、喜蝶を呼出して詮議する、左近喜蝶を爰へ引ずつて来い」左「畏つてござりまする」みゆき左近「まて〜」舞「なぜお止なされませぬ、是へ呼出し詮議致しまする」小「早う出せ〜」みゆき「まてマアまていやい、縫之助様、喜蝶を爰へ呼出して、もし覺がないと云はしやんすればよけれども、もしいかにも私が夫でござると云はつしやると、いかう詮議がむつかしうなつてくるぞえ」舞「何の難かしい事はござりませぬ」みゆき「難かしいわいなア、ア、氣の毒な」小「何の氣の毒な事がある」舞「大事な左近、早う連れて来い」左「畏りました」ト入る。ムウム紋之丞、そちは此通りを與三右衛門様へ委細に申上げて、是へお出なされといやれ」舞「畏りました」小「だんなない與三右衛門怖うないぞ」みゆき「コレお侍、大事のことを云うてござつたが、いよく夫に相違はないかや」小「えらふ永介武士でござる」ト小市縫之助目くばせする所へ、嫁綿帽子白無垢にて、淀與三右衛門社袴にて、紋之丞、左近付き出る。みゆき「ハテそれは合點の行かぬ」トいひ〜出る。みゆき「與三右衛門殿」與「扱今日は種々の御馳走、將監殿にも殊ない御悅、こなたにも別して御取持でござる」みゆき「イヤもう風情もない仕合でござりまする」與「時に今奥で承れ

ば永介とやら、妹喜蝶にわけが有るとやら、其浪人はあれか」小「いかにもえらふ永介は身共さ」みゆき「お覺がござりまするか」與「ハテ薬袋もない、淀與三右衛門が妹に其様な事が有つてよいものか」舞「與三右衛門様、何とやら私も心悪うござります、喜蝶殿をアノ侍におあはせなされましたらばようござりませう」小「オ、逢はう〜」與「ハテ貴殿の面暗れに、逢ひたくば逢してやらう、妹喜蝶あの侍にあへさ」舞「アイ」ト縫之助の傍へゆく。舞「コレ大事ない、なにもかも諸事は味よう吞込んで居る程に、ちやつと傍へいて、すつぱりと有様にいはつしやれ」小「喜蝶が合點がゆくまい、何であらうと餘の筋はいらぬ、云交して居る事を、すつぱりといひさへすりやよい、サアいうて了へ」トふり切つて縫之助傍へ行く。舞「ハテ扱何であらうと有様にいひさへすりやよい、ちやつといはつしやれ」ト突やる。小「諸事は跡で知れる程に」ト又縫之助方へくる。舞「ハテ扱面妖な」小「怖い事はないわいのう」トつれて来る、もち〜する。舞「マア此帽子を取つて」ト取る、總角なり。總角「縫之助様」舞「マアわがみは」小「マアこなさんは」與「與三右衛門が妹喜蝶、曇り霞のない妹でござる、とつくりと詮議なされい」小「舞「コリヤどうぢや」舞「マアわがみは何して」舞「もう〜縫之助様、わたしや淀與三右衛門が妹の喜蝶でござんす、嫁入して来てお前の女房ぢや程に、かはいがつて下さんせえ」舞「是はマア夢ではないか、與三

右衛門様どうぞります」奥「イヤこれ縫之助殿、御親父將監殿と縁組いたした喜蝶はそれでござる、不調法ものでござれども、こなたを戀こがれまする故、取急いで嫁入致させた、天下晴れて夫婦にするのぢや程に、必ず粗相のないやうに頼み存じまする」奥「ねつから合點がゆかぬ」小「おれも合點がゆかぬ」奥「但し不得心にござるか」奥「めつさうな、これが不得心でたまるものでござりまするか」奥「然らば添うてくだされうか」奥「添はいで何と致しませう」小「何のことぢや」奥「お侍サア喜蝶殿の出やしやんした程に、詮議さつしやれ」小「いえ、コリヤ喜蝶ぢやない、本の喜蝶を呼出して下さりませ」奥「これ、粗相いはしやんすな、淀與三右衛門が妹の喜蝶はわしでござんする」小「何をこなたは、喜蝶ではないもせぬもの」奥「きてふでござんす」小「何程でも喜蝶ぢやない」奥「喜蝶ぢやなくく」小「喜蝶ぢやなくく」トせり合ふ。奥「妹、何をせり合ふことがある、ひかへて居いサ」小「お侍、其喜蝶殿とはいひかはしては居やつしやらぬか」小「イ、エ、こりや何ぢやいなア」奥「何ぢやの斯ぢやのといふ事はない、俺や嬉しうて堪らぬわい」小「各自ばつかり嬉しがつて」小「不義ではないの」小「ちよつと往んで参じませう」小「浪人まつた」小「御意ぢや待たう」小「ハイ」小「喜蝶さん、お前はいひ交した覺は有まいのう」奥「めつさうな、其様な事が有つてたまるものでござりまするか」

小「お侍、いひ交した覺がないと有るからは、約束の通りそなた騙ぢやぞや」小「えと」奥「一腰を差ながら、一國の大名に無實を云ひかけ、それなりにしておかうか、身が妹を伺いふのぢや」小「ハイ。コレ縫之助様、よいやうに云うて下さりませいのう」奥「縫之助様、いかう馴々しい物のいひやうする浪人ぢやが、部屋住なれど左衛門殿の舍弟、彼等しきの素浪人に、知人あらう筈がない、ハテ知人なれば妹喜蝶がな、何やかやさし構ひになりさうなものぢやなア、よもや知人ではござるまい」小「イエ、知人の段ぢやない」奥「ヤイ、ついでおのれ見た事もない奴ぢやが、何故騙りをいうて来た、まつすぐにいへ」小「それは伺いふのぢやいなア」奥「何者に頼れたか有やうにいへ、いはぬと骨をひしいでもいはさにや置かぬぞ」小「イヤ是もすさまじいわ、コレお前頼んで私に斯せいと」奥「ヤイ、そりや何をぬかす、エ、聞えた、扱はおのれ身が熱うなつたによつて、様々偽をいうて、此場を遁れうとする大盗人め」小「是はきようがる、いかに面々ばつかりすつくりと旨い目に逢うたというて、コレ主はぬしとも思ふが、此方がしよらしんとして居る所ではないわいの」奥「よう私にいひ掛をしに來てたな、何やら怖い男では有るわいのう」小「そう、寄つてたかつておれを獨りはね出しものにしたは、アイ、あの喜蝶と申しますはあれは島」奥「そいつくよれ」小「捕つた」ト小市を縛る。小「是は迷惑

な」奥大騙めが、何もぬかすな、じつとして居れば事により歸してくれまいものでもない、いらぬ頭を利くと、直に首が飛ぶぞ」小「アイ、何にも物は申しませぬが、是は又迷惑な事ではある、覺てござりませえ」奥「合點のゆかぬ事ばかりぢや、篤と詮議しや」土「大騙め、おのれ仔細のあるやつぢや、先づ懐中を詮議して」小「何なとなされませ」ト十内懐中をさがし。「さして仔細もない」ト守袋を取り。小「何の爲に」土「懐中に此守袋がござります」ト渡す。みゆき守りを取つて。みゆき「これは」土「何ぞ仔細がござりまするか」みゆき「奥三右衛門様、あの繩付には些と詮議致したい事もござりまする、私にお預けなされて下さりませ」奥「イヤ此館へ仕掛に参つた騙りめ、いかやうにもなさりませう」みゆき「そんなら預りましてござりまする」奥「いかやうとも」みゆき「ソレ片脇へ引据ゑて置け」土「サア立たう」小「立たう、何の事ぢや、ひとつも合點がゆかぬ」奥「奥三右衛門様何も申しませぬ、エ、有難うござりまする」小「何の事ぢや」奥「いよく妹めが儀を頼み存じまする」奥「千年も添ひまするでござりませう」小「壺被つたやうな」奥「イヤ奥三右衛門様、少し詮議が残りました」奥「みどもにの」小「何とやら氣味のわるい物のいひやう、最前あの男めがいひかはした證據と起請を出しました、則ち是にござります」奥「妹自筆で一筆書け」奥「ハイ」ト左近視箱持つて行く、總角書く。奥「久馬見やれ」ト久

馬見合す。久「コリヤ抜群の相違」奥「夫でさらりと詮議は濟まうが」久「ムウ」ト九ツの半鐘打つ。左「子の上刻でござりまする」ト花滿將監出る。將「子の上刻か」奥「左様でござりまする」奥「將監殿、かの勝負只今でござりまするか」將「只今でござりまする、幸ひ皆これに居るわ」奥「見物仕りませうかい」將「双方ともに呼出せ」奥「ハア」ト竹刀しなへを向ふへ直し。奥「關口平太殿」左「神道源八殿」奥「立合の刻限でござるぞ」平「源」ハア、ツ」ト双方より弟子多勢連れ出る。將「源八平太、改めて申聞かすには及ばねど、鎌倉より仰渡された淀川普請、兩人に申付けたれども、互に意趣を拒んで延引する故、鎌倉への聞え御朱印を預る此家の疵になる、夫故しなへ打の勝負、勝たる方へ家の師範、淀川筋の役目一時に申付ける、左様心得い」兩人「ハア」奥「源八平太が争ひは承り及んだ、堤も築かず渡も渡さず、さし當つての難儀は當家でござりまする」將「左様でござりまする」凡そ二三年も普請放つてござりまするゆゑ、誰いふともなしに源八の渡し平太の堤と申します」奥「大切な勝負ぢや、打負けぬやうにしやれ」ト平太を見て睨む、平太總角を見る、嫌がる。平「エ、ウ、ン」奥「双方共にお立合なされい」ト是より身繕ひする、弟子兩方へ別れ急度見て居る。兩人立合ふ、是より兩人將監方に目禮して、それより竹刀打にかゝる、双方の弟子より掛聲、此立さまぐあるべし、つまりに平太源

八を打する。皆「ヤア平太殿お出来しなされた」奥「平太、適の手の内、見事く」奥「出来した、是は花満の家の印可、師範たる者に譲るが古禮、淀川往來の普請も其方に云付けるぞ」ト印可を左近取次ぐ、平太取る。平「有難うござりまする、弟子衆悦ばつしやれ」皆「お手柄申さう様もござりませぬ」平「ヤアきつう骨の折れる事もござらぬ、たまりに控へて居る百姓共へも、此通り申し聞して歸したらよからう」左「畏つてござりまする」ト入る。奥「是で追付普請も成就致さうと存じて氣が休まりまする」奥「左様でござりまする」奥「サア奥へ參つて祝言の盃致さう、奥三右衛門様お出なされい」奥「追付參りませう」奥「みゆき皆引連れておじやれ」みゆき「畏つてござりまする」ト入る。奥「紋之丞參れ」奥「ハア」ト將監つれ入る。奥「源八は定めて殘念に思ふである、併し天災不定というて、大丈夫の氣にかけるものでない、主人の馬の眞先が肝要ぢや、サア縫之助殿、奥で祝言の盃致さう」平「イヤなりますまい」奥「なぜ」平「部屋住ながら一國の大名、傾城を女房にする事はなりませんまい」奥「傾城とは」平「何もかも承つた、奥三右衛門様、餘りなされやうが粹過ぎていやぢやわいの」奥「奥三右衛門が何がどうした」平「こなた様の妹御というて嫁入した此女は、總角といふ島原の傾城さ」奥「奥三右衛門が妹を傾城といふには、何ぞ慥な證據があるか」平「證據お目に掛けませう」ト懷中より狀を出し、右の起請を取り。

平「せきく、御通ひ下され候御心ざし、御嬉しく御座候へ共、こなたにちとくさし構ひ御座候まよ、せひくお思ひ切らせ下さるべく候、此後御返事も申さず候と、ひら様り、あけまきより。此狀と此起請の寫が同筆、是が傾城といふ證據」みゆき「ドレ其狀こよへ」平「御覽じませ」トみゆき取て。みゆき「ほんにのう、コリヤ紛れもない同筆ぢや」ト引裂く。平「オ、これソリヤ何なさります」みゆき「どうもせぬ破つたのぢや」平「それを破つては」奥「平太、妹を傾城といふには又何ぞ證據があるか」平「證據は」奥「ドレ證據は」平「みゆき様何で破らしやれた」みゆき「破つたは其方が爲ぢや」平「けぶけれんな事を仰やるが、何して爲ぢやな」みゆき「家中一統に廊通ひは御法せき、それに、平様りあけまきとは、そちや法度を背いて廊へ通うたか」平「サそれは」平「破つてやるは其方が爲ぢやわい」平「ハア」ト口を開く。奥「平太妹は傾城か篤と見い」平「見すく、傾城の」みゆき「顔を見知つて居れば廊へ通うたのぢやな」平「サそれは」奥「近付かたく見い」平「イヤ近付ではござりませぬ」奥「こな慮外者めが、急度捕へて糺明する奴なれども、妹が一世一度の祝言の夜、今はゆるす以後急度嗜め」平「壺破つたやうな」平「どこも壺がはやる」みゆき「サア構はずと奥へお出なされませ」奥「妹おくへ」奥「アイ」平「ア、何程壺かぶつても、まだこつちにはよい物があるぢや」皆「エ、」平「物ぢやて」ト縫之助睨む、源八顔でとめる。平「と

んと壺ぢやて」平「繩付引立い」皆々「うせう」ト唄になる。

平「ア、どいつもこいつも精出して祝言しあがつたがよい、追付思ひ知らしてこまさうぞ。した
が何と、日比には口聞いても今を見られたか」十四「イヤもう見ぬ事は話にならぬ、常の願と
ばうらはら、イヤもう驚入りましてござりまする。三平「あの又たよかれた時のさまといふ物
は、かよつた形ではござらぬ」伸之進「彼の後ろ足を投られた時は、病犬が水道へ轉け込ださまち
や」平「イヤ拙者もちくと骨も打れうかと存じたが、根からは猫を啾るやうな、あれが腕なし
の振りづんばいでござる」角兵衛源八殿、今日の勝負は、われらも摩利支天へ立願をかけまする
程の儀、こなたも兼て高言を吐いて置いたぢやないか」新造「イヤ是お待ちなされ、百萬だら
うたというて、負けてしまつて、何の役に立ぬ事ぢや、各方は存せぬが、手前はズント思ひ切
りました」角「拙者も是からよい師匠取をして、武藝を勵まにやならぬ、何れもはなんと思召す」
皆々「我々も左様でござる」角「源八殿、向後師弟の縁を切り、指南は頼みませぬぞや」新「指南上
けましたぞや」角「平太殿、此列の者一人も残らずお弟子になりたう存じまする」新「向後弟子に
なされて下さりませうなら有難う存じまする」平「オ、こりや皆利口になられた、それでちつと
米食ふ武士のやうな、ア、したが縁にもない事を教へ込で、きうせん筋へ固つたに依て、一人

一人本街道を教へて、眞人間にしてやらうと思へば、ア、世話やの、満足に教へてやらう
皆々「有難う存じまする」平「皆仕合せなわろたち、有卦に入つたやうなものぢや」皆々「左様で
ござりまする」平「ドレ弟子師匠の盃致さう、奥へござれ」皆々「ハア」ト行かうとする。角「イヤ關
口平太ちよつとお目に掛りたい」平「拙者に」角「成ほど」ト兩人向ふへ出る。平「用とは何で
ござる」角「ハ、ハ、ハ、イヤもう日比は手前もおのれやれ、いでと思はど樊噲項羽でも一握りのや
うに存じたが、なか／＼參るものではない、最前其元の働き微妙の構へに、寄つかよる事では
ござらぬ、向後手前も御指南を受けませう、門弟になされ下されうならば、忝う存じまする」
平「ハテいつにない利口な御挨拶でいたみ入りまする」角「イヤもう甲乙を見ますれば天と地と
申さうか、富士の山を蟻がせよるも同然、及びません」平「イヤ又其様にもござらぬて」角「イ
ヤサ及ばぬと申す證據には、目の前で弟子衆が、其元へ破門致されたを何共申さぬ、又各の前
でかく申すが、此後從ひまする性根でござる」平「是は痛み入る御挨拶、左様に仰やれば此後睦
じう致し、互ひに申しかたらひませうと申したらよからうがいやぢや、貴様は大きな蠅くらひ
ぢやの、此間から兵衛は天下に我ばかりのやうに、いかに願に細工のよい蝶番があるというて、
人も多いに此關口平太と立並んで争ふといふは、膽のたばねの丈夫なと申さうか、盲目蛇に怖

すと申さうか、面の皮の厚いと申さうか、身の程を知らぬと申さうか、けち太い腰骨も痛むであらうが、それは手前が打たうて打つたのぢやない、貴様のけちぶといから叩かれたのぢや、かの水を浴びて居る物を、足首を泥龜めが食ひ付いて引込まうとするを、引捉へられて料理せらるゝと同じことぢや、したが面の皮の厚いのは、零落した時の甚う多足になるものぢやけな、かうさつしやれ、もう兵術は止めにして辻坊下の豆を切る鎌の曲か、それ今の鍋でもかぶる太夫になつたがよい、ハ、ハ、ハ、ハ、源「イヤもうお差圖受けまして、何なりとも稽古致さにやなりませぬ、時に平太どの、先づ御師範の印可はとらつしやる、渡し堤ともに淀川の普請は受取つしやる、先づ言ふ所のない、これで其元の十分になつたと申すもの、時に其替りにちと其元へ御無心の筋がござる」平「無心とはな」源「餘の儀でもないが、物ぢやて」平「ヤ」源「へ、ハ、ハ、物ぢやて、其物を下されまいか」平「ヤ」源「わが身にもまぢやないか、難儀さつしやる事ぢや、又あればかりが女子でもござるまい、サもう貴殿の十分になつたからは、餘の事はいかやうにもなりさうな事ぢや程に聞分て」平「これく源八、何ぢやと思へば物ぢやをば返しくれいか」源「サア夫をどうぞ」平「ならぬ、ずんとならぬ」源「サアなるまい、さう見たに依て貴様を十分に納めた忠義者ぢやに依て」平「ヤア」源「其志を酌わけて」平「ヤイくそんなら何か、その物を貰は

うと思つて、わざと立合の勝負に負けてやつたといふのか」源「イヤ全くさうではない、それは是は是」平「だまれアがれ、うぬは太い奴ぢやなア、いけもせぬ立合に打のめされたが面目ないに依て、物に假託けて云くろめるのか」源「さうではない」平「ならぬ、ぐつとならぬ、大べら坊めが、面の皮の千枚で、又此平太にすはらくと物をぬかすな、皆弟子が落ちたが恥しうないか、此願で、此面で、よう悪たいを聞くなア」ト指で突く。

「せめて無念なと思ふ根性があらば、きん玉でも踏へてくたばれ、アノ大泥坊めが」ト顔をはる。源「源八邪でも非でも貰ひかよつた物ぢや、貰はにやならぬ程に、さう心得ていやれ」平「ハハ、皆聞きやれ、あといふ願ぢや」源「新、源今のやうに打れても」皆「恥しうはないか」源「忠義の恥しめは韓信も股をくぐる、強うても負るもあらうし、弱うても勝つもあらうし、そこは千差萬別ぢやと思つたがよい」平「面白」源「強うて負るならば、其強い所へチトお見舞申さうかい」源「何時なりと御出なされ」平「其そつ首をかう」ト打にかより、十内同じく打掛る、竹刀打にて二人を打する。源「マアざつとこんな物ぢや」新「さういふ所を後からかうと」ト又かよるを立廻あつて打する。源「何人なりとお出なされ」平「コリヤ出来た、けうとい物ぢやが、それは皆とりくの猿を見る様なわろたち、ひやうりでやられもせうが、先生はいかぬて

れ年月が書いて有つたを見て、幼な顔が残つてある、ちひさい時の話し親達の事、憂苦勞を物語して、兄弟の名乗をしたわいなア」舞「それで讀めた、兄左衛門殿、堂上方の娘を妻に貰うたとばかり、親の名もいはず委細は追つて知れうというて暮さつじやつたが、そんなら舞子といふ事を隠さう爲で有つたか」源「そりや私に窃にお話しでござりまする、みゆき様の舞子の時の名は大吉と申しまする」小「いかにも元の名は大吉といふ舞子で有つたけにござりまする」舞「是はしたり」源「そんならお前も此お家の一家ぢやわいなア」小「ア、一家にしては薄いものぢや」源「扱最前聞いてをりましたが、コリヤやつぱり傾城の總角殿でござりまするか」舞「オイのう」源「何ぢややら人組んだ様なわけぢやがどうでござりまする」舞「サアおれも合點が行かぬ、高が此小市は喜蝶といひ交して居る、おれは太夫へ添ひたし」小「そこで縫之助様と相談して、高は喜蝶を去らして連れていぬる約束して置いた所が是ぢや」舞「マア何いふ仔細でおじやつた」源「さいなアお前の金は來ず、其間に身請の客の埒が明いて行かねばならず、死なうと思つた所に、其客といふは思ひがけもない與三右衛門様、何であらうとおれが妹の喜蝶ぢやというて連れてゆく、いふやうにせいと俄に拵へてつれてござんしたわいなア」舞「したが扱は喜蝶殿も、縫之助様も、いひかはした者のある事を知つて、圓う納めうといふ與三右衛門様のお志、仇に

思はつしやりまするな」舞「エ、忝ない」將「様子は残らず聞届けた」舞「ヤア親人様」舞「そこに居るは島原の傾城總角ぢやな」皆「いえ是は」與「いふまい儘に聞届けた、將監殿こなたには先祖より、家中には不義法度の固い掟と承つたが、見ると聞くとは大違ひ、妹喜蝶の婚禮の夜に、傾城遊女を引込み、館は揚屋同然、是で濟みまするか將監殿、急度御返答を承りませう」舞「さてさいはう所もない憎い奴等、源八おのれも同じ穴の狐ぢやな」舞「與三右衛門様、是はどうでござりまする」舞「與三右衛門殿、此者は御自分様の妹喜蝶殿でござります」與「だれが、ついに見た事もない女、廓の傾城賣女めに與三右衛門近付は持ちませぬぞ」舞「イ、エイナア、お前が妹喜蝶ぢやと、私を連れてござんしたぢやないかいな」與「やいく、何をぬかす」ト喜蝶綿帽子を取る。舞「小」ヤア是は」與「宵より婚禮を待つ所に、延引すること道理、コリヤ何ぢや將監殿、淀與三右衛門は武士でござるぞ、妹を揚屋同然の屋形へ嫁入りは得させますまい、傾城ゆゑ妹めは廢りました、淀與三衛門が武士の立つやうの御思案が承りたい」皆「なんの事ぢや」將「成程御尤、返すくも不所存者の倅め、勘當ぢや」皆「エ、」將「七生までの勘當ぢや、早く出て失せう」舞「ハッ」與「成程御尤、勘當さつしやれずばなりますまい」舞「憚りながら與三右衛門様、お前様が」與「將監殿、武士が知行をくれ、召抱へるもまさかの用に立てんため、夫に

家中へ指南もする身を以て、満座の中でぶちすゑられたは、さし當つて祿盗人、こいつらは何なされまする」將「御尤」與「序に勘當なされずば成りますまい」將「源八勘當ぢや出てうせう」與「ナニ勘當とな」與「先づさつぱりと勘當がよからう」將「對面これぎり、うせう」與「ハツ」與「序に申すが、みゆき殿はもと舞子となり、是以て遊女、序に是れも勘當して了はつしやつたがよからう」將「一人たんれいなれば一國亂をおこす」與「一人も置かぬが政道」將「いふに及ばぬ、みゆきも勘當ぢや」皆々「エ、」與「妹、おのれも勘當ぢや」ト突やる。將「エ、」與「妹、おのれが不義も知つて居る、勘當ぢや、うせう」將「なんにも申しませぬ、恠へて下さんせえ」ト「そこら中が勘當だらけになつた」與「イヤ又勘當なされずば、御上へ此事噂あらば家の疵、勘當とはいつちよい思案でござる」將「倅めゆるゑに妹、御を捨てさせます段、なんほう氣の毒に存じまする」與「イヤもう手前などは勘當致せば七生までの勘當」將「手前とても七生までの勘當」與「併し一旦は左様仰せらるれども、指が穢いとて切つては捨られぬ俗のたとへ、少し此勘當與三右衛門會得仕らぬ」ト將監書く。將「これを宜敷申上げて下されい」ト一通認め出す、與三右衛門取つて、與「一、倅縫之助事、身持放埒、又みゆきは遊女なるよし詮議の上不届至極、夫故七生迄の勘當致し申す所實正也、此儀鎌倉へも御披露願入者也、正月晦日、花滿將監、同左衛門。成程此

通り言上仕りませう、とてもこの事に刻限をお書入れなされい」將「心得ました」ト書く。與「是でまがひなき勘當、御家の格式は立ちました」將「家來共門前よりたよき出せ」皆々「エ、」與「とてもこの事に早々たよき出したがよからう」將「奥へいてみゆきめを引すり出し、一緒にうせう、ナニ與三右衛門殿是にござりませう」ト入る、七ツの半鐘。舞、與三右衛門様、コリヤマア何でござります」與「最早七ツ時、六ツ迄はたつた一時、用意の乗物」侍「ハア」ト乗物八人して昇き出る、與三右衛門乗る、花道の方へゆく。皆々「これは」與「明六ツまでに屋敷を立退け、將監殿には覺悟なされといへ、狼狽へて此場に居ると命がないぞ」侍「エイくくく」ト早打の如く昇き入る、皆々呆れて居る。皆々「コリヤ何ぢや」トみゆき長刀にて辨之作を追掛け出る、立廻り有て、みゆきが長刀を打落し、引かたけうとする、源八辨之作を取つて投げる、立有つて辨之作逃けて入る。將「辨之作の主殺しめ」ト手を負ひ出る。皆々「ヤア將監様」ト「南無三寶コリヤどうして手を負はしやつた」みゆき「家來、辨之作が兼て川浦遊軒に頼まれ、私を口説たが、今度の御使者に左衛門様の御供、それに今宵忍入り、私を連れ立退かうとするを支へなされたれば」源「此通りの深手か」トうろたゆる。將「おいの」源「おのれ辨之作め」ト行かうとする。みゆき「源八まで、將監様のお命が危いがや」ト源八戻る所へ紋之丞出る。紋「今迄家中

揃ひ居りましたが、屋敷人ぎれは一人もござりませぬ」皆々「ナニ一人も居ぬか」左近「其上廻船
 往來の御朱印が紛失致しましてござりまする」皆々「ハア」將「ナニ廻船往來の御朱印が」ト死
 る。皆々「是申しこれはア、」源「スリヤ御朱印も辨之作めうぬ」ト花道の方へ駈出す、向ふよ
 りみふね包を背負ひ走り出、血みどろになつて源八に行當る。源「ヤ女房みふねか」みふね「御家の
 大事ぢや〜」ト轉る。皆々「ヤアみふねか」ト源八ゆかうとする。みゆき「コリヤ源八、みふね
 が此形、家の大事ぢやといふがや」少「是マア何ぢやしらぬが、大事やといふのう」ト源八駈
 戻り、みふねを起し呼び生けて。源「コリヤ女房、氣をしづめて物をいへ、源八ぢや〜」みふね「是
 此切先の血を見て、源八に無念なといへ」とのる。源「コリヤ〜跡も先もいはいでは合點
 がゆかぬ、篤といへ、左衛門様が此切先の血を見て、無念なといへとか」みふね「眞の太刀此土器
 それ」ト風呂敷放り出し、ウンとのり死ぬる。源「なんぢや〜、みふねヤアイ」ト色々して、
 「もうコリヤ息が絶たか」皆々「ヤア」源「マア包の中を」ト解く。みゆき「ヤアこりや夫左衛門様の
 御首ぢや」皆々「ヤアナニ左衛門様の、ハア」ト遠攻になり、皆々悔りする。源「兩人遠見せい」
 紋、左近「畏つてござりまする」ト入る、是より思入様々有つて、源八土器の破と太刀とを見て
 思案、みゆきは首に取付き取亂し泣く。源「聞傳へたる天盃の土器眞の太刀、此血を見て無念な

といへと左衛門様が。切腹なれば。ソレみゆき様に戀の叶はぬ意趣、遊軒が大内の」ト思入有
 て、花道の方を睨みつけ。「エ、嗚御無念にござりませう」トみふね方に向ひ。「出來したうい
 者ぢや、よく知せたな」ト紋之丞左近出る。紋「三百人ばかりの人数にて出口を塞ぎました」
 左「承れば屋形を關所仰付けられ、若し狼藉も致さうかと、用心の遠攻ぢやと申しまする」源「推
 量の通りモウ叶ひませぬ、是が左衛門様が、禁裡で騒動をおやりなされ、切腹なされた其おた
 たりと見えまする、兩人旅の用意せい」左近「ハア」源「サア〜是はしたりどうでございます
 る」源「どこへ行くのぢや」源「どこというて、マア宛なしに出るのでござります」皆々「さうして
 爰はえ」源「天下よりの仰付けられ、明けて渡さにやなりませぬ」みゆき「そんなら明けて渡すか」
 ト源八が顔をぢつと見て。源「エ、腑甲斐ない」ト泣く。みゆき「エ、男になりた〜」源「そん
 なら此屋敷に籠る所存はないか」源「ア、是壁に耳天に口、われ〜同士の意趣ならば、いか様
 にもなりませぬ、天下へ引くと朝敵、朝敵となればたとへ後日にいか程の大功なすとも、
 再び相續は叶ひませぬぞや、サア〜とも〜にお諫め申してサア〜」みゆき「ハツ」ト
 取亂して泣く。喜盛「お道理でござりまする」源「マアお立なされませい」ト泣く。源「ア、是〜
 とも〜諫め、エ、何をきよろ〜」源「イヤ此草鞋は右へはくのか左りか、根から知れぬもの」

源「どちらなと穿いたがよいわい」トみゆき足の立たぬ思入、源八みゆきを引起し。源「これみ
 だい様、お前には川浦遊軒熊本辨之作といふ二人の敵がござりまするがや」トみゆき「イヤ、」ト
 みゆき屹度する、其顔へ刀さしつけ。源「これ此血しほは左衛門様の血しほぢやがや」トみゆ
 き身を顛はして睨む。源「モウよいく、サア、立たそく、左近をちらへもかよれいやい」
 トみゆきすがる。源「若殿様御用意、金がござりませうな、お枕金ござりまするか」トみゆき「イヤ、ヤね
 つからない」ト源八取つて。源「ハア、梅檀は二葉よりと、まだ年はもゆかぬに、流石は武士の子程ある、
 も」ト源八取つて。源「ハア、御枕金と申すものは、斯様な時にはか入りませぬ、それにマアねつから
 よい心掛、これ殿様、御枕金と申すものは、斯様な時にはか入りませぬ、それにマアねつから
 無いとは餘りな、高垣の方へ行くがよからうか」ト矢あまた射かける、紋之丞死ぬる、皆々恠
 りする。源「モウ絶體絶命ぢやわいのう」ト捕手あまた出で、見事なる立あり、追うて入る、ト
 黒装束の侍一人づつ出で、五人を一人づつ肩け入る、此間始終ばたく、いろいろ立あるべ
 し、源八手負ひ出でいろく思入あつて。源「縫之介様みゆき様」ト新治くわへ
 めんにて死ぬる。源「みゆき様」ト足を切られ死ぬる。源「斯やうに尋ねても御行
 方の知れぬといふは、敵方へ奪取られたか、エ、無念なナア」ト侍やらぬぞ」ト兩人切られ死

ぬる、鐵砲撃つ。源「ヤア飛道具を持つて卑怯な何やつぢや」ト平太鐵砲持つて出る。平「今汝
 が右手の腕を撃かすめたは、己れに委細をいひ聞かせ、跡にてなぶり殺しぢや覺悟せい」ト源
 は今の鐵砲はうぬで有つたよな」平「左衛門は鎌倉の上便をしくじり、其上兄遊軒に手を負はせ、
 大内を騒したゆゑ、左衛門はくたばつて了うた」源「ナニ兄遊軒とぬかすからは、扱はおのれは
 川浦遊軒の弟よな」平「重罪の左衛門、部類眷族一人も残らず、ぶち殺せとの上意、此屋形は兄
 遊軒に下され、此平太が押領するわやい」源「ヤア人も多に遊軒に屋形を押領しられたか、エ
 エ」平「無念なか、オ、悲しいはずく、みゆきは兄遊軒が心を掛け居れば都へ送り、總角は身
 が女房、喜蝶も手かけにする、縫之介も跡からやると、くたばつたら左衛門に、此平太が傳言
 したとぬかせ」源「エ、遊軒こそ手に入らずとも、己れを打殺して主人への土産、遊軒も跡から
 やる、半座をわけておきをらう」平「なぶり殺しぢや覺悟ひろけ南無阿彌陀佛」ト立廻りある
 所へ、與三右衛門つかくと出で、平太を突のけ。源「源八苦しい早く立退け」平「ても鎌倉
 の咎人を」源「縫之介みゆき事、將監勘當いたしたる事紛れなき自筆ゆゑ、助け遣はす條件の如
 し、勘當の者どもお祟りない有難い勅書」平「ても左衛門が重類を」源「勘當は寅の一天、家没收
 は卯の上刻」平「イヤなんと」源「かよる願をせん爲に、種々に心を碎いたわいやい」源「ぢやとい

うて御主人達は「皆々」皆々「こゝに居るわいのう」ト花道より出る。眞「ヤア」眞「家來を廻し細工はりうく」平「四人のやつら」眞「勅定を背くとたつた一打」ト種が島構へる。眞「エ、お心ざし忝ない」眞「其手紙では心元ない」眞「かくの仕合」ト手水鉢を切る。眞「出来した」平「うぬ」眞「いけ」ト幕

名替人役	一才	一辨	一茂	一權	友十郎	治郎三	新九郎	文七	一與九郎	一おま	一おふ	一飛脚、町人、百姓、仕出し
	兵衛	之	治兵衛	九郎	友十郎	治郎三	新九郎	文七	一與九郎	一おま	一おふ	一飛脚、町人、百姓、仕出し
									三	之	喜世三	

造物一面の黒幕、眞中に渡津場の小屋、橋懸り松原、高札立てあり、砂舞臺に草井戸、在郷唄にて幕ひらく、ト仕出し三人出る。

百姓「しんどい休めく」仕出し「何ぢややら、ようく爰は源八の渡し、もう今から休んでどうなるもので」△「それくまちつと歩めく」耳「なんぢや高札が立つてあるは」○「ドレく」ト讀む。○「一、淀川筋水早く落ち候故、舟にて登る工夫致すものあるに於ては、重罪たりとも其咎

を許し、褒美は望次第たるべき者なり」△「ムウそれでおれも讀めた」耳「爰をどうして源八の渡しといふぞ、因縁の有りさうな事ぢや」○「是は平太といふ人と、源八といふものとして渡し舟堤の争ひがあつたが、源八は負けて平太が兩方ながら普請受取つたけな」△「人にさしてもやつぱり源八の渡しといはすは、太い奴ぢやナ」兩△「さればいのう」ト小屋の内より與九郎、阿呆の形にて出る。與九「コリヤくわいらは何をぬかす、役に立ぬ事ぬかすな首が飛ぶぞ」皆々「ハアイ」與九「頭が高い下にをれ」皆々「ハア、、、」與九「おれは所の代官ぢや、聞けばおのれらは源八様をわるうぬかしをる、此儘ではゆるさぬぞ」皆々「イヤもう何にも存じませぬ、御許されて下さりませ」與九「以後は屹度たしなめ、憎い奴の」ト皆々頭を上げ與九郎が顔を見て「耳ヤイ汝れ、あはうな面をして代官ぢや、ようおいらに辭儀をさせおつたなア」與九「オ、おりや爰な渡しぢや、一ぱい食したハ、、、」皆々「おのれ此儘では堪忍ならぬ」トせり合ふ、橋懸りよりおふね、やつしの形、おまつを連れ、辨當持つて来る、在郷歌。おふね「ア、是々何事かは存じませぬが、愚しいものでござんす、了簡してやつて下さりませ」眞「お家さんか、私が一ぱい食してこましたを腹立てて」ふね「あはうよ、皆もう了簡して下さりませ」皆々「そんなら了簡してやるはやる、渡しをわたしてくれ」眞「それ見たか、否でも應でも誤るはサ」お母「これ與九

郎、そなたの誂への辨當持つて来たぞや」奥「おつとしよ、芋焚いて下さんしたか」丹「何した事やら、お松は我いふ事を」奥「聞くはず、さらば對面致さうか」ト辨當を明けうとする。皆々「先刻にから待つて居る、飯を食はずと渡してくれいやい」奥「喧しい、食はぬ先から喉がにつまる」ふね「皆様を渡して来てから食やいのう」奥「そんならお家さん、お前に預けて置く、犬に取られて下んすな」奥「オ、早う往ておぢや」奥「罪人ども斯まるれ」皆々「罪人とは」奥「ハテ救世の舟へ來いといふ事ぢや」ト與九郎臆病口へ入る、皆々入る、ト橋懸りより飛脚一人出る。飛脚もし女中さん、チト物が尋ねたうござりまする」丹「ハイ何でござりまする」奥「此あたりに渡守の茂治兵衛といふ人がござりまするか」丹「ハイついそちらの方を横へ取つてござりますると、角の家がさうでござります、幸ひ私は其内のもののでござんすが、何の御用でお出なされましたえ」飛「それは幸ひでござります、そんならお前に上げませう、私は飛脚でござります、此狀を届けまする」奥「ハイ、お舟殿まるる、是は向ふの名がござりませぬ、何れからお出なされましたえ」奥「イヤお舟殿に渡すと、先に知つてぢやというてござりました」丹「そんなら慥に受取りましてござります」奥「イヤもう参じませう」ト入る。丹「マア寄つてお茶でもあがつてお出なされませいな、是はしたり、よい所で逢うた、ハテ合點の行かぬ事ぢや」奥「ドレ見せさんせ、

コリヤ父様の手ぢやわいなア」丹「ホンニさうぢや、そこらへ氣を付けてたも」奥「アイ」ト封を切り。

丹「一筆申入れり、いよく御無事に候や、然らば今に御朱印の在所も知れず、承り候へば又總角殿にも揚錢の替りに廊へ参られ候由、定て平太が廊へ通ひ候はん儘、其元面を見知らぬを幸ひに、廊へ入込み、御朱印の詮義なさるべく候、直に詮義致候ては、前の意趣ある平太に候へば、面合はし候事あしく候、宜敷たのみ入り、なほく娘の事も宜く頼み入り、めでたくとも、五月十七日。さては廊へ入込み、御朱印の詮義を私にせいといふのか、ア、何して往たらよかる知らぬ、まで」ト思案する、橋懸りより與九郎、黒羽二重の衣装、編笠被て來る、ト跡より揚屋才兵衛、男二人つれて出る。オ「男共キリ、ひつたて」トお舟とめて。丹「何なされます」オ「ハテ知れた事、廊へ連れて行て揚代の濟まぬものは揚代の法に行なう」丹「イエエやる事はなりませぬ、なぜといはせんせ、揚代の替りに身請をした總角様を廊へやつたぢやないか」オ「さればいやい、總角も前の總角なら戴いて居るけれど、此縫之介といふものが有るゆる勤はしをらず、それで縫之介をつれて往て桶伏にしたらば、總角が勤を大事にするであらと思うて、男共ひつたて」ト皆々かよる。奥「ハア、、、、、」ト笠を取る、あはうなり。

奥「これお家さん、殿さんが舟へ乗らしやる所を掴へて、何のかのといふに依つて、殿様の著るものを著ておれが化けた、何と智謀の程見て置け、きついか」オ扱は己れがふけらしたな」舟「コレ才兵衛さん、マア其やうにいはずとも、モチツト待つて下さんせ、金の工面」オおつと皆までいふまい、金の工面所か、権九郎様に五十兩といふ金借つて、今日の明日のと日延べ、代官所へ断るといふて居らるゝ、それに金どころか、ついそこらにも、金がぶらついてあるにな」舟「そこらあたりに金がぶらついてあるとはえ」奥「拾ひたいものぢや」オソレそこに、目の前に」ト奥九郎捜す。奥「ハテめんような、私が目には見えぬ」奥「ハテ其娘廓へさへやれば五十兩、ナント目の前にあるではないか」舟「さればいなア、あの子にはチト義理のある子なり、まだほんのまよくおうて」オイヤサよい比合でござんすて」奥「まだ去年まで溝でしよやつたもの」松「かよさん私を廓へやつて下さんせ、私や廓へいきたくござんすわいなア」舟「何をいやるやら、廓へいけば芝居と違つて苦しいものぢやぞや」松「私や廓へいて常住殿様の顔が見たいわいなア」舟「ナニ廓へいて殿様の顔が見たい」松「アイは見えて下さんせ」ト守袋の起請を出す。舟「そんならば殿さんと」松「アイ」舟「そりや誰が世話して」奥「わしが中へ入つて」ト思案して、舟「そんならわが身は廓へいきやるか」松「アイ」舟「才兵衛さん、そんならさうして下さんせ、

併しチトお前に無心がある」オ娘さへ来る氣なら、何なりと聞きませう」舟「私も一緒に奉公にゆきたうござんす、仲居になりと遣手とやらになりと、一緒に置いて下さんせんかえ」オイヤそりやならぬ、それでは始めから蟲つきぢや、總體子飼の奉公人でも、ちよこく親が來ると根性がわるうなるものぢやに依て、そりやならぬ」舟「そんなら此相談も止めに致しませう」オ「そんなら金受取らう、金渡せ」舟「金はござんせぬ」オ「すへるなく」舟「ハテ嫌なら縫之介様を連れていて桶ぶせにしたがよい、が世間にはあはうなものが澤山ある、そりや桶ぶせにしたら、さりととは彼は男氣なものぢやと存じて譽めるものもあらうが、桶伏の桶から金は出まいし、又親ぢやもの子ぢやもの、何の一所に居たというて、あの子の爲にこそようあれ、何のわるい事があらう」オ「ア、これく、御苦勞ながら奉公に、お出なされて下さりますと悦びまする、どうぞお出なされて下さりませ」舟「イエく、無理にいかうとはいはぬぞえ」オ「ア、きえたい、どうぞお出下さりませ」舟「そんなら談合致しませう、さうしてマア彼の子の給銀は、揚代さし引して五十兩受取るが、私が給銀はなんほよござんすえ」オ「一年に二兩二分」舟「アノたつた二兩二分」オ「そんなら三兩」舟「アノ三兩」オ「イツソ飛んで五兩」舟「安いもんでござんすな、そんならかうつ、イツソ大坂の新町へ談合せうか」オ「ア、これく、そんなら何程」舟「マア五十

兩「オエ、」舟「ドリヤ一走り往て來う」オア、これく出すく、五十兩出す」オイヤ無理にとはいはぬぞえ」オだれが無理にといふぞいの、娘を五十兩でよい奉公人取つたと思へば、勤をせぬものを五十兩とは」舟「高いかえ」オイヤ、エ安いのぢや、サアざつと埒が明いた、幸ひ此在所にこちらの入判がある、證文認めて金渡しませう、一走りござれ」ト此間に辨之作出て聞いて居る。舟「そんならさう致しませう」オしてあの子は幾歳ぢや」舟「十六で戌の年でござんす、したが彼の子の戌の年は不思議な生れ、戌の年の戌の月の戌の日の戌の刻に生れた戌の年でござんす」オそれは不思議、出世しませう、サアござれ」舟「これお松、私はあなたと、ちつと往て來る程に、どこへも往かずに待つて居やよ、與九郎よ氣を付けいよ、サアお出なさんせ」ト入る。舟「早う戻らしやんせえ」舟「お松さん、アノ是から常住殿さんの顔見て嬉しからうナ」舟「私や嬉しいわいのう」舟「廊へゆくと道中せんならんがお前知つてか」舟「イヤ、ヤ知らぬわいのう」舟「おれが教へてやる、マア斯うつまをとらんせ、斯う足に向ふへ斯う」舟「ズントようせぬわいのう」舟「ハテ不器用な人ではあるほどの」舟「かうかや」舟「わしが跡から見てもござんせ」ト此間に後より辨之作、お松をつれ小屋の内へ入る。舟「ハアこれ」ト權九郎敵役の形にて出る、町人三人つれ出る。茂治兵衛親父の形にて出る。町人「サアよござるわいのうくく」

權九郎「コリヤ老耄め、代官所へつれゆく、サア來い」町人「コレ權九郎、其やうにせずといやいの」舟「コリヤ權九郎、いかに貸したが強いというて、其様にせぬものぢや、ハテ借つた金返す、マア二三日待つてくれい」舟「いやぢやわい、今日の明日の何時まで待つものぢや、サア今受とつた金わたせ」町人「これ權九郎、貸したくといやるが證文でもあるかや」舟「わり様たちは、人に金を貸した事がないによつて、其様な事いふわいのう、金貸して證文とらいで濟むものか」舟「コリヤ權九郎め」舟「なんぢや」舟「なんぢや」舟「一札の事、一金五十兩也、右の金子御入用次第急度返辨申すべく候、若間違ひ候へば、娘お舟を其元へ女房に遣はし申候所實正也。なんとも是でも物いふわいやい」舟「權九郎め」舟「何ぢや」舟「なんぢや」舟「權九郎それは尤ぢやが、マア二三日待つてたも、お舟も今は男を持したに依て、私が儘にもどうもならぬ」舟「なんぢや、娘に男持したした、親父、證文に書入れて男持したというて濟むか、太い奴ぢやなア」ト草履にて叩きかふる、皆々取支へる。町人「マアようござる、もし疵でも付いてはわるい、もう了簡さつしやれ」舟「權九郎いかに手にあうたものぢやというて、胸ぐら取つてわりや何するや」舟「イヤ斯するは」トたよきかふる、後より辨之作權九郎を投げる。舟「イヤ親父、わりや味やるな、腕づくならこい」ト辨之作が顔を見て、「ヤア今のはお侍か、わりや何で

おれを投げた〜」 辨「年寄にもし怪我でも有つてはわるいと思つて、引退けたが何とした」 權「ヤイわれが引退けやうは、えらい引退やうぢやな」 ト掴みかゝる、顔をたよく。辨「アイタアイタ〜」 トそこら捜す。町人「なんぞ落したか」 辨「目の玉はそこらにないか」 辨「おつとあるぞ、梅千の種ぢや」 辨「これ親父、こなた彼のべら坊に金五十兩借つて居るか」 辨「ハイ」 辨「それ返して了はつしやれ」 ト金をやる。辨「エ、スリヤ此金を私に下さりまするかえ」 辨「あのみかえ」 辨「いかにも」 辨「お前は神様か佛様かうぶすな様か、有難うござりまする、コレ皆の衆、悦んで下され」 町人「オ、出来しやつた、はよう返してしまはしやれ」 辨「コリヤ權九郎、金返す受取れ」 辨「受取いぢや」 辨「權九郎證文から先へおこせ」 辨「忙しない、金改めるまちをれ」 辨「證文おこせ」 辨「まだしも似せ金ではない、ソリヤ證文」 辨「おつとせう」 辨「おれが手が改めて見よ」 辨「お前の手も何も、いの字が兩方へ別れてある」 辨「あはうめが」 町人「權九郎金請取つたらモウ往にやらぬか」 辨「こなた衆はいろ〜世話をするの、年寄る筈ぢや、おれが足でおれが去ぬる、構うて貰ふまい、ア、世間にはあはうなものがある、近付でもないものに、五十兩といふ金を遣る、いかい痴呆ものぢや、長生すればいろ〜の事を見るわいやい」 ト花道の中程までゆくと。辨「コリヤ待て」 辨「何ぞ用があるか」 辨「われは何ぞ忘れたものはないか」 ト

權九郎捜して見て。辨「なんにも忘れたものはない」 辨「金を返すからは云分はあるまいナ」 辨「誰ぞ云分があるというたか」 辨「最前はなぜ親父殿を打擲したぞ」 辨「何ぢやい〜、時の明かぬ事いふないやい、そんな強請喰ふのぢやないぞ、金貸して食てゆく權九郎ぢや、返せば云分はない、返さぬさかいでぶつたがなんとした」 ト本舞臺へ戻る。辨「さつきには金返さぬさかいで打擲したが、今は金返したさかいでわれをかう〜」 トむね打くはす。辨「イヤおさむ、いかに差いたと思つてひらめかすな、何でぶつた、なんでたよいた」 辨「返したに依て我をかうかう」 ト又たよく。辨「イヤもう生きても死んでもぢや、侍、われはひよんな者と出入仕掛けた、不仕合なものぢや、喧嘩して生きて戻つた例のない男ぢや」 ト跡へ遁仕度して。「何の、命投げ出して置いてするわい」 町人「はてもうよいわいのう、了簡して行きやいのう」 辨「構ふない、挨拶するとわいら相手ぢやぞ」 町人「構ふなく〜」 辨「サア侍怖さうにせんと爰へこい、高が命一ツぢや、わりや何で挨拶する、おのれを」 ト町人に投げられ。「もう聞かぬ」 ト逃けては。「爰へ來い、どいつでも相手ぢや」 ト遁けて。「コリヤ侍、卑怯なこゝへ來い」 トやかましくいうて町人共向ふへ入る。辨「お前様は神様か佛様か、見ず知らずに私に大故のお金を下さりまして、あはうよお禮申せ」 辨「たんとおの金を只くれるといふ事があるものか、嬉しうござりまする」 ト

辨之作、茂治兵衛が白髪を切り、火にくべて小屋の内より壺を出し合せてのむ。其年の戌の月戌の日の戌の刻」ト戴きのみ、ウント氣を失なふ。其ア、是はお侍様」ト申し申しく」其これはマア何の事ぢや、お侍様」ト申し申しく」其なんぢややらいぬくいはんしたが、まらん呑んしたさうな」其お侍様、お氣が付きましたか、あはう水々」ト井戸の水汲み吞ます。其ウ、ン」其お侍様お氣が付きましたか、ヤアお前のお顔は」其おれの顔が何とした」其「其お前の顔は」其身共が顔がどうした」ト草井戸にて見て、「戌の年戌の月戌の日戌の刻に誕生の女の生臈に、血筋の者の白髪を合せ用ゆれば、相好變ると遊軒殿の秘傳、ハテ變つた妙薬もあればあるものぢやなア」其エ、」其縁あらば重ねて」ト向ふへ走り入る。其なんの事ぢや」ト與九郎、茂治兵衛が襟を持ち井戸に向ひ。其戌の年戌の月戌の日、スンヘンヘンスンハラメンスンキヤウ、ハテ變つた寢言もあればあるものぢやなア」其エ、あはうめ、何やら胸さわぎがしてわるい、お松はどこに居る」其ホンニお松さんに道中教へてゐるが、何處へやら消えさんした」其エ、何ぬかすやら、尋ねをれおまつよ」其お松さん」其まつよ」其まつよ」其「ア、是小屋の内が血だらけぢや」其ヤア」其それお松さんが殺してある、きもとやら

いふものを取つたさうな」其そんなら今の侍が孫の敵ぢや」ト尻からけ花道へ入る。其ア、これ俺一人残して、コレ俺も往かう親父さん」トお松の死骸をかたけ向ふへ入る。其コレ親父さん、イヤ親父さん」ト才兵衛お舟みなく」出る。オサア」事が済んだ、證文取つて金渡す」其いかいお世話、お松や」其、是はしたり何處へ往たやら、コリヤ小屋の邊は血だらけ」オコリヤさうはさせぬわ、證文して金受取るとふけらかして了ふ、其手は食はぬ其金こつちへ」其イエ其金を」オ男どもそいつ踏のめせ」其合點ぢや」トよつて踏む、ドロドロにてお松出る。其コリヤ母さんを何とする」其ヤお松か、何處へいて居やつた、フンもう廓へゆく事がいやになつたか」其それで戻つたのでござんすわいな」其是でも廻したのでござんすか」オイヤもう近年の誤り、トント誤つた」其ア、其様にいはんすなら了簡しよう」オサアそんなら娘駕籠へ乗りや、アノ垂を上げてくれいか、ドレ上げてやりませう」トお松を駕籠へ乗せ歸る。其そんなら私は跡からゆく程に、皆さん頼むぞえ、追付跡からゆく、機嫌よういきやえ」オ娘が上氣したかして、顔が赤うなつた」ト向ふへ入る。其追付ゆく程に待つて居や。ア、女といふものは早う智慧づくものぢやなア、昨日や今日まで子供のやうに思つて居たが、いつの間にやら殿様と」ト涙をこぼし。「可愛やなア、神道源八が女房や娘が、僅な

身の代に傾城の奉公、ア、又愚痴な事いうた、こんな事いうてまで、ドリヤ往にませう」ト
よろしく幕。

第三幕目 揚屋の場

役人替名

一 幫間 幸助	一 同 喜作	一 揚屋才兵衛	一 與九郎	一 縫之助	一 權九郎	一 神道源八	一 茂治兵衛	一 おふ	一 久馬	一 非駕馬籠
新藏	春五郎	友十郎	三十三郎	文七郎	文七郎	新九郎	喜三郎	友世藏	一 人	一 人
一 禿松代	一 同千代	一 同八重	一 傾城玉の井	一 花の井	一 常磐木	一 總角	一 遣手おち	一 記口平	一 關口平	一 侍
小吉	小源	小四郎	新市松	市之丞	松丞	金作	文十郎	彌平	大五郎	大勢

造物惣二重舞臺、向ふ長暖簾まいら戸、下座中二階、橋懸り本大格子、寶來屋といふ行燈懸り、騒ぎ唄にて幕開く、權九郎匍いて居る、才兵衛、お梶詫びて居る、梅の、八重菊、松代、千代鶴、執り傾城の形。

かぞ「マアお待なされませい」罵けたいなぞく」權九郎様突出しの太夫様ぢやに依つて、どうで氣に入らぬ事もあらう、其様に云うたものでもないわいな」松千「マア堪忍さしやんせいな」オ「まだちひさい太夫殿の事でござりまする、悪い事があるなら、遣手のおかぢに阿らせませう」かぞ「私が篤りと異見致しませう程に、マアお待なされませ」罵コリヤやい、金出して買ふにすつたのもぢつたのと、此權九郎遂に女郎に振られた事が無い、ちつほけな形をしくさつて、大ばつたの男を能う振つたな」かぞ「成程御尤でござりまする、私がお腹の癒る様に致しませう」オ「爾うぢやく異見しや」かぞ「コレ花の井さん、こなさんはマアようく、此頃仕立て間も無いに、お客を振るといふ事が有るものか、何で振らしやつた」トつめる、花の井泣く。罵コレコレ其様に荒うさつしやるないのう」千「松泣かしやんすわいなう」かぞ「構うて貰ひますまい、太夫様方の不動は、遣手が折檻せにやならぬ、サア如何いふ事で振らしやつた」罵「振りはせぬわいなう」罵「イヤく振つたく」かぞ「振つたのか」罵「なんの私が振らう、あうたわいなう」

かぞ「あうた。其あうたものが彼の様に仰しやりまする筈が」馬あうたはあうたけれど、つもと
もう」ト泣く。かぞ「權九郎様あはれましたかえ」馬オ、あうたはあうた」馬ソレ見さしやつた
かの」オお逢なされましたら、其様にお腹をお立なされる筈はござりますまいがな」かぞ「何ぞ
外に悪い事がござりまするかえ」馬オ、有る、自體此間からあの遣手のおふねに惚れて居るに
依つて、汝等を頼んでも、イヤすつたのもぢつたのと云うて埒明かぬ、お舟めはこはがる、五
日も八日も此様に流連うたして置いて、おのい等は俺を太郎にかけるのか」オ、全く左様ではご
ざりませぬ、あのお舟が娘を私所へ取ましたに依つて、其目代に遣手奉公に参りましたが、か
の虫付の總角を揚詰にして、ちよつといらはしも致しませぬ、外に結構な身請のお客が有つて
遣らうと思つても、金銀をばつくと毒散かして、廊中を舞けるに依つて、太鼓遣手まで皆お舟
が幕下に屬致して、私も力一杯云うて見る氣ぢやけれど、威勢に畏れて能う申しませぬて」
かぞ「どうぞ手に入れて上げませうと思つて、才兵衛様といろく相談をして居ります、もそつ
とお待なされませい」オ、サア俺もほつと待退屈したに依つて、マア蟲ころしにあの新造を呼ん
だ所が」皆「振らしやんしたかえ」馬イヤ振はせぬ」オ、かぞ「それでもお前」馬サア咄しをして
も、付穂が無く、夫からワア〜ほえる、夫から方々逃げまはるに依つておはへて來たのぢや、

何と俺がのが無理か、女郎が無理か、俺が無理ぢやあるまいがな」馬其様になうてさへあだ憎
てらしいこな様に、きく者はあるまいと思つたにテ、怖」松「手こちらはいやぞ」かぞ「こりや太
夫様ののが尤ぢやわいなう」オ、定めて其位なら、天晴な事ぢやなア」馬俺もやけむぢやぢや、お
ふねが手に入らねば、女郎どもや禿どもを」オ、是は迷惑でござりまする」かぞ「私等も如才はご
ざりませぬ、如何して見ても往かぬに依つて、彼のお舟が娘の常磐木様も、お前に呼していじ
り立さすと、娘を人質に取れたもんぢやに依つて、厭ながら手に入らねばならぬ、此思案は如
何でござりまする」馬出來た、夫ぢや〜」オ、ア、待つたり〜、其常磐木はひら様といふ大
盡の揚詰、是も總角をアノお舟が揚詰にして放さぬに依つて、其人質に買はつしやるのぢや、
外へはやられぬてい」馬這奴が〜、ひらにもせよ壺にもせよ、銀出して太夫を買ふに何を吐
す事がある」オ、でも揚詰でござりまする」馬揚詰なら貰ふわい」オ、先は歴々のお侍様でござ
りまするぞえ」馬侍が何ぢや怖うないぞ、うぬは襟につくか」オ、爾う〜は無けれど」かぞ「そん
なら先のお侍様と御相談になされませ。禿衆迎ひに往かつしやれ」ト此間に吹替の源八、頭
巾被て向ふより出る、記内跡より隨つて出る、此内へ入る。千松「アイ、〜、」ト向ふへ入る。
梅「アレ〜常磐木さんが、平さんと連立つてござんすぞえ」オ、サア是からは、お前の存分に

お貰ひなされたが可うござりまする」眞情に指圖受けいでも、こりや腕づくにこまさう、穴なし汝も呑め」カゴ「サア一ツ上りませ」トぬめりになり、向ふより常磐木道中して出る、禿八重菊付き、跡より關口平太衣裳羽織、侍伴れて出る。平太「コリヤ〜常磐木、もそつと靜に歩け」鳥爰に消え彼處に結ぶ水の泡、浮世に捨つる身こそをしけれ」平「兎角這奴は小ませた事はつかり吐す、コリヤ汝が此様に辛い勤をするは、皆母めが根性からちや、總角が手に入るまでは、存分に慰む程に爾う思へ」カゴ「エ、ひら様、常磐木様も好うお出なされました、サア〜お入りなされませ」鳥先へ行くぞえ」平「コリヤおかぢ、又取逃すな」カゴ「ハハハハござりまする」オ「扱平様待兼山の郭公、サアお入なされませ」平「今夜は意趣返しに、儂も酒攻ぢや程に爾う思へ」ト記内出る。平「平太殿」平「記内最前の奴は」平「跡先へつけましてござりまするが、氣取ましたか此内へ付込みましたる故、お出を相待居りまする」平「隨に彼奴と見た目は違ふまい」平「左様でござりまする」ト常磐木内へ入る、平太記内に呷き橋懸りへ入る。平「亭主何者ぞ内に居るか」オ「ハイお客がござりまする」鳥「イヤ常磐木は是ぢやな、可い〜」平「ソレ」久馬畏つてござりまする」ト權九郎が顔を見て。「ホウコリヤ違うたわ、能く似た處もあるが、ハテ馬鹿な面だなア」ト突倒す。平「誠に横顔を見れば、其儘ぢや」鳥「アレおふね殿が又例の酒に酔

うて戻らんすわいなう」カゴ「ほんになア、エ、あの形わいなう」オ「太夫様方や禿を、なんぞ己が使ひ者の様に申す、おふねが参ります」平「總角もござるか」久「参ります〜」眞直に口説いてしまさうワイ」久「直にお口説なされませ」ト平太に云ふ。オ「カゴ」さらば戀の捌け口を見ようか」ト向ふより傾城總角道中して出る、おふね赤前垂仲居の形、酒に酔ひたる體しどけなく、笹に色々櫛、笄、簀入、小判、鏡、守袋を付け、此笹を持出る。幫間喜作、幸助皆々欲がり、取巻き出づる、右すりかね三味線腕踊なり。鳥「誰に」花の井私に」鳥「わしの子にや遣らぬ、誰に」千、鳥、俺に」鳥「折たもんにや遣らぬ、誰に」喜「幸」はなに」鳥「はなれぬもんにや遣らぬ」ト花道にて色々あつてひよろつく、皆々笹を持ち引捲る故轉ける、皆寄つて引起す、花の井肩へかゝる、囃子止る。鳥「面白〜」オ「喜作惣助、又おふねを引張つておちよばいか、餘り煽動て貰ふまいぞ」カゴ「さうして今日は何ぞ貰はしやつたか」喜「しやつたの段か、マア一寸貰入五つに金三兩」カゴ「ヤア、」幸「何ほ呵られても、おふね大盡でなければ夜が明けぬ」カゴ「エ、そんなら俺も往たら可つたもの、あたほこしもない一生の損ぢや」眞直「コレおふね殿、其様に酒が過ぎて、身も世もたまるものではない、些と控へて下さんせ」鳥「是は太夫す、お志の段申上げう詞もない穿鑿でござんす、此方少しも酔はぬでござんす」鳥「でも道々も、そ

れはく危険うてなる事ぢやないわいなう」かゞイヤおふね殿、總角様を一寸借ましたといふお客がある、一寸貸して下さんすまいか」ふね私が揚詰の太夫すを、借たいといふ客があるか」オコリヤおふね、太夫を買ふは金でする事ぢやに依つてせう事がない、お客があるのに一枚の給銀取つてゐる遣手が野良かはいて濟むか」ふね濟まぬでござんす、親方様屹度あやまり奉つたぢや、ドレちつと又此方の商賣ぢや、お客様の座敷を取持つて」ト行かうとしてひよろひよろする。鳥ア、コレ危いわいなう」ト抱へる。平おふね殿、此中云うた平さんといふのは、彼のさんぢやぞえ」鳥何ぢや平さんとは」ト見て。平ほんに又來んしたかいなう」平しぶとう逢はねばしぶとう通ふ、揚詰の大盡おふねといふ遣手はそちか、ちかづきになりたい」鳥お召なざるよ、爰へ來てお伽申せ」ふね平様とは豫てお噂在原の平様ぢやな、太夫す、だんない行かんせ、私も近附にならう」鳥イヤ夫でも」ふねハテナ私がだんないと云ふからだんないわいなア」ト本舞臺へ來て真中へ直る、皆々次第に坐る。鳥おふねどんござんしたか、待つて居たわいな」ふねイヤ常磐木の變らぬ色は酒が足らぬか、其色の青さでは持つてぬ、大方やいとが足らぬものでがなあらう、こなさんは灸を絶すと悪い性ぢやのに、何故呷附けて置いた通りに、四火患門をすゑて貰はんせぬぞ、私が附いて居ぬに依つて、夫ぢや又お腹が痛うはないか

ドレ」ト往かうとする。鳥コリヤ何する、今宵は身共が揚た太夫、指さす事も成らぬ」ト突飛すを。ふねホイ我物ならぬ情なさ、可しく構ふ事も無し酒持てよ」千然アイ、」ト銚子盃を持つて來る。ふね口が悪い水一つくれ」鳥畏りましてござりまする」ト差出す、おふね幸助が脊中へ恧れ居る。ふねア、さつぱりと是で飲直されるぞ」ト平太總角が手を執り。平奥へ往て抱いて寐るわいな」鳥どの様に云はしやんしても」平縫之助に心中立てるのか」鳥いつやらからふつふつと便りも無し、文も届かぬか音信一つさしやんせぬ、聞えぬぞへ殿様、死出の山も三途の川も、手に手を執つて行く約束ではないかいなア」鳥死出の山も三途の川も、手に手を執つて行くと、羨ましい事ぢやナ」平エ、いけしぶとい、よう此様に仕込をつた、千も萬もない來い」ト引立てる、おふね割つて入り。ふね何なさると」平伴れて往つて」ふねちつとなるまいかいナ」平何故」ふね何故とはつらい、僅た今お侍さんが、常磐木は揚けて置いた、太夫に指さすなと呵らしやんしたぞえ」平や」ふねちつとお赦しく」ト權九郎おふねが傍へ往て。鳥コリヤおふね」ふねヤアお前は」ト見て。「エ、又取違つた程にの、あた厭らしい此顔わいな」ト顔を突く。鳥コリヤく身鯨か何ぞの様に、指でねなすなへ、サア返事は如何ぢや」ふね」とんと厭、極上箱入飛切の厭ぢや、味な事なア」ト笑ふ。鳥イヤこり

やけらつくな、可笑うないぞ、邪でも非でも抱いて寐る程に爾う思へ」平「揚詰の總角そんなら借らうかい」ふね「一寸貸す事もならぬぢや、コレ此方へもそつと寄つて貰ひませう」ト總角をだかへて。ふね「私が是程に思つて居るのに、殿さんに逢ひたい」とは、揚詰の此お客の手前へ、些と無遠慮ではあるまいか、思ひ出して貰ひますまい」平「貸す事もならぬぢやまで」眞「うでもならぬぢやまで」ふね「何と飲直さうぢやあるまいか」かき、幸、唐「可うござりませう」平「記内一つ飲まうぢやないか」久「才兵衛お盃を持って」眞「俺も飲まう、おふね大盡はわりや遣手ぢやないか、俺が座敷を持って」ふね「ほんになア、とんと商賣を忘れた程に、アイ權様ちとお相致しませう」久「さらば常磐木獻さうか」眞「イ、エわしや酒は嫌ひでござんす」久「下戸か」眞「アイ」平「下戸とは面白い」眞「客が飲めと云ふに飲まぬか」ふね「權様遣手といふ者は欲がる者ぢやといふがお定りぢやが御存じかえ」ト權九郎紙入より壹分出し鉢の中へ入れ。眞「えらいものか、小判ぢやない壹分、サア飲めく、酔潰れさして置いて、おとよつてしめる飲めく」トおふね金三兩出し。ふね「誰ぞ助けて欲いなア」眞「オット我等」幸「まんがちな」かき「イヤ私が助ける」ト競合ひ三人寄つて飲み。眞、幸、かき「壹兩づつ有難い」オ「見落しの一分は我等」眞「ヤア汝はけうといものぢやナ」ふね「權様お前の様なひぢりかすりを商賣に、人を痛めて金儲する者が、

廓穿鑿はマアすぎ候ぢや、わたしがきつと太鼓を持つ程に、私相應の大盡におなりなされねば、諸事粹とは申し悪い、粹にならんせ、戀のしやうが餘り野暮な、そうたいの客さんが後家茶屋へ行くもよい、仲居のある茶屋へ行くも揚屋の遣手はしたまでだてな所へ、コレなア如何に相方が見えぬというて去なうとはどうぢやいなア、お前はあなたにばつかり可愛らしうて、其様に堅い殿御を誰も持ちたいなアと、じやらく云ふやら、昨夜の口舌がどうで慙うでと、はでに咄しも纏れるに依つてツイ座も長うなる、其折筋は一すどうやら可愛らしい事が、せきくになる茶の間でねるか、起番の夜は廊下待つて居るやうに、色は心の外ぢやわいなア、其はでもなしに私を口説くとは、役に立たぬてんがうぢや、今の一分でとんとお脈があがつたぢや、爪長屋とはようつけさんした」眞「サア夫は」ふね「旦那くわつくわ」ト脊中を敲く。眞「ツイアイ言負けて好い氣味ぢや」ト權九郎しよけになる。ふね「いかう酔うたく、足揉めく」ト寐轉ぶ。眞「アイく」ト揉む。平「サア常磐木獻いた程に是で一ツ飲め」眞「イエ此様な鉢で」平「つひに飲まぬのを盛殺すが此方の手ぢや」久「飲まいでも飲まず、厭と云ふと口へ注込む」ふね「ハテ仰山な酒盛ぢやなア」平「ハテ總角を借らうとは云はぬ、汝も俺が掲けて置いたに依つて、焼いて食はうが此方の儘ぢや」久「肴には此切炭をほうばらさうかい」ト火入の火を挾

む。平「是は出来したサア飲め」常「そんな無理な事を」平「飲まぬか」久「食へヤイ」鳥「コレおふね殿、あれ見やしやんせいなう」常「詮言して下さんせいなア」ふね「飲んだりく、飲まにや持てぬて」ト寐言の様に云ふ。平「ドレ喫はしてやらう」ト總角鉢を取つて常磐木を引退け。鳥「貸しますでござんせう」平「貸すか」鳥「貸すわいなア」平「貸せば可いて」鳥「貸さう程に、もう常磐木さんは堪忍して下さんせ」オ「サア埒が明いた」久「是から奥へ往て、彼の奴も詮議致しませう」平「奥へ往て一ツ飲まう」オ「サアお出なされませ」鳥「あたはこしもない、可い、俺も奥へ往て小びつちよを對手にして飲んでこまさう」常「幸」且「旦那私も参じませうか」鳥「勝手にしをれ」オ「サア總角来い」オ「サアお出なされませ」ト唄になり平太、總角を伴れ入る、久馬常磐木を伴れ、其外皆々入る、おふね寐て居る、權九郎才兵衛にいろく可笑しき思入、才兵衛驚き。オ「アツ、ツ、ツ、。エ、權九郎さんお前の其形は何ぢやえ」鳥「用場はないか」ト入る、才兵衛も入る、おふねそつと起き思入あつて。ふね「ア、浮世ぢやなア、神道源八が妻や子が、如何にお主の爲ぢやとて、前垂姿で酒浸しになつて、娘は傾城、其娘を賣つた身の代で太夫を揚詰にして、變つた身の上ではある、したがもう百兩は皆になつたが、夜半までに身請の相談、こりや如何せう知らぬ」ト一階にて多勢の聲する。オ「是はもてる物ではないわ」△「常磐木さんは、どうやら持て

ぬ顔付ぢやわいなア」△「常磐木さんの三味線が聞きたいわいな」オ「こりや好うござりませう」常「わしや得う弾かぬもの」△「なアに此中歌うて居やしやんした、わしや知つて居る」ふね「ムウもうしんしやくか、あんじたものではない」△「どうでも聞きたいわいな」オ「サアく」所望ぢや所望ぢや」トかけ置にて三味線引く。ふね「ハアとうぐ、唄ふく、怯ず憶せず屋敷で教へた三味線は女子の嗜み、廓の客の慰みに間に合ふといふは、正味の雙六ばんでよこづち、茶臼が莖のおもしろやまで、イヤく」這樣に云うてゐても埒が明かぬ、時に此方の身請の事は、かうツ」トおふね色々思入ある所へ、茂次兵衛、與九郎伴れ風呂敷をおひ驅出る。△「慥に此邊ぢやと聞いたが」與「格子のある所ぢやと云うたが、爰でござんす」△「爰ぢやく、コリヤ必ず泣えな、何にも云ふな」與「何の云うてたまるもので」△「そんなら可い、アイ誰を頼みたくござります、爰の家にお舟といふわろがあるか、一寸逢して下さりませ」ふね「アイ誰ぢや、此方へ入らしやんせ」△「入つても大事ござりませぬか、御免されませ」ト内へ入る。ふね「何處からござんした」△「イヤ私は些と」ト顔見合せ。「おふねか」ふね「父様」與「お家さんかえ、エ、」ト泣くを茂次兵衛睨む。「泣かぬぞく」ふね「でも能う來て下さんした、文を遣らうにも便りは無し、定めて廓へ來て、跡で憎い奴ぢやと何つて居さしやんしたであらう」△「イヤモウ憎いやら悲し

いやら」奥譯のある事ぢやごんせぬ、コレお松さんはなア」其又吐すか待をらぬか」奥へ、へ、お松さんはお松さんぢやア、」ト泣く。ふね「尤でござんす道理でござんす、お前の心にも姉のみふねが居たらば恚うてはあるまい、産さぬ中ぢやに依つて、廓へ賣つたかと思はしやんせう、なんの眞實の娘より可愛もの、假令此身を刻まれるというても、あの子を放して可いものか、皆お主の爲ぢやと堪忍して下さんせ」其其様に可愛がつてくれる程、おりや身も世もあらぬわいやい」ト泣く。ふね「コリヤ奥九郎、何も彼も汝がよう知つて居るぢやないか、何故父さんの篤りと合點の行くやうに、云うて聞してはくれぬぞいやい」奥「さいなア、云うて聞したけれども、エ、コレ俺より、泣くなと云ふ此なさんがたんと泣かんすわいの」其何吐す、おりや泣きはせぬわい」奥「夫でも涙がちよろ／＼出るわいなア、年寄といふ者はこたへの無いものぢや」ふね「したが氣遣ひして下さんすな、娘も達者に勤めて居りまする」其「ヤ」ふね「私が傍に附いて居るに依つて、風邪一ツ引しはせぬ程に、夫を腹癒に、お前に知らせずに廓へ来たは、了簡して下さんせ」其「ヤア／＼／＼」何ぢや孫は達者で居る」ふね「アイ、しかも廓へ来るはあの子の望み」奥「其譯も篤りと咄しました」ふね「夫ぢやに依つて、辛い勤ぢやとばかり思はしやんすな、殿様に逢ふを頼にして居るわいなア」其「何ぢややらどき／＼」譯が知れぬ、其方

は娘が事を知つて居るか」ふね「常住傍を離さぬもの、知つて居いで何と致しませう」其「猶どきどきとして譯が知れぬ」奥「コレお松さんはな」ふね「アノ中二階に居るわいなう」其「ヤアお松は二階に居る」ふね「又案じたものぢやござんせぬ、客に揚られあの二階に」其「二階に」ト二階に三味線唄を唄ふ。ふね「アレあの聲がお松でござんす」其「ヤアお松か」ト見る、二階にがきの影法師映る。皆「ヨイヨ／＼」奥「ヤアあの影は」ト茂次兵衛奥九郎が口を押へちつと泣く。ふね「常よりは達者にござんす」其「そんなら殿様を慕うて」ト思入あつて「可愛や／＼」ふね「總角殿に勤をさすと、生きては居ぬと殿様の御短氣、お松が身の代で今日までは總角殿を人に達さず、我娘の戀の取持して、總角殿をそでにする、末の出世を娘ですると世間の口の端、總角殿の妬み、源八殿まで忠義の立たぬ悲しさに、折角逢はうと思つておぢやつた娘なれども、隠し秘んで逢はせぬも義理詰、殿様はつい傍に御座る事も知らずに、逢ひたい／＼と云うてゐる心根可愛うござんす」其「そんなら殿様には逢さぬか」ふね「アイ」其「可愛や／＼」ふね「侍には何になつたものぢやぞ」ト奥九郎二階へ行かうとするを茂次兵衛引戻し。其「何處へ行く」奥「私は常々殿様によく似た／＼と云うて、私ばかりを廻して居やんした、今の譯を聞けば可愛さうに、せめて俺が顔なと見せて樂ましてやるのぢや」其「あんだらめ、汝や俺が逢ふとつい消え

る」ふね「何がえ」茂「サアそりやあの、二階の客が座敷の興が醒める、消える、些との間なと消えぬ様にしてくれをれ、エ、阿呆め」ふね「其様に思うては疾病が出る、今でこそ此様な浅ましき形になつて居れど、追付殿様を御世に出して、娘も歴乎とした聲を取りますわいな」茂「何ぢや娘に聲を」ふね「アイ」奥「ワア」と大泣。ふね「何を泣く事があるぞいやい」茂「娘其方に無心がある、聞いてたもるか」ふね「父さんとした事が改まつた、何なりと云はしやんせいナ」茂「餘の事でも無い、お松が願を聞いてたも」ふね「お松が願とはえ」茂「如何に忠義なればとて、逢さぬとは餘り酷たらしい、一生の俺が頼みぢや、何卒殿様に逢してやつてたも、お松よ氣遣ひするな、汝が心に入つた様に祖父がしてやらうぞよ、おふね頼む頼むわいなう」トおふね俯向いて居る。奥「コレお家さん、こなさんの前のお家さんが死なんしてから、うづくかして旦那をしじう甜めさんしたぢやないか、コレ物心覺えてからは堪忍の成るものぢやない」茂「コレ孝行は外に無い、何卒殿様と孫と寐さしてやつて下され、頼むわいなう」奥「私が一生の恩に被ませう程に、お松さんの嬉しがらんす様にして下さんせ」茂「奥「拜むわいなう」」ふね「お前より私に逢してやりたさは、どれ程にあらうと思つて居さつしやんすぞいなう」茂「奥「そんなら逢してやる氣か」」ふね「如何も義理が立ちませぬ」茂「爾うぢや」」ト匕首にて死なうとする、奥九郎おふ

ね止める。ふね「コレ待つて下さんせ」茂「エ、いつそ打割つて云ひたい、云ひたいけれど」奥「云うたら消さんすであらう、お家さん逢して下さんせいなう」奥「逢さいで何と致しませう」ふね「總角さんか」茂「奥「今の様子は」」奥「みんな聞きましてござんす、おふねさん何にも申しませぬ、エ」ト拜み泣く。ふね「此仕儀ぢや程に何卒」奥「假令どの様な事があるというても、是がマア如何黙つて居られませう」茂「兎角好い様に」奥「お松さんは本妻私は妾、二人して中好う添ひますわいな」ふね「有様は親の口から言ひかねてをりました、何卒そんなら」奥「直に爰に寐さしまする」ふね「エ、忝い、そんなら父さん奥九郎も、ちつとの間奥へ」茂「行くなと云うても行かねばならぬ、阿呆来い」奥「アイ」ふね「まだほんの懐子、お前を頼むぞえ」奥「そりや氣遣ひさしやんすな」奥「何時消えうも知れぬ」茂「コリヤそんなら案内してたも」ふね「小座敷へお供致しませう」奥「佛壇のある處へ」茂「コリヤ」ふね「いかさま、義理といふ其義理こそは義理ならぬ、義理の上越す義理もあるまじ」茂「奥「南無阿彌陀佛」」ふね「サアござんせ」ト唄になり、おふね、茂次兵衛奥九郎を伴れ入る、跡にて總角思入あつて手を敲く。奥「アイ、、、、、」ト總角叫く、禿松代入る。奥「今までは私より外に、一生女房は持すまいと思つて居たが、しかも私が床取つて寐さよねばならぬといふも、お松さんと殿様との中へ、よくく先の世で縁を引いて中か、

結ぶの神様の結び様に念が入つたものでがなあらう」ト此臺詞の中に千代鶴、八重菊、松代出て屏風を引き床を取る、花の井、みちとせ、千代菊出る。花「總角さん」鳥「好う来て下さんした、二階客はもう濟んだかえ」花「アイ皆奥の座敷へ往て、二階には常磐木さん一人轉寐してござんす」鳥「そんならお前方を頼む、奥の客へ好いやうに間を合して、常磐木さんを爰へ呼んで下さんせ」三手「そんなら爰へおこすかえ」鳥「頼んだぞえ」花「千「アイお床は可うござんす」鳥「コレ」ト皆々呷く、香込んで入る、總角長持の錠明ける、縫之助色事師の形で出る。鳥「太夫か」鳥殿さん」ト物云はずに行燈の火を手燭へ燈し、暗がりにする、平太後へ出て暗うなる故氣を著ける、久馬出る、是に呷く。ト是より平太探つて橋懸り床の取つてある所へ行く、源八立役の形にて才兵衛が口を押へ出て、同じく床の際へ寄る、總角縫之助點頭合ひ連立床の傍にて。鳥「待つてござんせ」鳥「早うおじや」ト總角元の所へ戻る、久馬床の傍へ探り寄る、平太縫之助を執へる、コレといふ口へ手を當てる。久「平太様御首尾は」平「ソリヤ」ト久馬に渡す、久馬縫之助を縛る、所へ源八、才兵衛を突出し縫之助をとる、久馬、才兵衛に猿轡を締め縛る、源八は縫之助を伴れ探つて内へ入る、平太舌舐りして是より色々思入あり、様々あるべし、所へ中二階より常磐木を連れ出る。常「總角さん今云はしやんした事は」ト口に手を當て。鳥「コレ」ト總角

呷く。常「ヤアそんなら殿さん」ト常磐木呷く。常「エ、アノお前、イエ、夫では」ト又呷く。鳥「眞實」常「眞にかえ」總「なんの神懸けて」常「エ、忝うござんす」ト唄になり常磐木を屏風の中へ入れ、總角屏風引廻し、おふねと顔見合す、おふね物云はずに拜んで居る。鳥「是程は女の常ぢや、堪忍して下さんせ」鳥「子程可愛い者はござんせぬ、了簡して下さんせ」鳥「イエ、私が心の狭いから、嘸蔑視まじやんすであらう」鳥「身勝手な者ぢやと、怨んでござんすであらう」鳥「手を合せて拜みます」鳥「イエ、私が」鳥「堪忍して下さんせ」ト源八、縫之助を連出る。鳥「女房おふね」鳥「ヤアこちの人」鳥「ヤア殿さん」鳥「始終の様子は皆聞いた、いかい苦勞をするなア」鳥「お前に其詞を聞くが氣附人參、好う来て下さんした」ト執付く。何時の間に爰へござんした」鳥「聞けば聞く程、果敢ない浮世ぢやなア」鳥「豊入院殿總山大居士、豊壽院殿角山大居士、今日は左衛門様の御命日、將監様の御速夜」トおふね源八が手を巻り。鳥「みふね命、姉様も今日が速夜」鳥「心ばかりのせめては營み」鳥「今日の命日、人に隠して料具も爰に」ト唄になり位牌を飾る、其前に縫之助を直し、おふね硯蓋に菓子餅を供へる、此間唄。源「嘸御無念にござりませう、追付敵討つてお家を再び取立ませう間、今暫く草葉の蔭でお待なされませ」鳥「其時都に居りませうならば、叶はずとも遊軒を一太刀恨みませ

うもの、何事も不孝の段は、御免されて下さりませ」ト二階の障子明く、中二階にて茂次兵衛鉦打つて廻向して居る。ふね「姉さん、嗚其時は口惜い最後でござんせう、お氣遣ひなされますな、身醜になるというても、殿様の仇お前の敵、追付討つて修羅の苦患を助けませう、お松が事は氣遣ひせずと、草葉の蔭から見下さんせ、其代りには源八殿は貸して下さんせ、未來は三人一つ蓮でござんすぞや、南無阿彌陀佛々々」舞よその無常を告げるやら、心寂しき一ツ鉦「舞幸ひの追善供養、サア總角様二世までの固めの盃、殿の位牌の前で縫之助様と夫婦の盃」舞「エ、夫ではお松さんが」舞其松めが事を、志しに預つた故の祝言、此方は本妻」ふね「其代りには、お傍になりとも娘が事を」舞祝言の謠はあの念佛」ふね「お酌致しませう」ト唄になり祝言する。舞御朱印の盜賊は、慥に平太とは睨んだれども、何を是ぞといふ證據も無し、迂闊にかよらば御朱印を、土灰にもなさば永々お家は埋木、見出すまではと今日まで廊へ入込めども」ふね「慥に是ぞといふ證據も無し」舞女房、序に此戒名に廻向して置け」ト戒名を出す。ふね「山巖喜譽信女、此戒名は」舞娘松が戒名」ふね「エ、」舞お松は死んだわいやい」ふね「エ、それに又先刻に父様が」ト二階より茂次兵衛顔出し。茂「掣殿」舞舅殿」茂「先へ来て居やつしやるの」舞疾参つた」茂「胸に詰つて」と思入して。其處へ云うて下され」ト著物を抛る、

障子びつしやりと閉す。ふね「コレいなア、お松が死んだとは何の事ぢやいな」舞殿さんお前までがどうでござんすぞいなア」ふね「此著物はお松が。血だらけになつて、こちらの人、唯た今まで無事で居たお松が」舞俺が事を思つて、今まで姿を見せたのは、幽霊であつたわいなう」ふね「エ、」舞其方が身の上娘が事、與九郎が話で備に聞いた、何者とも知らず渡し場に於て、娘が生臆を取つたとある、戊の年戊の月戊の日に誕生したる女の生臆に、白髪を合せ用ふれば、忽ち白髪となつて相變るとあり、正しく敵の所爲、其方にも此事云聞かさんと來て見れば娘が面影、殿の事を戀慕ひ、未來の縁を結んで貰ひたさに、此世の縁は總角殿、子に迷はぬ親は無いわいやい」舞夫程にまで俺が事を思つてくれる志、忘れ置かぬ、此世は僅か未來では、長う夫婦になつて遣らうぞよ」ト總角泣く、おふね振袖を持ち色々身に添へ泣く。ふね「母様、傾城になつて居るのに、此櫛は小うて悪い、もそつとむねの高いのを買つてくれいと云うたを、何を榮耀らしい、母も此様に金遣ふのは大抵苦い事か、忠義にする勤奉公、榮耀者と呵つたれば、殿様が今でも見えた時に、わたしや悪うござんす、何卒すよきの兩さしを買つて下さんせ、殿さんは此様な風がお好かないなアと、死んで居ながら修羅の迎ひは苦にもせず、經念佛の一遍も聞かず、粧ひ化粧や頭髮の飾り、唄三味線を心懸けたは、殿様に添ひたいくと、思ふ心の念

力であつたか、我身の子よりも可愛うて、つひぞ肌を放した事も無いもの、姉さんへの言分は、何と未來へなるものぢや、其方に別れてわしや何とせう、お松、も一度物云うてたも、知らぬ事とて殿様に、逢ひたい／＼と云うて暮したを、逢はしたら可かつたもの、お松堪忍してくれい味へてたも、かはいやく／＼」ト大泣。眞今までは心中を、立てる／＼と思つたが、女の意氣地はお松さんお前に負けた、未來は必ず女夫になつて下さんせ、いとしく／＼」ト此臺詞の内橋懸りの屏風開く、平太率塔婆を持ち聞いて居る。眞泣いたとて悔んだとて歸らぬ事、鬼にも角にも殿の御先途を見届くるこそ娘が追善ぢやかや」眞「アイ」眞せめて佛間に回向がしてやりたい」眞「憚りながら夫は望みまする所でござりまする」眞「あの子が肌身に付けた著物、せめて貴方の手で」ト渡す、縫之助取つて抱緊め。眞可愛やく／＼」ト平太と顔見合す、おふねちやつと源八を押入の内へ入れる、縫之助は中二階へ上る、おふね思入あり屏風の方を見る。平「エ、」ト率塔婆を踏折る、總角を引捕へやうとする。眞「こりや何さしやんす。揚詰の内は指も差させぬと云ふのに、物覚えの悪いおさんではある程にの」平「汝は男に生れ勝つたものぢや、出來すわいやい」眞「其様にもござんせぬて」平「神道源八が女房」眞「エ、」平「夫が逃廻る故、嘸不自由にあらうナ」眞「ハ、ハ、ハ、ハ、一ツも覺えの無い事を」平「わりや源八が女

房ではないか」眞「源八とやら源七とやら、那様者は存じませぬ」平「へ、ハ、ハ、ハ、知らぬであらう、何處ぞ其邊に居さうなものぢやが、正眞の猫に追れた鼠同然、彼處の隅爰の押入の陰に隠れ廻るのら犬めが」眞「サア犬と云はうが猫と云はうが、爰へ出ては彼の衆、イヤサ主に別れて彷徨ふ様な、人が何の此邊に居てたまるものか」平「イヤいふまい關口平太神道源八と、互に兵術を争ふ程の奴が、うぬが主の國を横領せられて、あんけらひよんとしてけつかるはどう腰拔め、爰へ出て平太へ鬱憤を云はぬか、アノ篋坊めが」眞「サア腰拔と云れうが何と云れうが、大切な願ひがあるぞえ」平「爾う吐すは平太が所持して居る廻船の御朱印の事であらう」眞「エ、」平「そりや世話焼くな、俺が持つて居る」眞「エ、」平「可愛や、どの様に働いても知れぬ所に、たほ／＼して置いた、平太に一寸でも傷が付けるが最期、朱印は天へ飛んで了うて、マア此界には無いぢや、ようしたものか、爰へ出て平太と勝負して取返さぬか、取返して見ぬか、こりや何ぢや、ハア飾つた二ツの位牌は、左右衛門と將監が位牌か、エ、あた忌々しい」ト蹴飛す。眞「サア／＼／＼、爰をちつと耐へねば役に立たぬ、是はしたり總角さん如何ぢやいな」平「ヤイうぬが主の位牌ぢやぞよ、其位牌を平太が踏躑るが無念にはないか、口惜うはないか、口惜くば爰へ出て平太と勝負せい、出あがらぬか青蠅めが」ト縫之助中二階より走出で、平太が

胸倉執り。舞「ヤイ汝が爲にも主の位牌を土足に懸けて、恩知らずめ、さうして御朱印も汝が盗んだナ、サア出せ、汝出さぬとて出さずすに措かうか」ト平太黙つて居る、懐を捜し。「こりや懐には無い何處へか隠した、サア眞直に」ト平太、縫之助が首筋執つて捻付け。平「うづ蟲めがうぬ、おのい等が手に觸る所に置いて可いものか、川浦平太は一國の大名、其大名の懐中を家捜して、うぬ盗をひろぐか」ト捻付けて振廻し。「此様にされたら、何處ぞの溝壘めが面を出しさうなものぢやが」舞「御朱印の知れぬ内は、滅多に顔も出されまい」平「總角心に隨へヤイ」舞「エ、此方はなう」ト泣く。平「ヤイみぞ蟲め、やいうぬが總角に腐り付いてけつかる故、身が戀の妨げ、どこぞではくと思つて居たが、爰へ出たは百年め、思ひ斷りました總角を上げませうと、吐しをろう吐せやい」ト色々にじり付ける。舞「出まい、ハテ總角さん出やしやんすな」平「出たが最期、しやぶりとから竹割ぢや」舞「エ、汝はなア」平「汝とはく、エ、生白けたしやつ面、こゝを打つて遣らう」ト縫之助が肩間へ傷付ける。舞「ア、コレ」トおふね留める。平「出たが最期、朱印は消えて了ふ、出て見ぬか、コレ恚うするが出て見ぬか」トこづく。「ハ、ハ、ハ、好い人質が出をつた、總角厭なら抱いて寐ようとは云はぬ、其代りに這奴をつまみ殺すぞよ」舞「サア夫れは」平「出さうなものぢやがナ」舞「コレく、必ず俺を庇うて、

這奴が心に隨うてたもんなや」平「吐した面はいの、此様な目に逢うてもまだ願の滅らぬ、すそびんばふのはつた二才めが、骨も皮もごたくになるやうに、うぬを恚うく」ト捻廻し色あり、無理に踏付ける。舞「もういつそ」舞「隨がやるとおりや死ぬるぞや」舞「サア夫は」平「オオ死たくばいつそ打殺して」ト引廻す、おふね總角を突放し、縫之助を中へ圍ふ。舞「ソレ總角さんを渡します」平「へ、へ、へ、餘程こたへたさうな」舞「引替にするからは、云分はござんすまいがナ」平「總角さへ渡せば、何奴も這奴も緩めてやらう」ト長持へ縫之助を引立入れ錠脚す。舞「是は」平「まだ強ばつて居る總角、ウンと言はした上で此錠渡さう」舞「總角さん常磐御前を知つてぢやあらう」舞「わたしや死ぬると云うても」平「抱れて寐ぬと僅た一突」ト刀逆手に持つ。舞「ア、コレ」平「ウンといふか」舞「サア如何なりと」ト泣く。平「奥へ往て抱いて寐よう」舞「其上で其錠も」平「欲くばやらう、うぬ」ト源八方へ往かうとする、おふね枷になる。「ハテ命冥加なうづ蟲め」ト平太、總角を引立て奥へ入る、唄になり源八奥へ驅込まうとする、おふね執付き。舞「コレ今奥へ行くと總角殿に凶事が出来る、殿様が生きてはござらぬぞや」舞「お尋の源八見付けたぞ」ト走り入る。舞「南無三」ト往かうとする。「コリヤもう網を張つたわいなう」舞「こちの人私が思案は」ト叫く。舞「出来た、そんなら俺は」ト叫き

入る、與九郎出る。與「お家さんアノ、ヤアお前は旦那さん」ト口に手を當ておふね叫く。「ウ
ンウン呑込んだ」ふね「とつさんに早う」ト紙入拾ふ。「こりや最前平太が懐から落した紙入、
此一通は」ト呼んで見て戴き居る。權九郎出る。與「おふね」何處へ往た」ト出る。お
ふね「コリヤ」ふね「エ、權九郎さんか」與「權九郎さんぢやが、今汝は俺に逢たいと云うてお
こしたが、何ぞ用があるか」ふね「アイ」與
「冷えるなア」與「かまうな」トせうらくかく。ふね「ドレ火鉢上げよか」ト火鉢を傍へやる。
與「ついでない事ぢや、ドレあたつてこます」おふね色々思入あり、權九郎見るやうで見ぬ
こなし。ふね「ア、コレづつと冷えるけれど、滅多に火鉢へもあたられず」與「コレ爰へ来てあた
つたが可いわい」ふね「大事ないかえ」與「何の誰が呵る者があつて」ふね「そんならあたろ」ト
傍へ寄る。與「オ、さむ、テモ寒い事ぢや」ふね「權九郎さん、酒飲まうぢやあるまいか」與「飲ま
う」幸ひ爰にある」ト酒銚子を取つて「燗にやる事は面倒な」ト火鉢の上へ懸ける。ふね「權
九郎さん、お前はアノ私に何の彼のと云うて下さんすは、マア定か嘘か夫が聞きたい」與「嘘か
とは曲がない、もう」天邊から足の爪先へ徹へて」ふね「イエ嘘ぢや嘘々、よう私が
うかくと乗らうかいなア」與「ほんに」強いはん」ふね「云はしやんすな、お前がほんの

事なら、私はほんの男があるといふ名ばかりで後家同然、言ふ事聞かいで何とするもので」與「そ
れは夢では無いかいのう、そんなら御意の變らぬ内に早う」ふね「ア、忙しない、まだ些と
云はねばならぬ事がある、口ではかり爾う云はんしても、男の心と飛鳥川と、よう云ふぢやな
いかいなア」與「そんなら心中見せうか、腕引かうか股突かうか、そもじ故なら如何なりとする
わいなう」ふね「イエ」那樣「仰山な心中は要らぬ、お前の體へごくい打たい」與「何のごくい
とはや」ふね「ハテお前は人に勝れて好い男、若し餘處の女子が惚れると腹が立つ、それでお前
の腕へ入黒子をしたい」與「ムウ入黒子は夫は心易い、明日でも内でも来て来う」ふね「ア、那樣水
臭い、爾う云うて欺そてな、もう」心底の知れた、ドリヤ奥へ往て」ト往かうとする。與「ア
コレ」氣の短い、するわいなう」ふね「そんならサア爰へごんせ」ト硯箱出し。與「何とす
る」ふね「ハテ知れた事おふね命」ト唄になり左の腕に書きにかよる、權九郎身を縮める。「ハ
テ臆病な、まだ書くのに何の痛い事であるぞいな」ト御の字を書く。與「ア、コレ」そり
や御の字ぢや、つい平常のおの字を書きやいなう、文盲な人ではあるほどにの」ふね「お前は強
う私を安うさんすの」與「何故に」ふね「ハテ私はお前の女房、女房ぢやに依つて御の字を書くの
ぢや」與「扱は我等が爲の御ふねといふ心か」ふね「アイ」與「もつとも」ト書く。ふね「是でおふ

ね命、ア、針がない鈍な事ぢや」鷹針が無くば明日の事」ト権九郎がねつけのさすがをおふね見て。ふね「イエ、幸ひ好い物がある、此小刀で」鷹ア、コレ、如何に女子の物を知らぬというて、小刀で入痣するといふ事があるものか、神武以降忌物ぢや」ふね「そんなら措かんせ、ドリヤ奥へ往て」鷹ア、是さても氣の短い、サアそんなら入痣した跡は今のぢやぞや、サアサアお突なされ、とんと鳴神が呆れる」ふね「そんならおふね命と彫るぞえ」ト合方、此内権九郎色々思入あるべし、此間ほり、臺詞云ふ。ふね「お前は太分強いわいな、アハ、ハ、ハ」鷹「なんの此位の事は朝飯の茶漬ぢや、私がまへ喧嘩したが知りやるまいの」ふね「イ、エ知らぬわいな」鷹「何が大勢、向ふは拔身を持つて俺に切懸る所を、手を出すは邪魔ぢやと思つて、天窓でこう受けたぢや」ふね「ハテナア、コレ爰が大事の辛抱所ぢや、かうくくくして慥うするともう可い、扱も仰山な」ト早う突く。「ソレ見やんせ好う出来た」鷹「ムウもう終ひか、おりや又ま些と長いものかと思つた、サア約束の通り」ト奥の間へ入り唐紙を締める。ふね「マア、待たんせ、まだ肝腎の事が有るわいなア」鷹「まだかいナ」ふね「ハテ祝言の盃せねば、なれ合女夫になるわいなア」鷹「盃は跡へ廻す」ふね「幸ひ爰に酒がある」ト火鉢の燗鍋に手を添へて、「オ、あつ、是はきつう通つたさうな」鷹「何の熱い事がある」ト取りにかゝる。「あつ

つあつよオ、あつ」トおふね鼻紙に挟み酒をつぎ。ふね「サア私から獻すぞえ」ト権九郎受て手へかよる。鷹「あつあつ」トおふね燗鍋を権九郎が右のかたへあて、二人ながら轉る、色々可笑味あり。ふね「サア是で可い」鷹「フウかたみうらみのない様にしたものぢやな」ふね「コレ此羽織を著やんせ」ト源八の羽織著せる。鷹「何ぢや可笑い物著せやるの」ふね「是でとんとこちの人」鷹「女房共」ト連立ち屏風引きながら入る、記内家來大勢連出て。鷹「平太郎様、平太郎様は何處にござります」ト屏風の内を見て。「ヤアうぬは最前の遣手、誠は源八が女房ぢやよな、ソリヤ家來ども」侍「やらぬぞ」鷹ア、コレ、やらぬとは何の事ぢや、一ツも覺えは無いが何の事ぢや」鷹「ヤアうぬは神道源八ぢやよな」鷹「イ、エ神道ぢやござりませぬ、門徒でござります、喃女房ども」鷹「うぬ其女と共々寢て居るからは、源八に違ひは無いぞ」鷹「コレ、女房は女房ぢやけれど、僅た今ぬくくの女房ぢや、云譯をしてたもいなう」ふね「コレ、こちの人、お前は源八ぢや無いハサ、源八ぢやないさかいで、何處へ出て源八ぢやないと云抜けて下さんせ」鷹「女房が云教へるから、愈源八ぢやソリヤ」侍「やらぬ」ト内より茂兵衛、與九郎に繩懸け出る。鷹「ハイ舅の者でござります」ふね「ア、コレ、父様、お前は三代相恩のお主に繩懸けるとは、大悪人ぢやなア」鷹「コレヤヤ、今時は名を取らうより徳を取れぢや、夫故縫

之助殿に繩懸けて渡す、そんなら這奴が源八か」ふね「ア、コレく、お前の口から主を源八か
と云はしやしたからは、もう顯れたかハア嬉しや」眞「何の事ぢや」眞「コレく、源八、此様な淺
ましい縫之助が姿と思つて、見限つてももう叶はぬ、三世のきえんを結びやい」眞「何の事ぢ
や、こりや皆氣が違つたさうな、阿呆めうぬは那樣事を何處で習つて來をつた、祭りのばんじ
りに雇はれたと思つてけつかるさうな」眞「縫之助最前は能く質者を擱ました、夫は追つての事、
家來ども其奴縛れ」眞「腕廻せ」眞「滅多無上に廻せくと何の事ぢや」眞「卑怯な源八、是非あら
がふとでもあらがはせぬ確な證據があるぞ」眞「證據、面白い」眞「家來ども最前の繪圖を出せ」
眞「何ぢや繪圖ぢや。サア合して見たく」ト家來繪圖を出し合せ。眞年の頃三十年、眼小
く」眞「寸分も相違はござりませぬ」眞「うぬ是でもあらがふか」眞「ア、コレく、何の事
ぢや」眞「右の腕には鐵砲傷あり」眞「出せ。鐵砲傷が確りとござりまする」眞「左の腕にはみふね
命と入痣あり」眞「御ふね命と確りとござりまする」眞「其奴縛れ」眞「畏りました。捕つた」ふね「コ
レこちらの人、入痣から顯れたかと思へばわしや悲しい」眞「何吐す」眞「家來ども引立て」眞「うせ
う」眞「コレお家さん旦那さんに」眞「ふね「シイ」眞「今の佛さんの命日には、何ぞ旨い物を拵へて
進めて下さんせえ」眞「ふね「かはいや」ト茂治兵衛、おふね顔見合せ。「お痛はしやなア」眞「ソ

リヤ兩人を引立てい」ト唄になり。眞「うせう」眞「ハア」ト泣く。眞「うぬら」眞「きりく」眞「う
せう」眞「マアく待たんせ、コレわりや俺を太郎に懸たなア」眞「うせう」眞「うせう」眞「マア
マア待て、よう山を見せなんだな」眞「ハテうせうてや」ト花道へ入る、茂治兵衛、おふね跡見
送り。眞「まんまと是で遁れた」ふね「コレは最前平太郎が懐より落した一通」ト茂治兵衛讀
で見て。眞「是はマア結構な物拾やつたの」眞「ア、嬉しやく」ト兩人拜む、押入より源
八出る。眞「舅殿、女房共」ふね「まんまとお前に仕立てとやりました、此一通は最前平太郎が懐か
ら落した一通」ト源八讀んで見て。眞「スリヤ此一通があるからは、御朱印は平太が所持して
居るか、此様子を若殿様へ」ト長持の錠を抜切り明けて。ふね「ヤア此長持の内が切抜いてござ
んす」眞「内が切抜いて有るとは合點の行かぬ」ト花の井出で。眞「コレく、おふね殿や、こなさ
んが平太の傍に附いて居よと云はんした故、引添うて居たれば、總角様を引連れて裏道から
逃けて去んだ」眞「ナニ總角様を引連れて去んだとあるからは、若殿様も平太めに出し抜かれた
か無念なア」眞「まつと先でござんした」眞「程は行くまい」眞「聲殿」眞「女房共」ふね「是が近道」
眞「合點ぢや」ト尻褰け入る、唄になるト

返し

造物向ふ黒御簾、柳の幹あり、東大臣柱に出口の門あり、雨降りの際、侍 提灯燈し駕籠一挺
總角、縫之助乗せ出る、跡に平太合羽 傘 足駄穿き出る。

昇夫「申し旦那、どうぞ桐油を懸さして下さりませ」侍「大事の急の用事でお歸りなさるよに、小
言吐すと首が飛ぶぞ」平「コリヤ〜」。急の道、駕籠の損じ賃は如何程なりと遣はす、早くやれ
サ」昇「左様なら可うござります」ト向ふへ往かうとする、向ふより源八駕籠の鼻を押戻し本舞
臺へ来る。平「源八か」源「平太か」侍「うぬ」ト提灯切落す。皆々逃げ入る、花道へ追うて行き本
舞臺へ戻る。源「其後は逢はぬが、最前はいかい世話であつたなア」平「汝が爰へ来たは、二人の
奴等取返しに来たか」源「マア那樣もの」平「いかにも戻してやろ」ト駕籠の傍へ抜いて差付け
る。源「コリヤ〜逸まるな、麓相すな、汝には只一言云聞かす仔細がある、逸まるなマア待て
サ、是此一通は最前其方が懐中より落せし一通、此内に往來の御朱印は其元の所持可被成とあ
るからは、其方が手にある筈、此往來の御朱印、若殿の御手よりお上へ差上げねば、盜賊の悪
名が抜けぬ、汝も以前お主の事ぢや、私同士の意趣に、主の大事は替へられぬ、爰を何卒聞分

けて、其御朱印の所在を云うてくれ、武士が手を下けて頼む、聞分けてくれいサ」平「汝はおそ
い者ぢやな、爾うやはらで出たら返してくれうと云ひたいがならぬ、儂には常から意趣のある
奴ぢや、いかにも往來の御朱印は俺が手にあるが、返す事ならぬと云うたら、汝切らざるま
い、切つては水の泡、そんなら助けて置いて云さうと思ふか、此平太が目の黒い内は、金輪際
云ふ事ならぬ、サア切れ〜、サア切れ抜けヤイ」源「ハテ扱今云ふ通りの所存、何の爾ういふ
氣は無い、抵抗せぬといふ證據」ト刀抛出し。「昔の意趣があるなら、汝が存分にして、跡で御
朱印の所在を云うてくれ、頼む〜」平「オ、可い推量、スリヤ俺が存分になるか」源「源八も武
士だ、二言は無い」平「そんならうぬを恚う〜」ト蹴倒し踏付ける。源「サア存分になつ
た、云うてくれサ」平「イヤ〜まだ這樣こつちやない、すつとえらい事がある」源「まだ存分に
ならざ、サア如何様とも爲いサ」平「うぬを恚うして〜」ト下駄にて顔を蹴り踏付け唾を懸け
る。「汝は武士でないか、顔を灰吹にされても無念には無いか、へ、、、張合の無い奴」
源「ハテ抵抗せぬと云ふからは、何の構はう、存分にしてくれ」平「まだ存分にや爲足らぬ」源「ま
だ存分にや爲跡らぬか、此上の存分は」平「汝を存分には恚うする」ト切懸ける、傘にて留め。
源「其存分ばかりは得成らぬ」平「ならねば恚うぢや」ト立になり源八、平太が衣裳の紋を切る、

朱印出る。ト平太抛る、柳の枝へ懸る、高塀よりおふね見て居る。馬「ハテ變つた所に隠しをつたな」平「平太が定紋は、何時でも御朱印ぢやと思つて居よ」馬「最早御朱印の所在が知れるからは、此儘では置かぬ覺悟せい」平「最早あれが出たらしよ事か無い、うぬを殺す覺悟せい」ト唄になり是よりどろくになり、つまり平太を殺す、鷹六つの鐘鳴る、岩疊堀みの駕籠の繩を切り、内より縫之助、總角出る。馬「源八」馬「若殿様」馬「ソレ往來の御朱印」馬「忝い」平「それを」ト源八ボンと切る。馬「御座りませ」ト幕

第四幕目 淀與三右衛門屋敷の場

役人替名	
一 勅使辨の中將	兼 松
一 奴 雁 平	貫 藏
一 與三右衛門女房木幡	才 藏
一 縫之助	大 吉
一 小 市 助	三 十 郎
一 仕丁、侍等數人	東 助
一 傾 城 總 角	金 作
一 與三右衛門妹きてふ	小 伊 三
一 一たの官翁(本名義之作)	治 郎 三
一 神 道 源 八	文 七
一 川 浦 遊 軒	大 五 郎
一 淀與三右衛門	四 郎 五 郎

造物向ふ金襴二重舞臺、家體入込大名屋敷の體、好みあり、橋懸に城の櫓少し見える、中門は橋懸に縫之助小市、白き兜頭巾裝束にて窺ひ居る、高札あり白梅盛りの體、惣面に雪降の體、榛の官翁下座の家體に惣白髮茶を立てて居る、向ふに奴雁平雪にて猿を遣り居る、琴唄にて幕明く、奴二人竹箒にて掃除して居る。

奴「ナントやか内、甚に冷たい事ではないか」奴「冷たい段か、おけすへから脳頭まで縮み上る様なわい」○此方も遊軒様の奴なら、此様に冷たい目はすまいものを」△したがあの様にほだへかると機嫌を損うて、えては笠のだいが落ちるものぢやてや」雁平「ヤイ、汝等はソリヤ何を吐す、身共は旦那遊軒様の御意で猿を拵へて居る、おのいらが差配は頼むまい、がたがた願利くと願引裂いて了ふぞよ」○「わりや見事願引裂くか」雁望なら引裂いて遣らうか」△引裂るよなら引裂いて見よ」雁引裂いて見せう」ト話しう云ふ、小幡袴にて奥より出る、縫之助、小市呟き入る。本「ヤイ、騒がしい何事ぢや」雁「さればでござりまする、此奴らが私めが事をがいには誹ります、夫故喧嘩でござりまする、サアうぬ等何とか云うて見ぬか」本「ヤイヤイ仲間ども、此度八幡御造營に付、禁廷より御勅使がお立なさると、其守護として川浦遊軒様、親御官翁様此所に御逗留、萬事龜相の無い様に吩咐置いたが、若し過失有つては夫與三

右衛門殿の無調法になるが、嗜めく「奴二人段々誤り入りましてござります」無何とえらいものであらうがナ」木「其方達は了うたら休めく」二人「ないく」ト入る。官「雁平く」
 馬「ナアイ」官「倅遊軒はまだ歸らぬか」ト愚癡なる老爺方の臺詞にて云ふ。馬「今日は旦那遊軒様には、淀の景色御遊覽とあつて、御勅使諸共お出なされてござりまする」官「然らば追付歸るであらう、汝は早く迎ひに行け」馬「ナイく」、小幡様、お迎ひに往て参りませう」木「太儀ながら早う往てござれ」馬「ナイく」ト入る。木「是はく官翁様にも、冷えまするのに其様になされずとも、マア些と御休息なされましたが可うござりまするわいな」官「何ほ冷えても爐のたぎりで、差して屈託にもござらぬが、年寄つて久しく蹲ばつて居れば、腰も膝もめりく」と、
 ア、いかう冷えまするて」木「左様でござりませうとも」官「ちとそれへ参つて寛ぎませう」木「サア是へお出なされて、御休息なされましたが可うござりまする」官「左様致さう、さてく草臥たく」ト向ふへ出る。木「お道理でござりまする」官「イヤ又何う見渡した處は如何も云へぬ」
 ト若い臺詞にて云ふ、木幡と顔見合せ。官「イヤなに御内所、此方の夫與三右衛門殿の、いかい心遣ひになりまする」トおやち方にて云ふ。木「これはく御挨拶でござりまする、夫與三右衛門殿は天下より此城を預り居られますれば、天下の御用は則ち手前の勤、さのみ氣苦勞にも

存じませぬが、御勅使様のお供なされまする遊軒様お前様、嘸氣苦勞に覺し召ませうナ」官「倅遊軒が事は、淀川筋巡見致さねばならぬ故、さのみ屈託にもござらぬども、どうぞ参らねばならぬ身の上、又身共が事は茶に事慣れたとあつて、御勅使へ茶を差上げる様にとの事、高位高官に差上げるは、イヤもう氣が張つてなるものではござらぬて」木「左様でござりませうとも、去ながら茶に妙のあるお前故、高位高官にもお附合なされまする、ほんにマア私等も、姫御前ではござりまするれども、茶の稽古致したうござりまするわいな」官「夫は好い心懸、ちと稽古さつしやれ教へて進ぜう」木「そんなら教へさつしやれて下さりませうかナ」官「いかにも教へて進ぜう、併し茶といふものは、いかう難かしいものでござるてや」木「左様でござりませう」官「マア一寸立たつしやれ」木「ナイく」官「其兩手をぐつと上た」木「ナイく」官「何うでござりまするかえ」ト手を上げる。官「ソレく爾う手を上げた所を懸う緊付けたものぢや」ト戯る、振放し。木「あなたとした事が、こりや何事をなされませう」官「ハア茶を教へてやりまする、幸ひ四邊が静なれば、此邊で一吹呑みませうか」木「是はマアあなたとした事が、ひよつと人に知れたら何となされませう」官「なんの人に知れるもので、此間より何處ぞではく」と存じも居つた、此方へ心中と存じ、此文認めて置いた、是を見て返事下され」ト状を懐へ捻込み傍へ寄る、

振放し。本「是はマアお前様は御本性でござりまするかえ、さうして好い年をして。奥三右衛門といふ夫のある身の上でござりまするぞえ、夫にマア。つれない君様参るおよばぬ身より、オオ厭らし」ト投付ける。官「年寄々々」と云うて貰ひますまい、此様に年は寄つて見ゆれども、いでさらば爰だと思へば、若者五六人前も働くてや、無情い君よ、幸ひ四邊は静かなり、こゝらあたりでも随分」ト又戯る。本「放さぬのか放さぬか」官「放さぬく、わしや何ほうでも放しやせぬ」本「年寄だてら力が強うて逆も叶はぬ」官「この力でまさかの時を推量なされい」本「申し遊軒様へ申付けるぞえ」官「遊軒は愚、奥三右に云うても大事な、如何したとて放すものか」ト奥三右衛門最前より出て聞いて居て、官翁を執つて抛る。「是は強い力ぢや、其強さでは」ト見て恠り。本「エ、好い所へ、申し先刻にから如何もなる事では」奥「コレく、奥へ今日は遊軒殿の御親父官翁殿、御勅使へ茶を差上らるよ、かこひの花も念入れよと呟附けたが」本「イ、エイナ、先刻にからあの老爺めが」奥「ハテ扱人には目も耳も無いと思ふて居るか、何事も聞いても居る、又知つても居るわいなう」本「スリヤ先刻にからの事はよう御存じ。ハ、ハ、ハ、ハ、わたしや御存じあるまいかと思つて、ひよつとお疑ひでもあらうかと存じまして」奥「ハテ女といふ者は、味な處へ氣の廻るものではある」ト官翁そろくく入らうとする。奥「イヤ官翁殿でござりまするナ」官「これはく、奥三右殿、此間はいかいお世話になりまする」奥「イヤ其元には今日は御苦勞にござりませう」官「左様にもござらぬてや」奥「イヤ官翁殿、手前共は篤と存せぬ事ながら、茶の湯と申すものも、様々手前のある事さうにござるナ」官「なんとござるやら」奥「先づ恠う手を上げまして、其處を恠う緊付けますか、是に挨拶がござる、其挨拶には其様に年は取つたけれど、いでさらば力づく」と云へば、若い者五六人前も働く、人が何と侮つたとて、此力瘤で此力瘤でく、ハ、ハ、ハ、ハ、」官「イヤ奥三右殿、手前左様な茶は存じませぬ」奥「官翁殿其元にはもうお幾歳におなりなされまする」官「拙者七十六に罷成りまする」奥「七十六。七十六で五六人前とは、ハテ達者な事でござるナ」官「何とござるやら」ト奥三右衛門狀を拾取り。奥「つれない君様参るおよばぬ身より、つれないとは獨り旅の事か、及ばぬ身、此身はハテ變つた身ぢやなア、官翁殿何と茶の湯にも斯様の物が要る事でござりまするか」官「お花鳥の茶の湯の稽古致さねばならぬ」奥「イヤ官翁殿、此つれない君とは如何いふ君ぢや承りませう」官「イヤ奥三右殿、大切な御勅使饗應の茶の湯、殊の外取込みまする、後程お目に懸りませう、ハアぢやてくく」奥「イヤコレ此無情い君は如何ぢやぞいなう」官「ハアぢやてくく」ト云ひく、奥へ入る。奥「ハア、ハ、ハ、」ト此内門の際に縫之助、小市出て聞いて居る。本「テモ扱もマア好い氣味

るナ」官「これはく、奥三右殿、此間はいかいお世話になりまする」奥「イヤ其元には今日は御苦勞にござりませう」官「左様にもござらぬてや」奥「イヤ官翁殿、手前共は篤と存せぬ事ながら、茶の湯と申すものも、様々手前のある事さうにござるナ」官「なんとござるやら」奥「先づ恠う手を上げまして、其處を恠う緊付けますか、是に挨拶がござる、其挨拶には其様に年は取つたけれど、いでさらば力づく」と云へば、若い者五六人前も働く、人が何と侮つたとて、此力瘤で此力瘤でく、ハ、ハ、ハ、ハ、」官「イヤ奥三右殿、手前左様な茶は存じませぬ」奥「官翁殿其元にはもうお幾歳におなりなされまする」官「拙者七十六に罷成りまする」奥「七十六。七十六で五六人前とは、ハテ達者な事でござるナ」官「何とござるやら」ト奥三右衛門狀を拾取り。奥「つれない君様参るおよばぬ身より、つれないとは獨り旅の事か、及ばぬ身、此身はハテ變つた身ぢやなア、官翁殿何と茶の湯にも斯様の物が要る事でござりまするか」官「お花鳥の茶の湯の稽古致さねばならぬ」奥「イヤ官翁殿、此つれない君とは如何いふ君ぢや承りませう」官「イヤ奥三右殿、大切な御勅使饗應の茶の湯、殊の外取込みまする、後程お目に懸りませう、ハアぢやてくく」奥「イヤコレ此無情い君は如何ぢやぞいなう」官「ハアぢやてくく」ト云ひく、奥へ入る。奥「ハア、ハ、ハ、」ト此内門の際に縫之助、小市出て聞いて居る。本「テモ扱もマア好い氣味

な事でござりましたわいなう」奥「されば、年には寄らぬものぢやてなう」木「左様でござりまする、イヤア其文私に下さりませ、今一度恥掻かしてやりまするわいの」奥「イヤ廢にしやれ、遊軒殿の耳へ入つても可くない事ぢや、廢にしやれ」木「イエ、左様ではござりませぬ、云はゞ私が胸が濟みませぬわいなア」ト奥三右衛門兩人を見て。奥「ハテ味に入込んだな、川浦遊軒は淀川筋に七里半の堤を築き、往來自由の普請承ると雖も、川筋を舟にて往來する王未致す者あるに於いては、重罪たりとも科を赦し、恩賞は望次第との仰、奥三右衛門承り其高札、サ家を立つべき綱もと様々に心は盡せども、遊軒が計ひにて獅子飛を切落したれば、淀川筋の水高うして、巾舟にて往來する事思ひも寄らぬ、サ家を立つべき功も無くして、勅使守護の遊軒に刃向ふは朝敵も同然、奥三右衛門が城にある内は叶はぬ事」木「イヤ申し、夫は何事を御意なされまするえ」奥「サア此様な雪の夜には、得て盗賊押込などの徘徊するものぢや、ヤイ目に懸らばナ命がないぞ、サア時節を待つて、見付られぬ様に隠れたら可らう。サア何者も此邊に居らねども、太方雪に隠れさうなものぢや」ト縫之助小市町又隠れる。木「何がいな」奥「アレ、庭の樹木が大方雪に隠れさうなもの、オ、夫が可いく、ハテ入込んだなア」ト橋懸はたたくにて。雁平「サア非人め出さぬか」奥「何にも隠した物はござりませぬ」雁「まだくうぬが、今隠した物出さぬか」木「ヤイ雁平、聲高なそりや何事ぢや」雁「只今旦那を迎ひに大手先へ参りましたる所に、此非人めが何やら合點行かぬ面構へにて御城内を窺ひまする、篤と心をつけますれば、刃物を隠し持居りまする、夫故の詮義でござりまする」木「非人の身として刃物を隠し持居るとは、ハテ合點の行かぬ」雁「サア非人め出せ」奥「何にも隠した覚えはござりませぬ」雁「出さねば愆う」ト少し立廻りにて、みゆき刀ひらりと抜き差付ける。みゆき「隠される丈は秘みますれども、斯様にお目立まする上からは、秘みませう様はござりませぬ、いかにも御覽の通り、愆非人の身と成下りまして、家に傳はる此刀」ト少し見得あつて。「但し又非人は刀を所持致しまする事のならぬ者でござりまするかナ」奥「非人の女是へ参れ」みゆき「ハイ」トつかく出で。「奥三右衛門様」奥「ヤイ、女、つひに見た事も無い見苦しい女、必ず庵相云ふな」みゆき「ハイ、御用でござりましたかナ」奥「非人の身として刀を携へ、城外に徘徊すれば咎める筈、何故又大手先にはうろたへ居るぞ」みゆき「ハイ此刀が賣たうござりまする」奥「なんと」みゆき「斯様の身と衰へ所々に流寓ひまするが、奥三右衛門様はお情深いと承りました、此刀を買うて貰ひませう爲」奥「アノ其刀を」みゆき「ハイ」奥「イヤそりや身共ではあるいまに外、買うて貰はふと思ふ人があつての事であらうがな」みゆき「土、」奥「勅使守護の高家に

ぬ」雁「まだくうぬが、今隠した物出さぬか」木「ヤイ雁平、聲高なそりや何事ぢや」雁「只今旦那を迎ひに大手先へ参りましたる所に、此非人めが何やら合點行かぬ面構へにて御城内を窺ひまする、篤と心をつけますれば、刃物を隠し持居りまする、夫故の詮義でござりまする」木「非人の身として刃物を隠し持居るとは、ハテ合點の行かぬ」雁「サア非人め出せ」奥「何にも隠した覚えはござりませぬ」雁「出さねば愆う」ト少し立廻りにて、みゆき刀ひらりと抜き差付ける。みゆき「隠される丈は秘みますれども、斯様にお目立まする上からは、秘みませう様はござりませぬ、いかにも御覽の通り、愆非人の身と成下りまして、家に傳はる此刀」ト少し見得あつて。「但し又非人は刀を所持致しまする事のならぬ者でござりまするかナ」奥「非人の女是へ参れ」みゆき「ハイ」トつかく出で。「奥三右衛門様」奥「ヤイ、女、つひに見た事も無い見苦しい女、必ず庵相云ふな」みゆき「ハイ、御用でござりましたかナ」奥「非人の身として刀を携へ、城外に徘徊すれば咎める筈、何故又大手先にはうろたへ居るぞ」みゆき「ハイ此刀が賣たうござりまする」奥「なんと」みゆき「斯様の身と衰へ所々に流寓ひまするが、奥三右衛門様はお情深いと承りました、此刀を買うて貰ひませう爲」奥「アノ其刀を」みゆき「ハイ」奥「イヤそりや身共ではあるいまに外、買うて貰はふと思ふ人があつての事であらうがな」みゆき「土、」奥「勅使守護の高家に

は相應の小太刀、買うて貰はふと思ひ、與三右衛門に取次を頼むのか、爾うであらうがナ」
 「お目立まする通り、外へ持つて參られませぬ此刀、目指す處は」與「遊軒殿か」みゆき「ハイ左
 様でござりまする」與「爾うありさうなものぢや」無「ハ、ハ、ハ、見れば鋒先には血にて錆腐つて
 ある鈍物、且那遊軒様に賣らうとは、こなた騙賊めが」みゆき「莫邪が刀も持手の手の内、刀の
 錆も見苦しけれど、血汐の無念ののりの落さぬが、すぐなる心の亂れ焼、些とお目には入りま
 すまいけど、すはと云はど何方でも何奴でも斬りかねぬ業物でござります」與「見事々々、爾う
 見ゆるく」ト此間縫之助、小市出て見て居る。無「願の過たどら乞食め」ト立廻り雁平を
 當てる、見得あつて止る。與「其刀是へ持つて」ト見得あつてみゆき與三右衛門に渡す、篤と見て。
 「鋒先の血、無無念にあらうナ」木「女中、シテあの刀の價は」みゆき「金銀に望はござりませぬ、
 其價は」與「身が屋敷に奉公の望か」みゆき「ハイ左様でござります」與「イヤそりや叶はぬ」みゆき「そ
 りや又何故でござります」與「此度男山八幡造管に付勅使のお成、守護する役は川浦遊軒、與三
 右衛門がお宿申し御馳走申す中に、些とでも過ちあれば朝敵同然、與三右衛門が手にある内、敵
 討はなるまい」木「スリヤ此女中は」みゆき「花滿憲法が女房御幸」與「將監を討つて立退いた辨之作
 は、所在が知れたか」みゆき「遊軒は高位の交り、せめて辨之作なりともと、様々に尋ねても」與「知

れまいナ、知れぬ筈ぢや、辨之作は遊軒が隠匿うて居るぞよ」みゆき「エ、。假令朝敵にならうと
 まよよ」與「家が大事か敵が大事か」みゆき「イヤなんと」與「敵を討つも先祖へ孝、其家國を立てる
 功があるか」みゆき「サア夫は」與「敵を討つて先祖を潰すか、こなた不孝者めが」無「其家國を立てべ
 き功は爰にある」みゆき「縫之助様」無「與三右衛門様、お久しうござりまする」與「縫之助、家國を
 立つべき功があるとは」無「天下より預り奉る關西往來の切手、詮議仕つてござりまする、お受
 取下され」與「いかにも相違無い切手、儘に受取つた」無「いよく」家督の儀は」與「立てられまい」
 みゆき「敵討は」與「なるまい」無「何故な」與「何故家は立てぬ」無「サア其切手で」與「花
 滿憲法事は鎌倉の御名代、大内へ參内し大切な御用を爲損じ、禁裏を騒がしたる科、重類を絶
 せとの仰なれども、勘當の者共にお祟り無いは時の憐愍、川筋普請の事も徒に、大切な預
 りの切手まで盗まれ、科に科を重ねたる花滿一門、假令預りの切手取返したればとて、其儘に
 家國が納められうと思ふかヤイ」みゆき「スリヤ其切手を差上げても」小市「家國は立ちませぬか」
 與「木幡其高札を是へ持つて」木「ハア」ト高札持ち行く。與「縫之助、家國を納める功は是ぢや」
 無「みゆき」是とは」與「淀川筋水早き所、船にて往來する事工夫致す者あるに於ては、重罪たりと
 も科を赦し、褒美は望たるべき者也」ト向ふより。「遊軒様のお歸り」みゆき、無「小市」なに遊軒が」

ト行かうとする。木「コレ御勅使の守護でござりまするぞ」スリヤ其切手は「奥三右衛門が預つた」鳥館の内は取巻いて「小市一人も動きませぬぞ」木「勅使守護の役目も了ひ」みゆき「辨之作が所在も知れ」小市「再び本地に立歸る」奥「今宵の内に時節があらう」木「マア夫までは腰元みゆき」奥「女房、著類も著せ替やれ」木「女中奥へ」みゆき「ハア」小市「みゆき様」みゆき「皆も短氣を出すまいぞ」小市「ハア」木「木幡、小市入る、みゆき、奥三右衛門残る。奥ナニ腰元みゆき、大切なる勅使守護の遊軒殿、随分無禮の無い様に」みゆき「時節までは屹度おあづけ申しまする」奥「夫が可い、ナニ御幸、若又時節に及んだ時、其方が手の内は」トみゆき「響にて松へ手裏劍打つ、小鳥飛去る、鳩一羽落ちる。みゆき「豫て手練は致しました」ト見せる。奥「見事、女に稀なる手の内、併し欺すに手なし、思ひ懸無い處を憐う」ト打懸ける、蓑笠にて受け。みゆき「こりや何となされます」奥「若し敵が憐うせば」ト立廻りになる、みゆき「疊を上げな、奥三右衛門まへ立つ内に飛退く。みゆき「此手練ではナ」奥「見事、所を透さす憐う」ト手裏劍打つ、駒下駄にて受留め。みゆき「是では何とござりませるナ」奥「緊りと抱へたぞ」みゆき「エ、忝い」奥「奥へ往て休息せい」みゆき「ハッ」ト唄になりみゆき入る。奥三右衛門雁平を引起し活を入れる、雁平起きて。雁「ウ、最前の女めは」奥「雁平氣が著いたか」ト雁平胸り。奥「奥三右衛門

様でござりまするか」遊軒殿のお歸り、迎ひに出い「雁ナアイ」ト橋懸より勅使辨の中將、跡より川浦遊軒長社、乗物釣せ家來附き出る、奥より官翁出る。官「是は辨の中將様、只今お歸りなされましたナ」官翁茶の湯の用意は可いか「官「ハッ」奥「遊軒殿、只今お歸りでござりまするか」遊「やうやく只今でござる」奥「先づお通りなされませい」ト辨の中將上座へ直る、官翁、遊軒、奥三右衛門並よく並ぶ。奥「今日は御勅使様、徒歩をお歩ひ遊ばされ、其元様萬事御苦勞」遊「イヤ左のみ苦勞な儀もござらぬが、貴殿には珍客が参つて、嚙御退屈にござりませう」奥「是は御勿體ない」遊「官翁、其方がいうた細工は出来たか」官「ハッ、雁平申付けた細工は出来たか」雁「ヘイ疾仕り置きましてござりまする」ト官翁傍へ猿を持ち行く。官「中々好い細工ぢや、何と御覽じましたか」奥「御幼稚にお渡りなされる故、さぞ道草でござりませう」遊「イヤモ御覽じつけられぬ民家の手業、一段と好いお慰みでござる」官「俸、淀川筋の巡見し召れたか」遊「イヤさして辛う面倒いこともござらねど、どうでも土砂を津の國尻無川へ流し込みます故、思ふ様に行き兼ねまするゆゑ、北山の木を伐しますはずでござる」奥「ハア、御王夫が出来ましたか」遊「餘り水早くて土を保ちませぬ故、北山の木を残らず伐りますると、雨は直に山へ落ち、山の土は二雨くくに淀川へ流れまする所へ、藪をとつて流

しますると、彼の竹の根がしがらんで流れまする中に、右の山土が流れて参りますると、竹の根へ挟まれ、此竹が川中へ土臺となりましますと、自然と川が埋れまする中に、堤を築きまします算用でござる、よくしたものでござるてや」奥「したり、あの早き川瀬、登り船さへ突流される故、行かぬ事と存じたに、川中へ堤を築くとは、其意を得ませぬとばかり存じたに、今のお話驚き入ましてござる」真「イヤコレ奥三右殿ばかりは左様に仰せられるな、悴遊軒が工夫致した堤の事、悪からうと此方一人席つて申上げたぢやないか、夫に今更追従らしい」遊「コレ、年寄だてら、そりや何を云ふのぢや、奥三右殿ぢやというて、追従も云はつしやれいで何と致さう、當時此遊軒に追従せぬ者は、雪で造つた是此猿松、喃奥三右「奥「左様でござりまする」遊「今度の堤の儀も、彼是小智慧の有る衆が、遊軒を嫉んで申上げた故、暫く差控へて居る中、高札ぢやの何ぢやの、川の山のとやつて見ても、サ一人も是ぞ好い事といふものが無い故、せう事無しに又遊軒に仰付られた、爰を思へば世間に智慧の有る者は、いかう少いものでござる」奥「それはモウ此方のお智慧に及ぶ程の者はござらぬ」遊「イヤ、強ち斯様な者が無いとも申されぬ、二人ござる」奥「それは誰でござる」遊「ハテ一人は拙者、今一人は世間の人を一人に致して、ハ、ハ、ハ、」奥「いかさま仰しやれば左様なもの、見ますれば御勅使様には徒

歩をおひろひなされ、此乗物はナ」遊「雁平、其乗物の内に居る者はへ引出せ」雁「畏つてござりまする」ト内より喜蝶腰繩にて出る。奥「其方は」きて「お恥かしうござりまする」真「悴、見れば女、仔細は如何ぢや」遊「只今片沼を歸りまする所、御勅使と拙者が真中へ、鐵砲を打懸けました」奥「ハテ夫はひやいな事ナ」遊「早速邊りを吟味致させました所、彼奴が鐵砲所持致す故、直に捕へて参つた」奥「ハレ危い事ナ」遊「女の手業に斯様の事仕るは、一人の工ではあるまい、同類が有らう、有様に白状せい」真「狙ひ濟して本望遂げうと思つたに、エ、爲損じて口惜いわいやい」ト懐劍にて切懸ける、腕首執へ。遊「奥三右殿、此女見知つて居やつしやるか」真「イヤつひに見た事も無い奴でござりまする」遊「ア、現在の妹を」奥「妹にもせよ、一旦勘當致したれば他人、他人なれば見知らう様はござりませぬ」遊「ハテ氣散じな事ぢやな」真「悴、惣體此間は夜寝悪ひ、用心しやれ」真「遊軒」ト又突にかゝる。遊「コリヤ親を切るか」真「親とは」遊「最前捕へし時、肌を探せば臍の緒の書付、亥の年亥の月亥の日亥の刻の誕生息災延命と書付けたは拙者が手ぢや」真「エ、」遊「鬼やらひの節會の夜、はしたの女に手を懸け懐胎したるは其方、母は些少かの過り有つて大内で追放、其後娘誕生したれども、母は當座に死んだる故、守袋を證據に方々と尋ねて居たが、ハテ健康で居たなア、其方と同じ守袋見よ」ト出す、きてふ合せ見

て。喜「ヤアしつくり合ふからは、そんならお前は父さん、お前が父さんなれば」ト小市と顔見合せ。「ヤアお前は」ト小市隠れる。「父さんなれば。ハア」ト大泣。奥「淀堤に由ある守袋を添へ捨あつた故、拾上げた妹は、遊軒殿の娘であつたよナ」喜「夫への功、憲法様の敵、一太刀恨まうと思うたに、敵は父さん、スリヤ小市殿と。こりやマア何とせうく」ト泣く。奥「御勅使へ鐵砲を打懸けたれば、所詮命は無いと思つて居よ」喜「それ父さんにもせよ夫の仇」ト切懸くる。遊「ハテ扱、スリヤ憲法方の奴と腐り合つたナ」喜「夫への面晴ちや」ト立廻りあつて當てる、ウンとのる。喜「是は」遊「薬でも遣つて下され」ト官翁薬飲す、きてふ起き。喜「エ、」ト泣く。遊「世になきものゝ蚯蚓め等には、遊軒が娘は添はさぬ、追付好い掣取つてやら」ト官翁目で知らす。喜「ウン爾うともく」ト頷く。奥「遊軒殿、手前が召抱へましたる新參の腰元がござるが、其元様を懸詫びまして、何卒お伽と申すも慮外、お茶の給仕になされて下されと望みまする、幸ひ持傳へましたる太刀一口、是をお買なされて下されるまいか、夫を橋渡しに致したいと申す故、宜しう申上けくれうと、次に控へさせ置きましたる、何と御覽遣はされまいか」遊「身共に小太刀が賣りたい」奥「親子共にお目利の上手と承り及びまたしか存じませぬ」奥「最前女の非人めが、旦那に刀を賣りたいと願ひまする、何とやら合點の行かぬ奴でござ

ります」遊「ドレ其刃物見ませうかい」奥「御覽なされませい」ト渡す。遊軒抜いて見て。遊「こりや疑ひも無い眞の御太刀」奥「其鋒先の血。錆を賣りたいと申しまする」遊「買ひませう、其賣主は何處に居まする」奥「小太刀の賣主是へ參れ」喜「ハッ」ト著流しにて出る。遊「わりや憲法が女房みゆき」喜「遊軒様、お久し振でお目に懸りました」遊「遊軒を厭ぢやくと嫌うたが、今思ひ知たつであらうナ、而してマア久しう見ぬ内強う變れたオ」喜「エ、」ト奥「三右衛門止める。昔が今の氣であらうなら、流浪は致しますまいと、悔んで居りまする」遊「奥「三右衛門御幸を此屋敷へ引込んだは、扱は此遊軒を」奥「お寢間の伽が致したい願ひ」遊「ヤ、、何と、奥「意氣地を立てまするも身が可愛さ、野心無いと申す證には、賣りました眞の御太刀、價には妾になりと、以前の好みを受けたい彼が願ひでござる」遊「スリヤ憲法への貞心を捨てよ」喜「お恥かしながら、何處へ執付く島も無い此身、昔の好みを思召し、お傍でお伽が申したさ、お前に逢ひたい。逢ひたい」と思つて居りましたが、マアお健康でお嬉しうござりまする」遊「アノ此遊軒が傍で」喜「御奉公が申したさ」奥「夫故刀賣りまするでござりまする」遊「いかにも買ひませう、一旦心懸けましたら女、寢間の伽させう、みゆき爰へ來い」喜「ハイ」奥「お召なされる行儀よくして參れ」トみゆき思入あり傍へ行く。みゆき「御用でござりまするかナ」遊「汝さへ

寝間の伽せうならば、心許して寝間の伽さしてくれう」ト切懸ける、與三右衛門みゆきを引退ける。遊「こりや何さつしやる」與「何となさるよ」遊此方へ求める小太刀、鋒先の錆びて切味心元無い、女めを試しまする」與「些と御粗相かと存じまする」遊「何が何と」與「此方は勅使守護の役、血をあやしても苦うないか」遊「尤、親人ソレ」與「合點ぢや」トみゆきに切懸る、立廻りの中與三右衛門扇にて打落す。與「三右、こりや何とする」ト手酷く云ふ。與「年に似合はぬ岩疊な事な」與「サア何と仰しやる」ト急に老爺方にて云ふ。與「貴殿には勅使へ茶を差上げる役目、血に錆びたる刀を持つさへあるに、女を試し召るよか」與「サア夫は過りました」與「過りも過りも、御老體には似合はぬ近年の過り」與「ウム」トきめる。遊「親人、お年寄のお引なされい」ト官翁よほく下に居る。遊「與三右殿、いかにも御勅使前で、血をあやさうと致したは、親官翁が無調法、夫とても手前無調法でござる」與「イヤ謝らせうと申すではござりませぬ」遊「イヤあやまりましたでござる、あやまりもあやまり近年の大あやまりでござりまする」與「父さんお前」ト切にかよる、遊軒止めて。遊「雁平女めを試せ」與「ハッ」トみゆきに切懸ける、立廻りにて止め。みゆき「こりや何とする」與「切味試みる」ト立廻りにて與三右衛門雁平を見事に斬る。與「三右こりや何とする」與「何とも致さぬ」與「勅使守護の家來を斬るからは、覺悟であらう」與「這

奴斬つても苦しいない」與「苦しいないとは」與「不義者でござる」與「不義者とは」木幡「其證據は爰に居まする」ト木幡出る。遊「不義の證據見ませう」木「不義の證據は此文、あの雁平めが私に惚れて此付文、官翁様お前も最前御存じ、但し此文封を解いて、内の名を改めませうかナ」與「ア、コレ、成程最前身共も居つた、家來雁平めが此方に不義を働く、扱々憎い奴と思へども、忤が歸つたら手討にもと存じて居つた、與三右能く斬召された、此方の手に懸けるは雁平めが仕合せ」木「爾う仰しやれば此文の、封を解くにも及びませぬ」與「憎い雁平め」與「ハテ斬れたわ、右手の脇より肋を懸けてすつぱり、天晴の業物、錆には寄らぬものでござります」ト遊軒に渡す。遊「いかにお世話でござる」ト不承々に取る。與「愈女はお傍の伽」與「父さんどうでも」ト又寄る。遊「這奴虎の子を飼ふ様な娘、與三右殿、此女めを確と此方に預けたぞ」與「預りました」與「忤、序に其虎の子も」遊「ハテ何程の事がござらう、遊軒親子は些とでも、指さす奴があるも、與三右殿の身の上」與「それで落付いた」遊「サア皆奥へ參れ」遊「最早お茶の湯の刻限、間もござりますまい」與「女房御案内申せ」木「サアかうお出なされませい」與「まづお入なされませう」ト唄になる、辨の中將、遊軒、官翁入る、與三右衛門、みゆき残る、きてふ泣いて居る。みゆき「何を云うても勅使の守護、家の破滅を思つてエ、口惜い」與「折角思ひ思つて

付視うたに、爲損じ剩へ」小市、女房去つた、二世までの縁断つた」喜コレイナそれは」ト行かうとする。みゆき「コレ待つた、遊軒が娘、弟小市に顔合すまいぞ」小市「假令どの様な事が有つても顔合せぬ金打」ト表にて金打する。喜「干、」みゆき「可愛い夫の武士を捨さすか」喜「サア夫は」小市「不忠不義の名を取らすか」喜「サア」みゆき、小市「喜「サア」」小市「如何ぢや」喜「ハッ」ト泣く。みゆき「とは云ふものよ可憐やく」ト與三右衛門は官翁が事思ひ入、きてふ與三右衛門が刀にて自害する。みゆき「ヤアこりや自害しやつたか」小市「ヤア」奥内へ入ると不孝になるぞ、きてふ爾う無くては道は立つまい」喜「私程因果な者は無い、夫に添ひたいばかり、兄様には勘當受け、嬉しやともなく、敵を討つて女夫にならうと思ひの外、敵といふは父さん、どの様に添ひたう思うても、小市様の武士の廢る事なら、必ず入つて下さるすな、もう此世で顔は見ぬ、魂はお前の女房ぢやぞえ、此體は遊軒が娘、せめては敵の肉縁を憐う。憐う扶つたれば、もう心は暗れました、此世の念は切つた程に、せめて未來で女夫になつて下さるせえ」みゆき「夫程までに弟が事思つて居る其方、因果とて惡縁」喜「天下のお咎めある花滿憲法に一家となる事、上への聞えを憚り勘當は致した、未來に遠慮は無い、妹勘當赦したぞ」喜「干、」喜「小市、きてふは未來の妹、改めて與三右衛門が媒人、連添うてたもるまいか」小市「此世こそ敵の

娘、未來は結ばいで何と致しませう、必ず冥途は女房ぢやぞ」喜「其詞を聞いたら思ひ殘す事は無い、未來は一ツ蓮でござんすぞや」みゆき「せめて此子の末期に盃」喜「イヤ、顔を合せばやはり敵」みゆき「ぢやと云うて可愛さうに」ト與三右衛門釣花生にゑのころ柳を生けあるを取つて、きてふが血を入れてくさりを片々はづし。喜「血肉を啜つて因縁を引くといふ、其方も未來永々小市と縁を引く盃」みゆき「私は則ち待女郎」喜「盃に手を差さねば、敵の娘の媒人といふでも無い、ソレ其鎖で」みゆき「縁の鎖の引く盃、取次もせず手も差さず、鎖で引くが二世の結び」喜「息引かぬ内早う」ト唄になり、みゆき此鎖を持ち門の外へ引いて出る、與三右衛門手燭を持ち、此中に遊軒下座の家體にて官翁に囁き入る。官翁鐵砲にて與三右衛門を覗ふ。みゆき「小市、二世の盃」小市「是がきてふが血汐」トちつと泣いて飲む。喜「陰中の陽陽中の陰、コレ此雪も内に陽有つて燃ゆる事、陰の凝固る證據、水は火を消し雪は火をかふ、人間も先づ其如く、雪の火を取る露華と諦めて未來を樂め、是が門火」ト梅の直枝へ火を點ける、雪段々消えて燃行く、官翁鐵砲の上へ水落ちる、官翁鐵砲打付け入る。小市「然らば慮外ながら」トみゆき鎖を内へ引いて入る、唄になり。みゆき「コレ爰に盃」喜「エ、忝い」ト飲む。喜「みゆき殿、其盃是へ」みゆき「アイ」ト又引いて来る、與三右衛門つくづく見て唄になり。喜「ハ、ハ、ハ、ア、ア、ア、神な

る哉妙なる哉、唐土のくわてききは、柳の葉に蜘蛛のとまり水に浮みしを見て舟を造る、今與三右衛門は花生の盃を見て、夜舟の覺りが開けた」みゆき、小市「エ、何と」與「此花生を今一度」トもゆき向ふへ引いて。みゆき「慙うすれば」與「淀川は水早く、五日七日の中に中々船にて上る事思ひも寄らず、七里半の堤を七曲りの中へ直に付け、王城に近道拵へるは、遊軒が心に深い工あらんと思へども、何を云うても大内の仕官、敵討も家國も、此上り舟の工夫こそと、思ひ暮しは此年月、其通りに舟に綱を付け川端を引上らば、米穀萬事運送は思ひの儘、船にて自由は繪と權と、帆を巻くばかりに凝つたるか、綱を付けて引くといふ、僅かな事に心付かざるは、燈臺元暗し、秘事は睫毛であつたよなア」みゆき、小市「スリヤ此通の工夫では」與「重罪たりとも科を赦し」みゆき「所領重縁昔の通り」與「大内への使は小市」小市「ハッ」ト内へ入る。みゆき「ソレ上り舟の工夫」ト花生をやる。與「ソレ高札、今こそ御朱印」ト小市取つて。小市「追付立歸りませう」與「辨之作が行方も、大方今宵知れるであら」みゆき、小市「エ、」與「此一書は遊軒が積悪を言上申す豫ての認め」ト書物出してやる。小市「きてふ然らば」與「表門は氣遣ひ無し、水車の樋口より抜出るを油断すな」小市「若殿にお報せ申さう」みゆき「一時も早う大内へ」與「往け」小市「ハッ」ト走り入る。與「コリヤ妹、犬死とばかり思ふなよ、其方が命は敵討の詮議の種になるぞよ」喜「兎

角小市殿の事を、さらば」ト死ぬる。みゆき「コレ」短い縁であつたなう」ト與三右衛門柳を取つて。與「るのこ柳」トきてふが血汐を柳に塗る。みゆき「是は」與「詮議の種ちや往け」トみゆきを伴れ入る、唄になる、縫之助橋懸りより出る。與「今小市が云うた通りなれば、今宵の中は。何を云うても皆與三右衛門殿に。ソレ」ト與へ行かうとする、みゆき出て。みゆき「縫之助様か」與「みゆき様」みゆき「弟にお逢なされましたか」與「委細残らず承りました」みゆき「可哀やきてふ殿は」與「コレ泣いて居る所で無い、禁廷へ奏聞の早打、遊軒が耳へ入つては」みゆき「氣遣ひなされまするな、門々は堅めさせ、殊に水車の樋口より拔出でまいものでも無いとあつて、天道合さんを以て取巻き、伏勢がござりまする」與「エ、忝い、則ち源八おふねを遣はし置いたれば、氣遣ひはござらぬ」トバタ／＼になる、皆々入る、官翁を與三右衛門追うて出る。與「動くな」與「まつた、官翁には何科あつて取巻き」與「科は其身に覺えがあらう」遊「仕丁ども引け。與三右衛門、親人には何科あつて取巻きさるよ」與「官翁は重罪人」遊「重罪人とは」與「木幡が死骸を持って」與「ハッ」ト木幡死骸戸板にて持ち出る。與「今日勅使へ茶を差上げる官翁の手前、何も心得ぬと、取上げ見れば此如く紫の泡、察する處毒藥、女房が毒味其儘死したるは、重罪人で無いか」與「スリヤ木幡が其茶を飲むや否」遊「覺えがござるか親人」與「微塵も覺えは無い」

與「覺え無い者が、木幡は如何して死んだ」官「サー夫は」與「官」サー夫は「與」官「サー夫は」
官「是は又迷惑な事ではある」與「覺え無いのが實ならば、此茶の毒味してさつぱりと言分さつし
やれ」官「成程此通りですへば逆磔付は知れた事、いかにも此茶飲みませう」與「七轉八倒して早
く斃死つて了へ」官「飲むは飲むが、さりと合點の行かぬ」與「ハテ未練、早く飲まつしやれ」官
「身の言譯、今飲みまする」與「まだしも覺悟、正しく鳩毒に極まるからは、死體は逆磔付ぢやと
覺悟しをらう」ト官翁茶を飲み。官「與三右今茶を飲むが否や、一段と快い、是でも毒に極つた
か」與「ハ、ハ、死しなの世迷言、要らざる事云はずとも、早く斃死つて了へ。色も變らずサ正
しく毒藥なればこそ女房が此有様」官翁は麗々とハアハツ 遊「與三右衛門、手前官翁は御勅使
へ毒は盛ませぬぞ」與「ハツ」ト官翁、與三右衛門を引捉へ。官「ヤイわりや何と言つた、身共は
何者だと思ふ、川浦遊軒が親、禁廷のお茶の根元とも云はるゝ官翁に向ひ、毒を盛つたと云う
たぞよ」與「ハツ、モ與三右衛門が一生の過り、眞平御免されて下さりませう」ト此内官翁痒
い思入あり。官「まだくゞの頤で吐した、汝が様な奴は手討にする」ト切らうとする、遊軒止
めて。遊「コレお年寄の氣を揉まれまするな」官「オ、くゞ」ト官翁又老爺形になる。遊「與三
右衛門、わりや花満一家の肩持つて、遊軒を討さう討さうとすれど、御勅使の添人關白一人の

も同然、何奴も這奴も身に指でもさすと、胴と首との生別れだぞ」ト縫之助みのきにあてよ
云ふ。遊「コレヤ早いぞ、サ大内より御沙汰の無い中は早、イザ早御機嫌をお直し下さり
ませう」遊「うぬ」ト與三右衛門を切らうとする。遊「コレヤくゞ遊軒、一旦の腹立はあれども、
官翁が身に凶事無い事、もう了簡してやれ」遊「這奴踏のめせ」ト砂場へ蹴る、侍、與三右
衛門を踏む。遊「もう可いく、是より拙者が手前で茶を差上げませう」ト官翁を見て。遊「親
人何さつしやる」官「何かは知らぬが、いかふ痒い事ぢやてい」遊「お勅使には先づ奥へ」與「方々
參れ」遊「仕丁ども休め」官「いかふ痒い事ではある」ト唄になる、辨の中將、遊軒、官翁入る。
みゆき「コレ與三右衛門の大腰抜、今のは何ぢや、今の様に踏打擲に逢うても、こなさんは無念
には無いが、エ、此方はなう、爾ういふ此方の心底とは知らず、今まで敵討を延したが残念な
わいなう」官「今まで敵討を延したは、遊軒が怖さであつたナ、エ、爾ういふ心とは知らいで便
りにしたが残念なわいなう」みゆき「もう頼の綱も切れ果てた、是より奥へ踏込み遊軒に繩打つて、
禁廷よりお赦しの出るまで、命を取らねば事は済む、サー縫之助様お出なされい」官「ソレ一時
も早う」ト此内遊軒聞いて居る。與「ヤレ待て、遊軒ばかりは搦めうが、辨之作は何とする」
遊「みゆき」何と」與「女房木幡首尾はもう好い、起きたくゞ」本與三右衛門殿、首尾好うござります

るか「遊、ま、ま、これは」本、皆與三右衛門殿との相談「奥川浦遊軒方に辨之作匿まひ置く事、草を分つて詮議すれども知れぬこそ道理、あの官翁七十有餘の老人が、人無き所で様々の氣丈、察する處遊軒が家の秘薬、戊の年戌の月戌の日戌の刻に誕生したる女の生血と、血筋の白髪を合せ飲したに極つた」耳まつた源八が娘のお松は行方も知らぬ浪人が生臈を取り、殊に親茂次兵衛が白髪まで「ま、ま、スリヤ其時の浪人は」耳辨之作であつたナ「奥是を消さうには亥の年亥の月亥の日亥の刻に誕生したる女の生血にね、柳「ま、ま、スリヤ先刻のきてふ殿の生血を」奥犬死でない妹が最悟「三人追付知れる辨之作」奥急く處で無い、心を沈めて来い」ト皆々入る、唄になる、遊軒出て。遊大底の奴ではないわい、ト奥より官翁若い男にて出る。耳、辨、扱お上にも殊ない御機嫌只今「遊ヤイ、うぬが其身振は何だ」耳、辨、身共が身振が何としたり「遊うぬが顔水鏡で見をらう」耳、辨、とした事が、扱、何とした」ト老爺がたの臺詞にて手水鉢にて顔を見て。耳、ヤアこりや遊軒様、私は何時の間にも此様になりましたなア「遊、最後の茶をふかく、喫うた故ぢやわい」耳、奥三右衛門が計略に乗つたか、ま、こりやマア如何したものであらうナ「遊もう儂は此屋敷には置かれぬわい」耳、遊軒様、如何ぞ好い思案は有るまいカナ」遊、表門は番人あり、幸ひ水車の樋口、人の見ぬ間に急げ「耳、私は私ぢやが、お前は何となさ

れまする」遊、山が轉けて來ても勅使の添人、花満一家奥三右衛門が首取つて追付行く、人の見ぬ間に急げ「耳、ハツ」ト走り入る、みゆき氣味合あつて遊軒が傍へ行く。遊、みゆき、わりや爰へ何しに來た「ま、ま、わたしやお前に逢に」遊、何ぢや身共に逢に、ハテ好く來たナ「ま、ま、先刻には憎い奴ぢやと思はしやんせうが、わたしや今では憲法様の事は思ひ出した事も無い、お前の事はつかり思うて居るのに。お前胸慾ぢやぞえ、但し又私に惚れたと云はんしたは嘘かえ」遊、スリヤ憲法への貞心捨て、遊軒が心に隨ふか「ま、ま、サア其處が去る者は日々に疎し」遊、いかにも伽さして遣らう、身が氣に入る様に伽はせまい「ま、ま、サアお氣に入らうか入るまいかは知らねども、マア恚う」ト切懸けるを止めて。遊、此様な伽の爲様では、些と間に合はぬ「ま、ま、そんなら恚う」ト又切掛ける、見得よくとまる、縫之助又切懸ける。遊、扱は汝も入込んだなア「耳、みゆき様の嫁人を致しませう」遊、嫁人ならば幾人でもさしてくれう「ま、ま、私も嫁人致しませう」遊、幾人でもささせませう「耳、拙者も嫁人致しませう」遊、幾人でもささせませう「ま、ま、お伽致しませう」ト又切懸ける、見得あつて止る。奥、コリヤ大内から御沙汰も無い中に、備付けると家が立たぬぞ「ま、心を静めてお伽をさしやんせ」ト是より立になる、攻太鼓になり立廻りあつて止る。遊、あの攻太鼓は「奥、さのみ驚かつしやる事は無い、將監を討つて立退いたる

辨之作、今宵水車の樋口より拔出るを、源八、總角兩人致し、川の中にて敵討、天道合さんを行馬となし、小舟を以て取巻き、いかなく動かしは仕らんぞ」遊「ナニ辨之作だ」ト往かうとする、見得になる。遊「寄つたら蹴殺すぞ」與「動くな」ト是より道具舞臺一面に廻る、此内皆立廻り。

道具一面の城、前に水車あり、三十石小舟數多、皆々高提灯にて取巻き、真中に官翁實は辨之作襦袢、源八襦袢、總角白無垢にて立廻り、此内道具廻りあり。

又元の座敷になる、右の見得にて遊軒を與三右衛門、みゆき、小幡、縫之助取巻き元へ戻る、向ふより小市、御書を持ち出る、道具止る。

與「ヤア小市か」小市「ハツ」與「首尾は」小市「御書」與「一方より讀上けい」ト與三右衛門、小市兩人にて讀む。小市「花滿憲法儀は鎌倉の名代として大内に於ての無禮、禁裏を騒がしたる科に依つて、一家残らず滅亡す」與「然るに吟味を遂げ尋ぬる所に、川浦遊軒か悪心の上、憲法が妻女御幸とやらんに戀慕し、御盃も遊軒打破りし由、悉くなれ合たる者どもより白狀、憲法に科無き條一決せり」小市「且又花滿一家紛失の切手差上げし上、淀川上り舟の工夫訴へたる功に依り、昔の所領安堵、加増として家中人別に三十石づつ御加増せしめ、日本廻船の要と致

すべき者也」小市「此度七里半の堤川中へ築き候事、王城へ近道を付けしは、謀叛の萌しと評定極り候事」與「且又川浦遊軒、花滿一家へ下し賜る間、年來の敵、斃殺しに致すべき者也」與「小市仍つて御書如件」皆々「サア遊軒、遁れぬ所ぢや覺悟せい」ト又見得になる、是より道具又々廻る。ト右の辨之作源八總角立して居る、是より道具四五遍も早う廻る。ト見得好く右の屋敷の所にて道具止る、立廻有つて遊軒を縫之助みゆき兩人して殺す、橋懸より源八、總角走り出る。

與「兄者の敵」みゆき「夫の敵」兩人「思ひ知つたか」遊「辨之作も打止めました」與「出來した出來した、是より禁廷へ奏聞せん」みゆき、總「是と云ふも與三右衛門様のお蔭」與「お勅使様は」木「先達てお歸し申しました」與「出來した、敵討は濟んだ、まづ此場は目出たいお立」ト打出し。

三十石燈始終

講讀 伊賀越乘掛合羽

作者 奈河 龜助

目録

一、大序	鎌倉山櫻狩の段	一、貳ツ目	渡邊鞆負屋敷の段
一、三ツ目	城下松原の段	一、四ツ目	上杉館雛祭の段
一、五ツ目	圓覺寺會合の段	一、六ツ目	丹右衛門注進の段
一、七ツ目	木辻廓茶屋の段	一、八ツ目	稻村早替りの段
一、九ツ目	長町傳法屋の段	一、十段目	みちゆき
一、十一段目	櫻田旅宿の段	一、十二段目	歩合羽待伏の段
一、十三段目	道中筋鶏鳴の段	一、十四段目	小田町の段
一、大切	自出度本望敵討段		

明 口

- 一 禿 ぶ で や
- 一 同 い が の
- 一 仲 居 お は る
- 一 あ ら ま き 伴 作
- 一 云 號 お そ の
- 一 丹 右 衛 門 妻 笹 尾
- 一 上 杉 春 太 郎 座 本
- 一 下 人 壹 人
- 一 市 三 郎 松
- 一 富 三 郎
- 一 五 六 八
- 一 桐 山 紋 次
- 一 尾 上 衆 助
- 一 姉 川 大 吉
- 一 嵐 七 三 郎
- 一 同 も じ の
- 一 中 居 お あ き
- 一 傾 城 大 は し
- 一 茂 左 衛 門 娘 お そ で
- 一 渡 邊 静 馬
- 一 澤 井 又 五 郎
- 一 つ ぼ れ 男
- 一 侍 大 ぜ い
- 一 奴 貳 人
- 一 門 代 藏
- 一 三 代 藏
- 一 嵐 松 次 郎
- 一 中 村 健 五 郎
- 一 澤 村 宗 十 郎
- 一 淺 尾 爲 十 郎

造り物上の方に少し幕打、櫻の木あり、むらふ黒幕、上より櫻の枝出てあり、下に土手あり、在郷歌にて幕明く、ト向より上杉春太郎廣袖著流し羽織にて出る、茶びんきれいにしして、鍬の柄に懸けてかたげ出る、跡に大橋傾城の形にてつき出で、かむろ大勢みなく、鋤鍬を持ち出る。

春太郎「罷出でたる者は此あたりの者でござる、それがし屋鋪へかへる様にとおじやれども、こむづかしい事はきらいぢや故、百姓の業をならひ、農業を致さうと存する」大橋「春さん、そりや何の事でござんすぞいなア」春太郎「ハテ又しても家中のものが来て、館へ歸れ〜と拜む、館へ歸れば窮屈で面白くない故に、百姓にならうと思つて、今の様に地狂言でやつたのぢやわい」

大橋「そんなら私も、兎も角もお心任がよからうと存じます」ト地狂言いふ。ふてや「此マア持つて来いといはしやんした物は、何でござんすえ」春太郎「ハテそれは鋤といふ物ぢやわやい〜」の「そんならこれはえ」春太郎「それは鋤というて、地を掘る物ぢやわやい」もこの「地を掘るとどうするのぞござんすえ」春太郎「それで掘つて地を和け、物を作るは農作といふわい、イヤやはり釣狐の格で、此酒といふしなを、どこらへかけて置かうぞ、さらば爰らに懸けて置かうぞ」ト樽茶瓶を程能き處に置く、ところへ橋懸りより荒巻伴作袴にて、家來大勢つれ出る。伴作「これは春太郎さま、お迎ひに参じました、早く御歸館遊ばされませう、われたちは何事ぢや見苦しい、歸れ〜」春太郎「イヤ〜、慮外な奴の、何故俺が前で遊興の妨害をするぞ、今一言いへば手討にするがどうぢや、但しは聞きたうもない諫言か」伴作「サアそれは」春太郎「手討にせうか」伴作「アイヤ〜全く御諫言は仕りませぬ、今日は御趣向につて、お手が痛みますれば、悪しうござりませうと存じ、御手傳を致させませうと存じ、家來ども召連ました、こりや〜、それ手手に此地を掘かへせ〜」家來大勢「畏りました」トみなく大勢、鋤にて舞臺を掘る體して居る、向ふより渡邊静馬袴、大小、澤井又五郎著流し羽織、大小にてつき出る。靜馬「最前も申す通り、御主人上杉家には京都武將の御首尾ます〜よろしく、此度御妹君彌生姫様を、

御弟御春太郎様へ御仲人遊ばされ、近々御輿入を急ぎ申せとの儀、それに春太郎様は一向廓へ御出遊ばされてより、御歸館なく、一家中親どもは申すに及ばず、胸を痛め申します事でござります」ト静馬向を見る。又五郎「御尤でござりまする、拙者も左様存じてから、御機嫌を見合せ、御歸館有る様にとお勧め申す事でござりまする」ト静馬向を見て。静馬「イヤ申し、すなはち春太郎様、あれにお渡りなされまする、よい折柄でござりまする、いざ御出なされませい」ト兩人本舞臺へ直り、静馬威儀を改め。「これは若殿様でござりまするか、まづもちまして御寛體の御尊顔を拜し奉り、有がたう存じまする、つきましては武將足利家より御祝言の儀、頻に致す様と管領の御催促でござりますれば、何卒お館へ御歸還なし下されませうならば」ト春太郎氣色して。春太郎「こりやく、静馬、身が前で控へうと申付け置くに、それは何事ぢや」静馬「イヤ左様でござりませいで、お家のお爲」春太郎「詞を返へす慮外の奴の」ト春太郎立かまり、反打懸る、又五郎中へ入り。又五郎「イヤ、先づお静り下されませう、これサ静馬殿、黙らしやれ」春太郎「イヤ、はなせ」又五郎「イヤ先づお待ち下されませう」ト静馬じつと居る、頸さしのへ控へる。「御諫言なさるはどう致した事ぢや、お詫なされ」静馬「又五郎殿のお執成、忝う存じますれどお爲を申上げそれがお心に障り、お手討になります儀少しも厭ひまする所存

ござりませぬ、元より覺悟仕り居りまする」又五郎「へエ、適々、さすが渡邊頼貞殿の御子息、命を捨ての御諫言、イヤハヤ驚き入りましてござる、殿様には何事も私よろしう取計ひませう間、まづお静り下されませう、さて、驚き入つた事、その御心底を見ましてござる上は、何を隠し申しませう、か様にアノ大橋太夫を揚詰なさる事、全く御放埒でない理があるて」静馬「なんとおつしやる」又五郎「イヤか様に拙者お側に附添ひ詰あつて御意見を申さぬは、拙者ともに不埒の様に思召すでござらうが左様でない」静馬「と申す譯はな」又五郎「サそこぢや、これと申すも拙者が浪人いたした一徳、思ひよらぬ事を承り、あれなる大橋殿事は、先大殿のお湯殿に出生なされたお子でござるわいの」静馬「すりやあの太橋どの」又五郎「必ず御他言なされますな、春太郎様の御妹君でござるわいの」静馬「エ、」ト静馬顔を見合す。大橋「此様に片時離れず、お側に居ても春太郎さんと、微塵も色がましき事はござんせぬわいの」静馬「ハテ存じもよらぬ事を承りましたでござりまする」又五郎「ぢやによつて、か様な譯を聞きながら、其分にすて置かるゝ時は、天知る地知る、終に人の口の端に懸り、忽ちお家の御名の出る事、そこを思召して揚詰になされて、外へ出すまいとおほしめしてござるわいの」静馬「然らば早速お身請をなさるが宜うござりませう」又五郎「サアそこぢや、何を申しても金銀づく、それ故に心を痛め居り

まするて」静馬「それこそは掛屋方へ申し付けて」又五郎「ア、それ／＼、薬袋もない、左様いたす時は、一人が二人の耳へ入り、忽ち一家中の耳に入つて、御恥辱になる、何事も内々にて、どうぞ致し方が、と申して拙者は浪人の身の上、そこ許にはどうぞ御才覺の仕やうはござるまいかな」静馬「私ちやと申して部屋住の分、ハテ何と致したものでござりませうな」ト橋懸りより、亡八屋、揚屋兩人出る。亡八「又五郎さま、それにござりまするか、私は大橋太夫が親方でござりまする、太夫が事は今日外に身請のお客がござりますれば、遣はしたうござりまする、お戻しなされて」又五郎「コリヤ／＼それは何をいふのぢや、先達ていふ通り、大橋殿は外へ出す事はならぬ、それ故の揚詰、ならぬ事ぢやぞ」又五郎「イヤなんほさうおつしやりまして、あけ代難用身の代まで、大金の事でござりますれば、お拂口が鈍うては、うけ込難うござりまする」又五郎「ハテ高のしれた金子、春太郎様はお大名ぢやわやい、何の氣遣な事あつて」亡八「なんほお大名でも、遊廓の事は金銀次第でござります、埒の明かぬ事いうて居る隙はない、太夫おぢや」ト親方つか／＼と上の方へ行く、春太郎反打つ。春太郎「おのれら太夫に指でもさすと、討捨てるぞ」亡八「でもそれは御無體な」ト又五郎中へは入り。又五郎「マア待て、控へて居よ控へ居よ、身共が埒をあける、控へて居よさ」ト亡八屋下へ控へる。「静馬どの、御聞の通り、殿

にはお大名の事のゑ、あの譯も御存じなく、困入りましてござる、ちとそこ許へ御無心がござるが、御聞きなされ下されうかな」静馬「とは何の御用でござりまするな」又五郎「イヤサお借り申したう存じまする」静馬「右申しまする通り、拙者部屋住の儀故」又五郎「イヤ金子ではござらね」静馬「しからばなんと御座りまするな」又五郎「御印形がお借り申したい」静馬「拙者が印形が」又五郎「大橋殿の身請金が千三百兩ばかり、難用が七百兩、都合二千兩と申す金子がなければ、春太郎様のどうも御一分が立ちませぬ、ぢやとまうしても只今金子の才覺と申しては叶ひませぬ、そこで彼等が手前へ、二千兩の金子借用證文、其許の御印形さへなされ下されうなれば、さらりと此場が相済む事、大橋殿の身請をして首尾よく館へ御歸還がござれば、京都より姫君の御粧料として二万兩まるる筈、すりや其内で此二千兩はナ」ト呑込んで居るといふ仕方して「何でもない事でござりまする」静馬「如何さまはや、左様で相済みまする事なら、いかにも」又五郎「なされ下されうか、先以て辱い、こりや／＼廊の者ども、申付けた説文持参したか」亡八「でもお前さまの御印形では」又五郎「されば、それぢやによつて静馬殿へ御印形をお頼み申したワサ」亡八「成程、左様ならば確でござりますれば、則ちこれが説文でござります」ト又五郎とつて披き見る。静馬「文言をちよと」又五郎「いか様、念の爲御聞なされ。一、無

據入用に付金子二千兩借用申候、若し返濟相滞り候はど、先祖を相傳はる武具馬具残らず相渡し申すべく候、後日の爲仍て件の如し、春日や爲五郎どの。かくの通りでござりまする、いやもう此證文の出る様な事はござりませぬ事なれども、ホンの念のためと申すもの」ト矢立あてがひ。「御姓名をなされて」ト静馬名を書き、印形する。静馬「然らばこれで訂しうござりまするか」又五郎「よう御座ります。コリヤ〜證文渡したぞ」ト八「イヤもうこれさへ御座りますれば儘でござりまする、則ちこれが太夫が身請證文でござりまする」ト又五郎披き見て。又五郎「よし〜、如何にも身請證文受取つた、歸れ〜」兩人「左様ならばお暇申しませう」ト兩人入る。又五郎「サアさらりと相濟みました、先づお二人ともに、幕の内へお入りなされませ」春太郎「サア太夫おじや」ト唄になり、春太郎、大橋、又五郎思入して入る、跡に静馬残り居る。静馬「人の身の上と水の流れは知れぬものぢや、アノ大橋が大殿様のお胤であらうといふ事は、てもさても思懸けがない事ぢやナア」ト向の方より、お袖振袖を著流し、お園同様に、兩人ともうちかけにて、跡よりつほね下人つき出て。お袖「おそのさん、なんとマア櫻は見事に咲いた事ぢやござりませぬかいなア」お園「さればでござりまする、此星合寺の櫻の盛りに、御利生あらたな観音様へ歩みを運び、花より勝つた静馬様といふ、美しい花を詠めたいと思つての御

参詣でござんせうがな」お袖「さればでござんす、言號ばかりで、御祝言の遅いを、どうぞ早く女夫になりたいといふ大願、お前も又五郎様と、早う夫婦になりたいといふ願でござんせうがな」お園「取わけて私が殿御又五郎様は、お心悪道な故、親御様の御勘當、何とぞお心も直り、御勘氣もゆり、早う祝言を致します様と、そればかりが願ひでござりまする」トお袖、静馬を見て思入し、本舞臺の方へ行く、大橋幕の蔭より出かける。静馬「思ひも寄りぬ」ト大橋を見て、背の方へかくし。「出まいぞ〜、出まい〜」お園「出まい〜と、なんで御座りますぞいな」静馬「エ、イヤサ出まい〜は、かの爰は鎌倉、サア鎌倉山の星月夜と思つて、あはう鳥が出やうかと、そこで出まい〜でござりまするて」お園「へエそんなら鳥の事であつたかいな、あんな鳥が、可愛い〜といはうかと思ふはな」静馬「エ、」お園「イヤもう、お袖さんとした事が、逢ひたい〜とばかり思つて居て、何をうち〜して。エ、こりや私が悪かつた、どりやわたしや観音様へ、これ二人の衆、おそでさんの御名代に連立つて参る程に、その跡で何もかも打明けて、合點でござんすか」静馬「ハテこれは〜御氣の毒な、左様ならお供致しませう」ト静馬行かうとする、お袖引とめ、お園局男におもひする。お袖「サア御出なされませ」ト三人橋懸へ入る。お袖「申し静馬さま、去とては聞えませぬ、御器量といひ、おこころといひ、

引手数多のお身ぢやよつて、一入私が遺瀨なさ、もしや外にいとほがるお人が出来やうかと、はやう嫁入がしたい事ぢやと、忘れる間とは御ざりませぬわいな、可愛い事ぢやと思召して、どうぞ早う祝言なされて下されませいな」静馬「成程、言號有るそなたの事、思はいではなけれども、御主人の御婚禮のすまぬ中は、家來の身としてどうもさきへは、婚禮はならぬ、さう心得て辛抱しや、そしてマア、門外で人が見まして、猥なといはれては武士が立たぬ、サアサア逝んでたもく」静馬「それ見さしやんせの、偶々あへばそんな惨い事ばかり、わたしやなんほでも、はなしやせぬく」ト取付く。静馬「これ人が見るわいの、去とてはききわけのない」ト大橋中へ入り。大橋「いやらしいそんな事しておくれなえ」ト引ばり、上の方へ行かうとする。静馬「そりやマア何でござりまする、お前は御主人ぢやで、サア今日より春太郎様の御兄弟なれば、私が爲にはお主、其お主がそんな事するもので御座りまするかいな、これお袖、これは大事の事なれど、そなたに咄して聞かす、アノ大橋殿、イヤ様は先大殿様の御胤、春太郎様のためには御妹君様ぢやといの」トこの内荒巻伴作ちよつと出て文をひらふ事有り。静馬「エ、そんならあなたは姫君さまで御座りまするかえ」静馬「しかもたつた今承つたぬくぬくの御姫君様ぢやわいの、其お主様がそんな猥な事する物で御座りまするかいな」大橋「なる

ほど、そんなら俺は主、そなたは家來ぢやの」ト上の方へすわる。「しづま、ヤア。ハイ」大橋「こゝへ來い」静馬「エ、」大橋「爰へおじや」静馬「ハイ」ト手をつく。大橋「爰へきて、わしに取付きや」静馬「エ、」大橋「主の言付ぢや、はやう取付きやいの」静馬「でもそれは」静馬「これ滅相なそんな事、なんほお主様の、いかにしてもそればかりは、よしにしてくださいさんせえ」大橋「わしがいふ事を聞かぬと、大勢の者に言付けて、繩かけさせて抱いて寝るぞ」静馬「これいナア、ちやつとこちへ來て下さんせいナア」大橋「これく主の眼の前で、そんな事はならぬぞ」静馬「ア、驚ひお主でも、わたしや天下はれて女夫の中、ちつとも大事ござりませぬ」大橋「なんほ女夫でもさうはならぬ」ト静馬を兩方へひつばる、又五郎出て見て、思入して引込む、二人の女形あちこちと引ばり、とまりに静馬真中へ轉けて眼の眩うた體、お袖大橋兩人、背後の茶瓶見付け、茶碗につき、一口含む、二人ともに同じ様に、兩方より口うつしを争ふ事いろいろあつて、一度に飲込み、静馬起きあがり、静馬「その中直りの水盃をささうばかり」大橋「そんならわたしも」静馬「わたしも」ト大橋抱付かうとする、又五郎背後から引退ける、みなく、悔り、静馬お袖、幕の内へはいる、大橋ひよんな思入する、又五郎にらむ、顔をかへて。又五郎「ても美しいものではあるぞ、どうもたまらぬ」ト取りつく。大橋「又五郎様、わたし

やなんぢやえ」又五郎「なんぢやとは」大橋「おまへの爲には主ぢやないかいな」又五郎「マアサ其事はちつと様子があつて」ト無理に引こかさうとする、大橋振放し、奥へ逃けて入る、奥よりお袖出る、又五郎悔りしながら、又お袖にぬれかよる。お袖「これ滅相な、わたしや静馬様といふ言號の夫ある身、滅相な」又五郎「なんの滅相」ト文を出し、無理に懐へ入れ、「おれが思ひの數、此文に書いて有る、見てたもく」ト此内嫌がるを、いろく無體にぬれるこなし有り。お袖「此様な滅相な、主の有るものに艶書を付けるといふ事が有るものでござりまするかいな、あはうらしい」ト文投げつける。又五郎「なぜにその様に、ぴんしやんする事ぞい」ト此内お園、局下人つれ、戻りかより見て居る。お袖「わるい事もよい加減な事したがよい、あはうらしい」又五郎「さうつれなういはぬ物ぢや」ト又寄るを。お袖「アレ聲を立てるぞえ、アレ又五郎様が」又五郎「ア、これくじんたいな、聲を立てるといふ様な事が有るものか」トお袖歸うとする、やるまいと引とめる、中へお園入る、顔を見て吃驚する、又五郎をかしき思入。お袖「これはマアお園さん、よい所へ戻つて下さんした、とつとわたしや嫌忌がつて居るものを、あのお方が無理な事ばかり」お園「よいわいな、必ずく堪忍して下さんせ、爰に構はずと早うお歸りなされ」お袖「そんならお園さん」お園「わたしが居るから、氣遣ひな事はござんせぬわいな」

お袖「皆の衆おぢや」トお袖橋懸へ入る。又五郎「おその、そちはこゝへどうして來たのぢや」お園「どうして所か、お前はなぜにその様な惡道な氣を持つて下さんすぞいな、女子さへ見ると無體の戀慕、後家や人の妻ともいはせず、殊にお袖さんはたれぞ、お前のお心故とは言ひながら、親御様の御勘氣を請け、艱難のお身を引受けて、先祖の義理ある澤井家、引興させたいと、一心にお世話なされる渡邊鞆負さまの御子、静馬さまと言號有る、其お方に無體の戀慕、道も法も思はぬお心は、何とした因果な事でござんすぞいな、勘當の赦りぬ内、必ず詞も交すなと、母さまの吩咐、言號ばかりで枕は交さぬ女房ゆる、さう胴欲に思召すか、コレ此様に何時までも、振袖著せて置くお心でござんすぞいな、エ、聞えぬわいな」又五郎「道理ぢや道理ぢや、俺ぢやというてその様にしたい事もなければ、此様に勘當うけて、内證のかがまはらぬによつて、ホンのひだるいによつてぢやわいの」お園「エ、お前は曲もない、どうぞお心を入れ替へて、本心になつてくださんす心はござんせぬかいな、お果なされた父御様や、跡にござる母御様のお心にもなつて見て、惡道な魂を入かへて、御歸參の願をかなへて、親御様へ孝行をつくし、どうぞ早う女夫になされて下さんせ、わたしやかうして死ぬれば、現在の賽の河原の苦しみをするが可愛うはござんすまいがな、ちつとはわたしが心を思ひやつて下さんせい、

手を合せて拜みまするわいな」ト泣く。又五郎「ハ、ア、あやまつた、成程さうぢや、眞實親身な女房の意見、骨身にこたへて忽ち心が入れ變つて、モウくくくふつつりと心を入れかへ、眞人間に成つたわいの」も圓「エ、それやマアほんでござんすかいな」又五郎「誓文く、今迄の事を思へば、勿體なうてならぬわいの」も圓「エ、忝うござりまする、母様に申したら、さぞ御喜びでござんせうわいな」又五郎「サアこれからほんの女夫ぢやによつて、枕とつておじや」も圓「滅相なかど中で、其上ものがたい母様の吩咐は、どうも背かれませぬわいな」又五郎「はてさて其様な愚癡な事いはずと」ト取付く。も圓「エ、コレハわつつけもない、そんな事があるものでござりまするかいな」ト向より姉笹尾襦袢に上帯して、下人一人つれ出る。又五郎「ぢやというてこれが又、たまるものかいの」ト向を見て、南無三姉貴がと、振すて奥へ逃けて入る、笹尾扇をかざしながら、本舞臺へ来て。も圓「これは笹尾様、御参詣でござりまするかいな」笹尾「おそのさん、お前も観音様へ御参詣でござりまするかいな、マア悪道者めが」トいひく文をひろけ、書付も有り、とり上げ袂の下にて讀みながら、相手になり居る、びつくりして「扱こそこれぢやもの」も圓「何を隠しませう、最前から段々様子承りました、もはや身の上に倦ぢはて、さつぱりと心が入れ替り、マアこの様な嬉しい事はござりませぬ、どうぞ此上はお前のお執成

で、御勘當の敷ります様に、お頼み申しますわいな」ト此内笹尾、お園に隠して、片手にて見る、又五郎覗き見て、頭かくこなし有り。笹尾「てもさてもく、見さけはてた、シテ明日は御歸参いたすとの風聞、何ぞ御聞きなされたかえ」も圓「イエその事はなんにも承りませぬ」笹尾「スリヤこれも母をだました工事と見えた、必ずく、逢はしやんしよと、かんまへてひとり歩行など御無用、殊に若いお身のかんまへて一人歩行なされぬがよいぞえ、此様な事を」トいひく袂へ入れる。も圓「それは母様のお指圖ゆゑ、きつと心得て居りますわいな」笹尾「同道いたしませう、サアござんせ」も圓「そんならわたしも、お供申しませう」ト唄になり、兩人橋懸へ入る、又五郎出て神上り。又五郎「エ、ひよんな文を姉貴に拾はれて、マア情ない母に見せるであらうわい、しまひく」ト此時伴作出て。伴作「又五郎、これはアノ大橋めから、静馬への付文と見える、なんでもこれを種に不義者にして、静馬めをしまはせる思案は」ト又五郎とりあけ。又五郎「つれなきしづま様り、こがるゝ大はしより、よし」ト思入して、懐へいれる、内より還御といふ。伴作「御歸館と觸たは、正しく春太郎殿、静馬めも供を致し間道より」又五郎「歸館致すに違ひない、それ」ト兩人思入して向ふへ入る。

幕

二目ツかへし三目ツ

一 清水仙右衛門
 一 古川義平次
 一 荒巻伴作
 一 渡邊静馬
 一 澤井又五郎
 一 佐々木丹右衛門
 一 くるわの物大勢
 一 侍 大勢
 一 乗物 一挺
 一 やつ、こ大ぜい

瀧五郎
 喜十郎
 桐山紋二
 澤村宗十郎
 淺尾爲十郎
 中山來助

一 長谷部五郎藏
 一 神田茂左衛門
 一 上杉右内之助
 一 渡邊靱負
 一 同姓城五郎
 一 醫者 一人
 一 かぶろ二人
 一 下部 一人
 一 同かきて四人
 一 門弟 三人

久五郎
 金十郎
 嵐三十郎
 嵐文五郎
 中村歌右衛門

造り物三間の所大家體、二重舞臺欄間あり、奥塀口横障子有り、橋懸り廊下の反橋、とまりに柴垣、此後高塀、舞臺の前に初より仕掛の松の木矢張り有り、二重舞臺の上に、上の方渡邊靱負惣髪著流し、羽織醫者、靱負の脈を診て居る、つぎに三人劔術の弟子ども古川義平次、長谷部五郎藏、清水仙右衛門、並び居る、此見得にて一面に前へ突出す、道具納まる、ト

醫者「餘程壽症なされた様子に見えまするわいな」仙右衛門「左様でござりませう、萬事心遣ひが多

くござりませう故でござりませうサ」醫者「どうでも左様さうな、御養生なされたがようござりませう」靱負「イヤはや、左様に存するやうでもござらねども、自然と積壽致して、か様ござりませう、宜しく御配劑をお頼み申します」ト又五郎、右の形にて戻りたる體。又五郎「これは御門弟中様、ようこそ御勤めなされます、併し先生の御病氣で、氣の毒に存じまする」義平次「先生御病氣とござれば是非もない儀、併し稽古の儀は、其許御名代に御指南に預りますれば」五郎藏「我々に置きましても、大悅至極に存じまする」又五郎「これは、御挨拶痛み入ります、さて了伯老には、毎日、御苦勞に存じまする、先生病體いかでござりまするな」醫者「イヤはや、さして變りました儀もござらぬが、どうでも心遣ひが多い様子、只今も申す事、去年ら次第に御全快でござりませうサ」又五郎「それは宜しうござりまする」醫者「御樂追付け進上致しませう」又五郎「何分宜しう御加減をなされ下されませう」醫者「委細心得ました、さらば参りませう」又五郎「御出なされませるか、御苦勞でござりまする」ト醫者出て行く、靜馬右の形にて戻り來て。靜馬「これは又五郎どの、御苦勞でござりました」又五郎「靜馬どの、只今お下りかな」靱負「悴歸りしか、シテ春太郎様には如何遊ばされたぞ」靜馬「御機嫌能うお供仕り歸りましてござりまする」靱負「でかしたく」ト侍出て。侍「佐々木丹右衛門様御出でござりまする、お通し申しませうか、如何仕りませうな」靜馬「これ、御案内には及ばぬ事を、いざお通り下されませう

と申せ侍「ハア」ト橋懸へ入る、丹右衛門社袴大小にて出る、又五郎を見て睨み付ける、又五郎氣味悪きこなしにて下へ下る、丹右衛門二重舞臺の上の方に居る。丹右衛門「此度京都足利家の上意として、忝くも主君上杉の御二男へ御婚姻の儀に付、管領職には御上使として御下向の由、家の面目世の聞え、か程の大慶なる儀はござらぬ、然るに聲君春太郎様には、御身持御放埒にして、一向に取所もなき御行跡、それを諫むる心は無くて、却て踊り狂ふ輩ばかり、御家の滅亡遠からじと、氣の毒千萬な儀でござります」又五郎「そりや何といはつしやる儀でござるぞ、お諫め申すに人の指揮は受け申さぬ、その儀に於いては貴殿のお構ひはいらざる儀、只銘の役儀を大切にやるがよい事サ」丹右衛門「ハアこれや異な事がお耳に障りまして、拙者が申すは、村添ひ居つて主人を煽上る馬鹿者の事を申すのサ」又五郎「付添ひ居る馬鹿者とは」ト少し鞠負こなしする、又五郎出て。又五郎「イヤ〜此儀はさう思召すは御尤でござりますれど、さう致した事ではない、兎に付け角に付けお身の上を御大切に存せらるゝから」丹右衛門「だまれ〜」又五郎「イヤそこが彼の人の口には」丹右衛門「黙れといふに、何を口を利く、博奕諸勝負にはこり、姪酒に耽り、人間の道を辨へぬ人非人の、畜生同然の奴がいふ事、此身に聞く耳は持たぬぞ、あの様な畜生奴を取込み置き、お世話なさるゝから起る事、親一門に見はなされ、人非人とい

はうか、餘り口口か追まわつて仕舞はつしやるがよいてさ」又五郎「こゝろ悪道にて勘當受けしを合點して、世話致すこの鞠負、人盛なる時は制し、衰へたる時は制せらるゝの習、何とぞ心を改め、再び澤井の家を引興さん爲と存するから、貴殿の様に申しては仁心はないと申すものサ」丹右衛門「サア其仁心は人の上に致す事、彼奴が様な、人でもない畜生に、致すは無益の至り、面を見るも胸が悪い、立つてうせう」又五郎「どりや、御薬でも煎じませうか」ト又五郎氣味悪く奥へはいる、内より御上使と呼ぶ。鞠負「ナニ御上使とや」丹右衛門「表向の御用で有らう、暫くさし控へ、まだ外に申談じたい儀もござれば」鞠負「暫く私が部屋へ御出下され、御休息なされませう」丹右衛門「いか様、左様致さう、イヤ御案内」鞠負「かう御出なされませう」ト唄になり、靜馬丹右衛門奥へ入る。鞠負「たそ衣服社袴を持ちやれ侍「ハア」ト衣装社袴持ち出る、鞠負舞臺にて、衣装社袴を着る。鞠負「門弟中、御案内頼みます」三人「御上使にはイヤお通り下されませう」ト上使神田茂左衛門、荒卷伴作、社袴にて来る。茂左衛門「役目でござれば、罷り通りませう」鞠負「イヤお通りあられませう」ト兩人上へ通る。茂左「此度武將の御媒介を以て、姫君御婚姻の儀、いよく急ぎ婚禮取結ぶべき事、夫につき貴殿所持の正宗の刀、かねて上聞に達し、此度乞ひ受け、聲引出として差上げらるゝ様にとの御所望、貴殿所持の事なれば、大御前の御満

足、これによつて新知千石御加増あらんとの儀、上使の口上斯の通りでござる」伴作「辭退なきうへは、管領へ差上ぐべしとの儀なれば、即ち内見致せとの儀でござるサ」親負「せがれ靜馬、正宗の刀これへ」靜馬「畏りました」ト内より刀箱持ち出る、上使の前に直す、茂左衛門蓋をとり見て吃驚するこなし。茂左「コリヤ、箱の内に刀はない、なんと」みなく「エ、」トびつくりする。親負「せがれ刀はなんと」みなく「サアくくくくどうぢやくくく」ト伴作箱の内より一通とり出し」伴作「何か一通がござる」トひらき見る、よみ上ける。「無據入用に付、金子二千兩借用申し候、若し返濟相滞り候はゞ、先祖より相傳はる武具馬具残らず相渡し申すべく候、後日のため仍て伴の如し。宛名は春日屋爲五郎どの、渡邊靜馬判」ト靜馬驚く。親負「躬こりやどうした譯ぢや、それへ出て様子を申せ、サ、どうぢやくくく」伴作「傾城に打込み、諸は家の寶をぶちこんだものと見える、はて笑止千萬な」親負「サアどうぢやくく」靜馬「サアそれは、一向私存じませぬ事」親負「知らぬといふ事で濟むか、サア眞直に申せ、どうぢやくく」靜馬「此儀は澤井又五郎が存じ居りまする」親負「なんぢや、又五郎が知つてゐるとな、又五郎く」又五郎「此ハアく」ト出しなに、伴作が前へ艶書をおとし向へ出る。靜馬「これ又五郎どの、彼の櫻の馬場での事、サアいうて下されく」又五郎「櫻の馬場、なんぢやばよは居なんだが」靜馬「エ、夫こ

なたの頼ましやつた事を」又五郎「なんぢや頼んだ事は、エ、成程コリヤ頼まにやならぬ、彼の道を掘返し有つた故、其許の御家來を頼み、直させました、なぜに、上使のお通りなさるよに、あの通り掘返し捨ては措かれぬによて、其許の家來衆を頼みましたわサ」靜馬「イヤさうではない」ト靜馬身を揉む。伴作「かねて意見を致したは爰の事サ」靜馬「全く私が身に覺えない事、此金子の儀は。エ、いふまいと申したればどうも。これ又五郎どの、大橋殿の事を、もうどうもかうなつてはいはずには置かれぬ、サア爰で言うて下され、これく言うて下されいの」又五郎「大橋とは兩國橋の事かな」靜馬「はてのう、さうではないわいの」又五郎「さうでなくば何ぢやな」靜馬「エ、もういふまいと誓言は立てたれど、いはねば此場がすまぬ、申しあの大橋と申すはな、お湯殿に御出生なされた大橋殿、大殿のお胤、春太郎様の御妹君でござりまするわいの」親負「合點の行かぬ、親も知らぬ事をそぢがどうして」靜馬「イヤ此儀は又五郎殿が申されましてござりまする」又五郎「イヤこれは迷惑な、いうた覺もない事を」靜馬「ハテお名の出る事故、廓にはおかれませぬと有つて」又五郎「コレく、夫は何の事、口も腐れ、言うた覺はないぞ」ト此内丹右衛門、後の方へ出て居る。伴作「まだ爰に變つた物がござる、しづまさまらぬ、大はしより」ト披露見て「おもひにたへかね一寸しめしり、そもじ様事、をりく廓へ御出なさると折から、

お顔を見るたびく、いとど可愛いと意に思ふばかり、人目のせきに隔てられ、あだにすぎ行くわが思ひ、露程なりと知らせたく、及ばぬ筆にはせらる、めでたくかしこ、大はしより、静馬様参る、扱こそ主君の思ひものと、密通の確な證據、覺ないとはいはれまい」
 静馬「ア、どうぢや、サなんとぢや」
 静馬「サアそれは」
 伴作「其證據は後の事、正宗の有所はどうぢや」
 静馬「ト静馬身をもがき、いろく思入、静馬前へ直り胸倉とり。」
 静馬「チエ、そなたはなう」
 又五郎「なんぢやぞい」
 静馬「口惜いわい」
 又五郎「ト又五郎を突やり、腹切らうとする、丹右衛門その儘止め。」
 丹右「静馬うろたへたか、生害には及ばぬ、マア待たう」
 静馬「でも此申譯かどうも」
 丹右「ハテ現在言譯が有る、併し犬死するか、マア待たう」
 伴作「なんほ最良めされても、主人の相方に不義の科は」
 丹右「イヤ不義でない」
 伴作「これほど確な證據あれば、言譯は立つまいがな」
 丹右「不義でない證據は、則ち其艷書、も一度讀んで見さつしやれ」
 伴作「ト伴作又狀をひらき。」
 伴作「おもひにたへかね一寸示しり、そもじ様事、折々くるわへ御出なされ候折から、お顔を見るたびく、いとどかはいよと心に思ふばかり、人目の間に隔てられ、あだに過ぎ行く我思ひ、露ほどなりと知らせたく、梅が枝のふしくれだつよも。」
 丹右「それく其の文言は大橋より静馬殿への附文、こりやこれ、大橋より慥るよばかり、人目の間に隔てられ、仇に通

ぎ行く我おもひ、露ほどなりとも知らせたくと有るからは、男の方には一向に知らぬ事、さうして密通といふは、男女合體せざれば不義とはいはれず、こよを以て其家の掟をたどすが大法、武士に似合はぬ疎忽の一言、ちと馬鹿くしう存するぞ。傾城大橋め、廓の者ども、此一巻これへ出ませい」
 静馬「ト氣をかへ呼出す。内より大せい」
 静馬「ハア」
 橋懸より大橋傾城の形、禿大勢つき、上の方へ居る、跡より廓の者二人出る、又五郎見て悔りする、出るなというて仕方する、廓の者迷惑するこなしあり。丹右「皆すつと出よく」
 又五郎「ト此内廓の者這うて出る。廓の者これ太夫、それはどうした居すまいぢやぞいの、足を投出してどうぢやぞいの」
 大橋「かうするが廓の習ぢやわいな」
 廓の者「アノ足を投出しましたが足でないといふ證據でござりまする」
 丹右「コリヤ廓の者ども、これ迄静馬殿、廓へ毎度通はれたか、有體に眞直に申せ」
 静馬「ハイ静馬様は、春様の御迎ひに折々御出なされましたばつかかりでござりまする」
 又五郎「それに又、夥多しい金子の入用ぢやな」
 静馬「イヤ左様ではござりませぬ」
 丹右「左様でなくば、金子の行端、眞直に申せ」
 静馬「ハイ」
 又五郎「いふなと思入する、揚屋うぢくしてゐる。」
 丹右「いはねば拷問にかくるが、サア早くいへ」
 静馬「ハイアノイヤ」
 又五郎「ト此内又五郎、いろく止める思入して。」
 丹右「家來ども、其奴に水食はせ」
 家來「立ちをらう」
 又五郎「ハイ申しまする、何を隠しませう、其金子高の、内二分通りは則ちこれ

にござりまする又五郎様のお引きなされまして、残り千三百兩は春太郎様より、太夫が身請金、残りは諸雜用でござりまする」丹右「シテ又この静馬殿の印形の證文はどうぢや」揚屋「すなはち千六百兩、又五郎殿より請取りました故、其證文は又五郎様へ御戻し申しましたでござりまする」丹右「ムウ然らば高二分通りは又五郎へとな」ト又五郎うろくとして、又氣をかへ。又五郎「イヤかうでござりまするわい、春太郎様お使ひ金、餘り大金ゆゑ、少しなりとも儉約を致さんと、惣じて二分引を申付けました、こりや軍陣でも致す事、武士の心懸でござりまする、イヤはや辨慶と申すものは、思の外術ないものなる物ではないぞ」丹右「ムウ殿の御身持、餘り奢の沙汰と存じ、儉約の爲とな、夫れ申付けた物これへ持て」ト大福帳「刀箱、丹右衛門が傍へ出す。「それ廓の者、それへ參つてこれを見よ」ト揚屋起つて仲上り。揚屋「ハイこれは私方の諸色を付けまする當座帳でござりまする」丹右「其方どもを呼寄せ、跡へ役儀の者を遣はし、此方へ召とり置いたわやい、何れも方は御意見の爲、折々廓へござる衆中なれば、立寄つて見物なされい」ト清水仙右衛門帳面開き見て悔りし、又五郎と顔見合はせ、おもひ入。仙右「これは」丹右「どうかな」仙右「四貫六百目、三月三日、太夫三十人、丸裸にして、足で貝踏む沙千の趣向、跡を六人にて念佛がかりになされ、少々傷摺など出来、赤濱藥赤松様から藥代とも」ト

うぢ〜よむ。丹右「シテその宛名はな」仙右「清水仙右衛門様」丹右「確か其許のお名ではないか」仙右「左様でござりまする」丹右「足で貝踏む沙千の趣向とは、ハテ結構な御けんな、管領の御耳へ入つたらば、さぞ一廉の御褒美でござらうサ、ナニ次を代つて讀んでござらうじ」ト長谷部五郎藏出て帳面ひらく。五郎藏「三貫七百目、すつほん三十六鍋、並に總揚入用とも」丹右「其宛名は」五郎藏「長谷部五郎藏」丹右「長谷部五郎藏とはどれかな」五郎藏「さればでござりまする」丹右「其許では無かつたか」五郎藏「如何にも拙者」丹右「イヤはや夥しいほうしよくな、つぎを讀んで御覽じ」ト古川義平次出て帳面を見る。義平次「貳貫八百目、人形其外、家内の者へ付とどけの入用、古川儀平次様、メ百貳貫目、金にして貳千兩の内、四百兩は又五郎様へ運上、残り金千六百兩請取申し候」禿甲「わたしらも人形やら」禿乙「香箱やら、貰うたわいな」丹右「すなはち其許の宛名、何れも此分お上へ聞え、首が胴に著いてあらうと思はつしやるか」大膳「扱も氣の毒な事を聞きましてござんす、どうぞお名の出ぬ様に、濟して上げまして下されませ」丹右「廓の者ども、重ねて呼出す事も有らう、今日は皆連歸れ」廓の者「ハア有難うござりまする、サア太夫おじや」大膳「ホンニ静馬様、つれなかつたと思うたが、結局今日は嬉しいわいな」ト静馬を見て思入し、みなく橋懸へ入る。伊作「なんほ丹右衛門殿最辰に召れても、静馬放埒

の言譯は立つまい」丹右「ハテ扱、其許は上使の役、拙者は吟味致すが役目、要ざるお構なく、控へてござれサ」茂左「シテ正宗の事が肝心の御用、ないというては」伴作「言譯は立つまい」丹右「正宗の刀、お目に懸けませう」ト刀箱袋入ほうざや出す、皆々恠りする、丹右衛門、茂左衛門へ渡す、茂左衛門抜き、改め見る。茂左「如何にも相違ござりませぬ」ト鞆負へ渡す、鞆負受取り伴作との間に置く、伴作取らうとする、鞆負右の脇へ取直す。茂左「上使の役目相濟んだれば、拙者どもはお暇申さう、いよく相違なく獻上致されてよからう」鞆負「委細畏り奉りましてござりまする」丹右「御上使御苦勞」ト伴作、茂左衛門橋懸へ入る、ト唄になり丹右衛門跡へなほる。鞆負「又五郎それへく」又五郎「へい」ト又五郎思入して、鞆負の前へ坐る。鞆負「又五郎、明日に歸參との事、これ迄は先祖の恩を思ひ、世話に致したれども、最早只今が限り、何方へなりとも行きやれ」又五郎「へエ、スリヤ今歸れとな」ト又五郎いろく思入して「へ、へ、へ、世話にするくと何が世話、人の世話をするといふものは、ちと腹腸に餘裕がなければならぬものぢや、何ぢややら別事でもない事を落度に出すのかい、その様な小さい蚤の糞丸つと切にした様な根性で、人の世話がなるものかい、明日は御歸參なさるよさうな、これまでは永々御逗留なされて、辱ないと衣服大小などを揃へ、これは餞別でござる、千鶴萬龜おめで

たう存じまするといふべき筈、餞別するが悲しさに、何でもない事に物言つけて、只今が限ぢや、なんぢやい、明日から歸參すれば七百石取のオ、澤井又五郎様ぢや、忌々しい、こんな汚い屋敷は嫌ひぢや、大べらほうめらめが、いぬるわい、奴覺えてけつかりやあがれ、こんな鼻汁垂めが」ト行かうとする、此内丹右衛門、文箱を持つて。丹右「又五郎まで」又五郎「なんぞ用かい」丹右「餞別致さう」ト丹右衛門文箱を又五郎に渡す。又五郎「ホウすりやしほらしいわい、志は木葉も包めぢや、請けて遣らう」ト持ち行かうとする。丹右「又五郎待て、志の餞別を、内も開かず持歸るは無禮であらうぞ」又五郎「どりや何ぢや見やうか」ト又五郎開き見て、一通を出して「金千六百兩、正宗刀一腰、置ぬし澤井又五郎」ト恠りする。丹右「こりやこれ正宗の刀を盗出し、質物に入れた返り證文、とてもものにまだよい餞別が爰に有る」ト懐中より艶書を出し「夢現とも幻とも、憧れくてそめり、小夜衣とは片いちぢな思付、そもじ故なら吾心、割つて見せたやふたまた五郎、竹に契ひし事も徒に、渡邊家へ言號とは、片腕切られし心地、ぐんにやりとなえる又五郎が思ひをかへてくれの鐘く、したよめ置り、トト、こがるよ又五郎、おそ様り。こりやこれ靜馬殿の言號、お袖殿の事、女房笹尾、此二通を拾ひ歸りしを見るより南無三寶と、質屋々々へ配符を巡らし、早速此方へ請返した正宗、これを恩有る鞆負殿の子息、靜

馬が過失になし、其上かやうのお袖殿へ不義の斃書、こな人非人めが」ト又五郎じゆつなき思入。又五郎「イヤそのおそ様は」丹右「おそ様は」又五郎「其おそ様はお袖ぢやない」丹右「なんと」又五郎「オ、おそ様といへばお袖が事かい、其おそ様はお園が事、おれが言號のオ、お園が事ぢやわい」丹右「癡呆者めが、お園はそちが言號の女房、其女房へ付文する者が有るかいいい」又五郎「ハテお園は言號ばかりで、母が厳しうてつひに寝た夜もない、面胞だらけになつて居るに依て、不惑さにそこで心地ゆかしやつたのサ」丹右「いはして置けば方圖のない、こな大盗人、イヤ大驅めが」又五郎「大盗人とは何でいふ」丹右「おのれ正宗の刀を盗み出し、静馬殿を科に落し腹切らせんと、恩を仇で報ずる思案、何と盗人騙であるまいか、恩を知らぬは畜生、畜生に似合うた様に頭を剃り、門々へ立まはり、物貰はせたが畜生に相應、こな人非人、四つ足め、こなどう畜生めが」又五郎「そりや何を吐すのぢや、その正宗の刀は、おれがのぢや、元來澤井の家の重寶ぢやよつて、澤井正宗といはぬか、おれが物をおれが盗み、天地に點の打人はない、これから正宗はおれが差上げ、千石の加増はおれがしてやるのぢや、さう思うてけつかれ」ト行かうとする。ト丹右衛門又五郎少々立廻あつて、とど首筋を捉へ、扇にて散々に打擲する。丹右「チエ、おのれ大罪人めが、鞆負殿には先祖の儀を思召し、うぬが様な人非人を、何卒本心に矯直

し、澤井の家を續がせんと、劔術鍛錬に心を碎き、寢食を忘れ、介抱有るその大恩は、幾許の事ぞと思ふぞ、剩へ其大恩有る鞆負殿の子息に、腹切らせんと工む大悪人、寸々にしても飽足らぬ奴ぢやわい」ト扇にて散々にたよき。「人中で面縛させうと、どう骨を改めんと思ひしが、上使の手前を憚り、差控へたが悔しいわい、うぬが如な畜生に、いへ家に乞はわりもなく悔しい、娑婆に置くは人の仇、いつそ討放して」ト斬らうとする、鞆負引退け。鞆負「まづ、御了簡、何事も腹立の程拙者に面じ、今日はまづ御了簡に預りませう、如何さまはや、かひ飼ふ犬に手を喰はるとは此事、コリヤ又五郎、今忽ち丹右衛門殿の刀下に落つる此首、著置くは先祖への恩返し、又も冥加に叶ふ師の御恩と思ひ、と申して心を入れかへ、誠の武士になる所存はないか、エ、淺ましい性根ぢやな、家の相續覺束ない、どせう骨に覺えて居らうぞ」ト此内扇にて叩き意見する、又五郎立あがり。又五郎「なんといふのぢや、家の相續覺束ない、何が覺束ない。コリヤえらい事をいうたぞよ、口の端に御番所がないと思つて、大きな事を申上けるわい、澤井の家は劔術を以て立つる家、立つか立たぬか見せうわい」鞆負「渡邊澤井は神道神影の兩家、心に心術なくては覺束ないく」ト又五郎起つて松の木の前へ行き、刀を抜き振上げ、又左の手にもちなほし、一打に斜に松の枝を三本伐り、刀を納め、松の枝を鞆負等が鼻の

先へ突付ける。又五郎「左の手で此通りに、斜に伐つて落した手の内、なんと膽が潰れうが」
 事見事、天晴手の裡」ト鞆負又松の許へ行き、刀を抜き、峯打にて松の枝を切落す、又五郎が
 前へ持行き、刃を用ゆるは拙人、木造り等の致す事、木を伐るに刃は峯を以て打つに、一心を
 定むればはがねに勝る刀のむね打、其方が手の裡の、一心の狂ある故、この如く切口に残す刀
 の目、このやうな事で人の首は切るよものぢやないわい」ト又五郎無念のこなし。又五郎「切れ
 るかきれぬか、人の首ぶつて見せう」鞆負「そりや誰を」又五郎「おのれを」ト鞆負に切付けんと
 抜く、鞆負刀の鑑にて腕を抑へ。鞆負「それではきられぬ」ト又五郎振解き抜く、鞆負抜合せ立
 まはりあり、又五郎が頸へむねをあてる。鞆負「其間には首が落るが」ト又立まはり、又五郎振
 上げる、脇へ胸へ懸けて見えよく止め。「かうなる時は胸板かけて向袈裟、イヤ中々そんな事で
 は、滅多に人が切らるよ者ぢやないわい」ト又五郎口惜しきこなしの立廻になり、鞆負あて
 る、又五郎倒れる、鞆負刀を納め、硯箱を持ち、又五郎が額に犬といふ字を書き、「誠に畜生に
 劣りし魂、犬といふ字が意見の錢別」丹右「鞆負殿には、いよく明朝御教書をさし上げられま
 するか」鞆負「左様でござります」丹右「スリヤ正宗の刀と諸共に」鞆負「委細畏りましてござる」
 丹右「それ國を治めんと欲するものは先づ家を治む」鞆負「家を治めんと欲するものは身を治む」

丹右「御教書は國を治むる一ツの寶、國に盜賊家に鼠、御油断をなされぬが肝要」丹右衛門
 殿の御采配に依て、拙者が身の明り立ち、千萬辱なう存じます」ト五郎藏右の形にて走り出
 て。五郎藏右衛門どの、それに御座りますか、御上使御入國故、何れも御出迎ひのため、御出
 なされてござりまする、はや御出なされませう」丹右「ナニ御上使御入國とや、然らばお暇申さ
 う、静馬殿御同道申ませう」丹右「私も直にお供仕りませう」丹右「ア誠に、心こそ心迷はず心
 なれ」ト又五郎をみて。「心の駒に手綱ゆるすな、必ず御油断」鞆負「承知いたした、丹右衛門
 殿」丹右「鞆負殿」静馬「これより直に」丹右「イヤ御同道」鞆負「おさらば」ト唄になり、丹右衛
 門、静馬向へ入る。鞆負「ハテ何とも油断のならぬ事、最早何時であらう、鶏鳴までは一期の浮
 沈、ハテナア」ト唄にひたり、鞆負はいる、相方になり、又五郎びく／＼氣のつくこなし、息吹
 返し思入、橋の許の手水鉢の水掬ひ飲み悔りし、手水鉢を持ち、水鏡を見て震ひ、口惜き思ひ
 して居る所へ、伴作仙右衛門兩人出て。伴作「又五郎、さぞ口惜しからう、道理／＼、併し折角
 に奪取つた正宗を差上げさせては」ト又五郎立上り、思入して。又五郎「大事な、コレこなたは
 奥へいて」ト伴作に私語く、伴作のみ込み、又仙右衛門にさよやく。「合點か」伴作「然らば奥
 へ」ト兩人ゆけとしかたする、伴作奥へ行く、仙右衛門、又五郎が紋付の羽織をかづき、橋の

後へ隠れる、又五郎邊りを見て尻からける、ト道具半分左の方へ引込み、橋懸の方へ一間ほど、障子屋體出る、橋は中程になり又五郎いろく思入して、橋の板を切ぬく、板を踏落し、又歩行い
て見たり、いろく思入有り、奥の方ばたくくすると、伴作正宗の刀を抜刀にて盗み出る、跡より
靱負追かけ出る、暗がりの體、又五郎透し見て、伴作と代り靱負を橋の方へ誘寄せ、靱負橋を
渡り片足踏込む、又五郎切付ける、橋の下より仙右衛門羽織を被きながら、靱負が足を捉へ居
る、又五郎いろく思入。又五郎「正宗といふものは、能う切れる者ぢやわやい」トぐしやく、突
く、又五郎これより刀の光にて探り、硯箱を尋ねるが、靱負顔へ犬といふ字を書く。「最後の返
報覺えをらう」ト止をさす、刀をふき鞘に納める、ト本の鐵砲の音響く。「あの筒音は」トこ
れより下へ居る。「もう可い」ト仙右衛門出る、トばたく聞える、兩人橋の後へ隠れる、
ト靜馬提燈先に出て来る、血汐にて這る體。靜馬「ハテこれは怪しからぬ血、申し、親人さま、
上使のお乗物へ、何者か鐵砲を打かけました、親人どれにござります」ト橋の方へ来て。「やア
これは親人を何者か」ト下人提燈差出す、又五郎芝垣の側より出て、提燈切おとす、靜馬
下へ跳下りて、仙右衛門を掴む、羽織を遺し兩人向へ走り入る、靜馬見得して羽織を見て。「こ
れが手懸り、それ」ト向へおひかけ入る、チヨンくにて幕、右道具残らず西の方へ引込む。

造り物、向の正面に大手の門前に雁木あり、左右ともに前の方筋邊に土手、惣平舞臺になり、乗物下
しある、高提燈、箱提燈大ぶんあり、茂左衛門社社、善平社社、にて前後を圍み、侍大ぜい乗物
を舞臺の先へ持出る、物見より上杉右内之助顔出し。

右内「ざわくと騒がしい、しづまれ」善平「只今のしほうは」右内「どうと響さしニッ弾、乗物の
戸を打抜きしばかり」茂左「扱は御乗物に中りしばかり、御尊體に」右内「少も過はなかつたわいや
い」善平「正しく打抜きし筒音なれど」右内「イヤ別條はない」茂左「善平へエ、有難う存じます」ト向よ
り澤井城五郎、提燈先に麻社社にて、つか／＼と出て来る。茂左「城五郎どの、早速の御出、主人秋
定無事にござりまする、お喜びなされて下されい」ト合點のいかぬ體にて。城五郎「管領にては
ござらぬな」右内「正しく管領の乗物と、過つて打かけしは、ハテ龜相な奴の」ト城五郎戸を
ひらき見て。城五郎「管領のこの乗物へ、秋定公のめされしは、ハテナア」右内「兼てか様の儀もあ
らんかと、我君と密に代り奉つて」城五郎「代つて御入りなさるとは、先格に承らぬ儀、ハテ怪し
い事かな」右内「もし管領の御乗物へ、斯様な儀あつては、第一貴殿は御無念になりませうが
な」城五郎「ハテ口惜しい」右内「ヤア」城五郎「とてもものに狼藉者を、召捕るゝがお手柄で有らうも
の」右内「テモ」城五郎「まづ以て御忠臣、扱取逃したが無念な」右内「城五郎どの、乗打御免」城五郎「い

づれも御供く、右内「乗物やれ」トみなく乗物かき、向へ入る、ばたくになる、ト又五郎走り出る、城五郎家來提燈さし上げる、又五郎切つて落す、立廻にてみなく入る、城五郎提燈片手にさしつける、又五郎切付ける、城五郎受止め、家來よるを蹴倒し、片手に提燈にて抑へる、又五郎寄る、城五郎扇にて又五郎が顔を隠す。

幕

四ツ目ヨリ返シ六ツ目マデ

腰元小櫻	三代藏	一同若葉	若藏
同山ぶき	仙藏	一同紅葉	菊助
同まつの	富三郎	一同しがらみ	森十郎
安達與兵衛	瀧五郎	一星合段九郎	友十郎
神田茂左衛門	金十郎	一竹の内せいたく	松本次郎三
彌生姫	市川吉太郎	一茂左衛門娘お袖	中村鶴五郎
荒巻伴作	桐山紋次	一進藤のもり之助	中村次郎三
波邊静馬	澤村宗十郎	一細川奥方濱町	花桐豊松
上杉右内之助	嵐三十郎	一又五郎姉笹尾	姉川大吉
佐々木丹右衛門	中山米助	一又五郎母鳴海	淺尾爲十郎
澤井城五郎	中村歌右衛門	一上杉春太郎	大木
乗物四人		一家來大勢	

造り物三間の所、二重舞臺、關間黒塗の竹のふし、半みすつき惣金襴、西手窓、塗の障子家體、東の方妻戸の様なる垣、前櫻の大木真中にて、上杉右内之助兩脇に荒巻伴作、神田茂左衛門、中通り三人みなく鉢巻、靜馬一人社袴にて並居、陣立の見得にて暮あく、法螺太鼓の遠攻。

右内「かたぐ我思ふ仔細有るに依つて、鎌倉榮深寺に澤井城五郎を初め、呢近の諸士ばら、又五郎を隠まひ、剩へ身が家來丹右衛門を騙り、又五郎が母を奪取つたる舉動言語同断、憎つき奴原共に依て丹右衛門は閉門申付け、榮深寺を取巻き、呢近の奴輩、首をならぶる、方々も用意致してよからう」伴作「これは殿の御立腹御尤、未代呢近の者共のよき見せしめでござる」茂左「何さま御尤の儀でござりまする」右内「イヤ靜馬、先達より一家中へ申渡し、みなく斯の通り物の具着せしに、汝一人禮服にて参りし段、所存あつての事か、仔細はなんと」靜馬「こは殿様の御意を背くにはあらねども、此度城五郎榮深寺に取籠りし事の起は同苗穂負、私の意趣を以て、又五郎が討つて立退きし故斯の騒動、申さば又五郎は父の仇、夫しきの儀に殿様御出馬あつては事の破れ、此儀は幾重にも私へ仰付けられ下さらば、又五郎例へ鐵の内に籠るとも、速に討取つて御覽に入れ奉りたう存じまする」伴作「コレく如何に若いとて、出放題の減らず口、先達て殿の仰にて、丹右衛門参られてさへ、手に合はぬ呢近の諸士、夫故にソ

レ丹右衛門は閉門、それに何ぞや蚊蜻蛉見るやうな貴殿、いかぬ事、ア、こりや何か、軍が怖さに敵討呼はりの辻口上か、ア、置れい、家中一同に陣立の中へ、のぶくと社衾、しつかい奉加場の世話やきを見る様ナ、ハ、ハ、ハ、ハ、」驛馬「ヤア伴作、詞が過ぎる、卑怯でないが、又貴殿には御家の亂を願はるよか」伴作「なにがなんと」驛馬「静謐の御代に、われ、如きの意恨に御出馬あつて管領への申譯はナ」伴作「ヤア猪口才な、すつこんでお居やれ」右内「兩人まで」驛馬「ちやと申して」右内「黙れといはど控へて居よ、汝が詞理有りといへども、左程の事存せぬ右内之助でもない、又五郎が事は格別、外に思ふ仔細あれば、是非出陣は我方寸にある、ナニ伴作、時刻うつる馬牽かせよ」伴作「ハア、御家來衆、御馬の用意」家來「ハア、」といふ、花道戸屋の内より丹右衛門。丹右「待つた、しばらく」と花道より丹右衛門社衾にて出る、前後半切の捕手四人、十手にて取巻き、花道に少々立あつて「仔細あつて御前へ行く丹右衛門、止立ひろくと蹴つて、蹴殺すぞ」トつかくと右内之助が前に坐す。伴作「ヤア丹右衛門、閉門の身を以て御前へ推參不禮千萬、そこ立召され、ソレ家來衆、丹右衛門を引立てめされ」家來「立たう」ト懸る、少々立あつて投退け。丹右「閉門も遠慮も存じてゐる丹右衛門、立たう歸れなどとはしやらくさい、百年が二百年でも、殿に仔細申上ぐる迄、こゝ一寸も動く者ぢや

「こゝらぬ」伴作「推參な、ソリヤ」ト立あがり。右内「丹右衛門、左程の汝、なぜ先達て又五郎を召捕に遣はせし時、なぜはかられて母は奪取られた」丹右「其儀は拙者了簡あつて、其儘に罷歸りしは、かへつて事を計るの方便」右内「やアぬけ、そこ立去らぬか、アレ家來ども丹右衛門を引立てよ」家來「御意ぢや立たう」と引立にかゝる、丹右衛門居り、立ながらにて見得、伴作立懸り。伴作「軍の血祭」ト切かける、立廻にて丹右衛門あてる、ウントこける。右内「某が詞を背くは手向ひか」丹右「ハ、ハ、ハ、ハ、神もつてお手向は仕りませぬ、何卒此度の御出馬は思召とまりの段、只管願ひ奉りまする」右内「遮つてわが出馬を止める仔細はいかに」丹右「甲冑の御姿にて、御出馬あらば、足利への聞え、此所を篤と御勘辨遊ばされ下さりませうならば、有難う存じ奉りまする」ト花道戸屋の内より内にて「管領の御入」ト右内之助驚き。右内「ハテ心得ぬ管領の御入、對面は事むづかしい、間道より出馬せん、方々參れ」ト内へ入らんとする、丹右衛門驛馬引とめ。丹右「管領の御入、有無の御對面なく、御出馬あらば」驛馬「足利家へ敵對給ふと申すも知れず」丹右「是非御對面を遊ばされ、然るべう存じまする」ト兩人止る、右内之助思案して。右内「丹右衛門驛馬兩人の詞尤、此儘にて對面せうわい」驛馬「御聞届け遊ばされ有がたう存じ奉りまする」丹右「併し管領へ物の具にて御對面」驛馬「取も直さず君の瑕

「丹右」何卒御禮服に召かへられて「勝馬」御對面然るべう「丹右」存じ奉りまする「右内」もつとも管領へ對面の上「丹右」御心にかなひし其時には「勝馬」何卒御出馬「右内」思止る、もし又管領の詞心に合はずば「丹右」その時こそ御出馬「勝馬」われくも御供「右内」其詞に相違はないか「丹右」諷り申さば弓矢神の「兩人」御爵を蒙り奉りまする「右内」ヤア女子ども衣服社衶「ト女中方みなく、臺に衣服社衶を載せ持出る、右内之助著かへる、其外茂左衛門中通りの衆みなみなきかへる、ト靜馬丹右衛門立寄り、遠攻に聞耳して。丹右」アノ螺貝太鼓は「勝馬」御家中を集むる合圖「丹右」ハテさて管領の御入騒がしい、無用と申し渡されよ「勝馬」畏つてござりまする」ト走り入る、ほら太鼓止む、丹右衛門四邊を見て、伴作に活を入れる、伴作起上り。伴作「何ぢや、何の事ぢや、時刻延引致す、丹右衛門にお構なくとも早くお立」ト見かへし、びつくりして「こりや何事でござりまする」丹右「これお身の身體に魂はないか、管領の御入、貴殿も衣服を更め召され、それとも思なら勝手次第に召され」伴作「ア、イヤく、此中に吾等ばかり、此様な形で居たら、葬禮中へ練物の入つた様にある」ト伴作衣裳社衶に著かへる、みなみな出迎ふ。丹右「管領職にはこれへ御通り下されませう」ト序立の鳴物にて、花道より彌生姫白統の著付、襦袢白練のかづき、細川奥方浴町、襦袢下髪、お袖著付、襦袢にて、三寶に紙離

をのせ持ち、腰元しがらみも同じ形にて、三寶に紙離を載せもち、其外せいがい六人ばかり、銘々離の道具持出、花道にとまり。右内「これは政元殿と思の外、女連の此有様は」酒町「管領細川齋政元が名代」右内「してお名はナ」酒町「政元が妻濱町と申す者でござる」丹右「御上使様には御苦勞千萬に存じ奉りまする」右内「いざ先づ御座へ御通り下されませう」ト濱町彌生姫お袖しがらみ、其外腰元みなく、並よくならぶ。右内「思ひよらざる今日の御上使、委細承りたうまじまする」酒町「先だつて春太郎殿、此館へ参られしと聞きし故、春太郎への御上使」右内「誰か有る、春太郎を召連れよ」勝馬「ハ、」ト靜馬走り行き、春太郎を連れ出で。春太郎「イヤイヤ矢張りおりや鎌倉にゐて、酒飲んで遊ぶのがよいわいやい」右内「こりやく御上使なるぞ」春太郎「ナニ御上使様とな」右内「ひかへよ」春太郎「ハア、彌生姫、春太郎様とはあなたかや」酒町「さやうでござりまする」春太郎「恐れながら、さうおつしやるは誰方様な」酒町「東山前の武將の姫君、彌生姫様でござる」右内「ナニ彌生姫とナ」酒町「先だつて御言號有りながら、御婚禮も延引に及ぶゆゑ、姫君さまよく」と御物案じの體見るに忍びず、夫齋申付けし今日の計ひ「彌生」不束なみづから、どうでお氣に入るまいなれど、見ぬ戀に憧憬れ、今日の今お顔を見たら恥かしうて、嬉しいわいのう」酒町「御道理でござりまする、私とてもお顔を見たら、お嬉しいうござり

まする」静馬「そなたは爰へはどうして」實町「そちや渡邊静馬ぢやナ」静馬「左様でござりまする」實町「苦しうない近うく、様子あつてお袖が願に依て、評定あつて此度の御祝言の承つて、わけ有る様子、殊に許嫁とやら、是とても管領の御指揮」トいふ、お袖嬉しがる仕打。
 お袖「そんなら私も静馬様と、祝言を致しますのでござりまするかえ」實町「オ、改つた喜びやう、アノ嬉しさうな事わいのう」お袖申し静馬さま、早うお請申して下さりませいな」静馬「親人お果なされて未だ喪の内、どうも此儀は御請申されませぬ」お袖「エ、何おつしやるぞいなア」
 静馬「ぢやというて、早速お請は」春太郎「オ、それく、此祝言すれば跡目相續せねばならず、アいやく、やつぱり鎌倉に居りまするが、私が勝手にござりまする」右内「コリヤく、弟、控へて居ようぞ」春太郎「ハア、」實町「お袖しがらみ、言付けた通り計らうてよからう」お袖「しがらみ」ハア、」ト兩人、三寶をもち出、男雛を載せて、春太郎静馬の前に直し置く。實町「改めて管領細川齋政元より、心をこめたる此男雛、とりも直さず武將よりのこの賜物、有難うお請け申してよからう」右内「御上使の一通り承りたい、委細承知は仕れども、拙者儀、別腹の弟、春太郎は本妻ばら殊に他領、それゆゑ弟へ跡目相續の御願ひ申上げし所、彌生姫を下し置かれんとの御意、則御望に任せ正宗の刀、結納のしるしに差上げよと有るゆゑ、我家來渡邊頼負と申す者

所持致すにより、千石の加増申付け、差上げよと言付けし處に、かの又五郎、右の正宗を盗取り、剩へ頼負を殺し立退きし曲者を、同苗城五郎と申すもの昵近の武士を語り、榮深寺に立籠り妨をなす、さるによつて先達て、昵近の諸士を某に下しおかれよと願ひし所に有無の御返答もなく、押て祝言といひ、女の童に道具を持たせ、侍たるもの一人も見えず、餘り上杉を踏付けたなされかた、この婚禮改めて變改仕るぞ」實町「得心はござらぬよな」右内「お尋ねに及ばぬ事さ」彌生「濱まぢらば」ト彌生自害するといふ、濱町抑へ。實町「まづくお待ちあそばされませ」トとめる。伴作「この祝言變替とは御尤に存じまする、最前より此所に差控へ居りまするは、女雛男雛祝言などと、上杉の物共を癡呆者になさるよ上使」右内「おもちひ有る昵近の諸士、首を並べてその上で御祝言致させませう」實町「さうおつしやると此姫君は、御生害をなさるよかや」彌生「南無あみだ佛」ト又自害せうとする。實町「マアくお待なされませ」彌生「はなして殺して下されいのう」實町「御生害には及びませぬ、御生害遊ばす姫君は外にござりまするわいなア」彌生「外に有るとはや」實町「則これこの姫君の御生害でござりまするわいな」ト女雛をとり、懷劍にて突かうとする。伴作「その雛に生害とは、ハ、ハ、ハ」實町「嘲るそちは雛祭の事知つてゐるか」伴作「しれた事、内裡の形を祭る故サ」實町「大内に雛祭はない